
真・恋姫＋無双-萌えなる乙女と、賑やかなる日々を-

月千一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 - 萌えなる乙女と、賑やかなる日々を -

【Nコード】

N3031V

【作者名】

月千一夜

【あらすじ】

“萌将伝”を舞台にした、基本“一話完結”の物語を載せていきますw

要するに、短編集のようなものでしょうか？

まあ、幾つか続くお話もありますがw

“TINAMI”に投稿したことから、こっちでの作品まで

様々な種類の物語を載せていく予定ですw

基本、どたばたなコメディw

それでは、お楽しみくださいw

prologue 賑やかな日々が始まり (前書き)

このお話は、今作に為に“書き下ろしたお話”です
短いですが、少しでもお楽しみいただけたら嬉しいですww

prologue 賑やかな日々が始まり

“ 三国時代 ”

劉備玄德が治める “ 蜀 ”

曹操孟徳が治める “ 魏 ”

孫策伯符が治める “ 呉 ”

この三国が天下を求め、互いに争い合つた厳しい時代
そんな時代も、いつしか終わりを迎えることとなる

その結末は、三国による同盟という誰もが予想しなかつた結末であ
つた

今まで争っていたはずの三国が、互いに手をとり歩もうというのだ
誰が、そのようなことを考え付いただろうか？

いや、一人だけいた

この殺伐とした世界の中
たった一人だけ、存在していた

このように、手をとりあい生きていこうと・・・そう思っていた人
物が

その者の名は、“ 北郷一刀 ”
乱世を終わらせる為に、天より舞い降りたとされる “ 天の御遣い ”
である

彼は争う三国の者達の心を動かし、乱世を終わらせるに至ったのだ
どうやって？

そう言われれば、コメントに困ってしまうのだが
後の教科書に載せられた彼の“異名”・・・“天の種馬”という名
から、察してほしい

とにかく、乱世は終わったのだ

それから彼は平和の象徴とされ、いつまでも平和が続くことを願
三国の中心に造られた都を治めることとなったのだ

これは、三国の中心に都が造られてからしばらく経ったころ
その都に集まった、幾人もの恋する乙女と
そんな彼女たちの愛を受け止め暮らす一人の青年との

賑やかな日々の中、紡がれていく物語である

「ご主人様、失礼します」

“コンコン”と、軽快な音が響き渡る

一人の少女が、扉をノックした音である

その少女は真つ黒な美しい髪をした所謂美少女であった

彼女の名前は関羽・・・真名を愛紗

三国のうちの一国、蜀が誇る大將軍である

さて、そんな彼女

手には幾つもの書簡を抱えており、よく見れば若干疲れたような表情をしていた

無理もない

乱世が終わったとはいえ、まだまだやるべきことはたくさんあるのだ

彼女が抱える書簡もまた、そのうちの一つ

彼女はソレを、“彼”に届けに来たのだ

しかし・・・

「ご主人様？」

肝心の“彼”からの返事がない

“おかしい”

そう思い、再びノックをするが・・・状況は変わらない

“眠っておられるのだろうか？”

そう思い、苦笑してしまう

平和の象徴として、“彼”にはやるべき仕事は山ほどあったのだ

その疲れのせいで、眠っているのでは？
彼女はそう思ったのだ
故に、彼女は書簡だけ置いて行こうと思えば開いた

「ご主人様、失礼しま……す……」

そして、絶句した

言葉を失ってしまったのだ
目の前に広がる光景に、だ

「これ、は……?」

彼女の目の前

そこには、幾重にも積み重ねられた書簡の“塔”が見える
その形はまさに、“ジェンガ”のようであった
それだけなら、まだいい
肝心なのは、“いないということだ”
“誰が？”などは、言わずともわかるだろう
この部屋は、“彼”の部屋なのだから……

「ご、御主人様あああああああ……!!!」

“また”ですか、ごるあああああああ……!!!」

瞬間、響き渡る怒声

その叫び声は“開け放たれた窓”から外へと飛出し、どこまでも広がる青空まで届き

彼の・・・“北郷一刀”の脱走が初犯ではないことを、大げさに知らせていた

—————
—————

「ヤバい、愛紗にバレた」

そう言っつて冷や汗を流すイケメン・・・俺の名前は北郷一刀
聖フランチェスカに通う、高校二年生だ

というのは、もう大分前のお話になってしまう

今の俺には、乱世を終わらせた“天の御遣い”という大層な肩書があるのだから

さて、そんな俺

今何をしていたかというと・・・

「一刀？

どうしたの・・・？」

全ては、目の前にいる衣服が乱れた少女・・・蓮華が物語っている
だろう

上気した頬、微かに乱れた息

そうです・・・“ナニ”してました、テへ

いや、ふざけてる場合じゃなくってだな・・・

「仕事サボってるのが愛紗にバレた
俺の勘がそう言っている」

「ま、また仕事をサボったの？」

“また”って・・・失礼だなあ

「蓮華、“また”じゃない

そこは“いつも通りに”と言ってくれ」

「尚、悪いわよ!？」

「ですよね、僕もそう思います
それでも、譲れないものがあるんです

「まあ、そんなわけで俺は逃げるよっ！」

「あ、ちよつと一刀!？」

「安心して！」

「続きなら、今夜蓮華の部屋に行くからさっ
」

「違うの、そうじゃなくて……」

「見つけましたよ、御主人様？」

「……ホワイ？」

「愛紗が背後にいるわよって・・・もう遅いわね」

彼女の言うとおりだった

背後から聞こえてきた声に振りかえればそこには、怒れる軍神様のお姿が・・・ああ、怒ってるのかなあ？

「愛紗、一応言い訳を聞いてくれるかな？」

「ええ、何でしょうか？」

「すごく、ムラムラしてたんだ」

「そうです、っか！・・・！！」

言いながら、振り下ろされたのは・・・彼女のシンボルでもある“青龍偃月刀”

ああ、ですよ

言っておいて、僕もこの言い訳はないなあって思います

でもね、愛紗さん

これって、普通に死ぬんじゃないでしょうか？

アッ

――

ああ・・・やっぱり今回もダメだったよ

—————

「懲りないわねえ、一刀も」

「あはは、ご主人様らしいなあ」

そう言つて笑うのは、2人の少女である

劉玄德こと桃香と、曹孟徳こと華琳だった

2人は中庭でお茶を飲みながら、聞えてきた“いつもの声”に頬を緩ませていた

「まったく・・・どうしていつも、仕事を放り出して遊びに行ってしまうのかしら」

「確か、こないだは“自分探しの旅に出る”でその前は、“幼女が俺を呼んでいる”だったけ？」

「因みに、昨日は“最初からクライマックスだぜ”だったわね」

彼女達が言っているのは、愛紗に見つかるたびに一刀が言った言い訳の種類である

何とも豊富な言い訳の数々に、逆に感心してしまう

「あんなんで“乱世を終わらせた天の御遣い”なんて・・・笑える話ね、ほんと」

「ですよねえ」

“でも・・・”と、桃香は笑う

微かに、その頬を赤く染めながら

「そんなご主人様のことが・・・“皆”、大好きなんですよね」

屈託のない笑顔で言う桃香

そんな彼女の言葉に一瞬呆気にとられた後、華琳もフツと微笑を浮かべる

「そうね・・・」

眩き、見あげた空

本日もまた、快晴なり
そう思い、彼女はまた笑っていた

「今日も、良い一日になりそうね・・・」

三国の中心に造られた都

集まるは、恋する乙女たち
その愛を受け止めるは、ひとりの青年

これは、そんな彼らが紡いでいく・・・

萌えなる乙女と、賑やかなる日々からなる物語・・・!!

真・恋姫十無双 - 萌えなる乙女と、賑やかなる日々を -

開十幕

prologue 賑やかな日々が始まり (後書き)

いかがだったでしょうか？

今後の更新に、ご期待くださいw

第1話 恋姫な毎日〜それが、僕らの日常だから〜（前書き）

早速、第1話

本作は、以前に“TINAMI”に投稿したものです

若干な力オスに、平和な日々を描いておりますw

それでは、お楽しみくださいw

第1話 恋姫な毎日〜それが、僕らの日常だから〜

「ん〜・・・！」

背を伸ばし、見つめた窓の向こう

都は今日も快晴だ

そんなことを思い、彼・・・“北郷一刀”は微笑んでいた

「良い天気だな〜」

呟き、彼は寝台から出る

それから、制服へと袖を通した

今日もポリエステルの着心地は最高だ

「さて、今日はとてもいい天気だ

こんな良い天気な日に、コツコツコツコツ机に向い筆を走らせること
とができようか？

否・・・断じて否！！

そんなこと、俺には出来ない！」

（ああ、そうだ

こんな良い天気なんだ

それなのに部屋に籠りつきりなんて、太陽の化身でもある俺には出
来っこない！）

心の中、力強く叫ぶ彼
つまり、彼が何を言いたいのかというところ……

「今日は、お出かけしちゃうぞー……！！」

……こういうことである

“ヒャッハア”と奇声をあげ、拳を天高く突き上げる彼
そんな彼は、気付くことができなかった

「ほう……それは、とても良いことを聞きました」

彼のすぐ背後……青龍偃月刀を構え、ニコニコと笑う“軍神”の
姿に

「あはは、あは……あ、愛紗さん？」

「ええ、愛紗です」

おはようございます、御主人様」

「お、おはようございます」

“ギギギ”と、ゆっくりと振り向いた先

ニコニコと笑う軍神・・・愛紗は可愛らしく、小首を傾げ挨拶をする
そう、あくまで可愛らしくだ

だが何故か、一刀の頬を伝う冷や汗はすでにナイアガラ級だ

「お出かけですか・・・確かに、今日は絶好のお出かけ日和ですね」

「だ、だろ？」

だから・・・」

「ですが御主人様、貴方様が眠っている間に積み上げた書簡が此方にあるのですが

この書簡の山を見てください・・・これを、どう思いますか？」

「すごく・・・大きいです」

天高く積まれた書簡

天井？ 何それ美味しいの？と言わんばかりに積み上げられた書簡
どう考えても、一日でこなせる様な量ではない書簡

「俺・・・この政務が終わったら、書簡と結婚するんだ」

「さあ御主人様、お仕事を始めましょう」

「怜悯、北郷一刀の一日の予定は決定してしまったのだった

恋姫な毎日、それが、僕らの日常だから」

「――――」

「さて、そういっわけ仕事を放りだしてきちゃったわけけど……」

「どういっわけなのかは全く理解できないが、今現在の状況は彼が自

分で言ったとおり

彼は愛紗の目を盗み、執務室を抜け出してきたのだ
それこそ、隠密部隊もビックリの速さで

・
・
因みに、今頃彼女もそのことに気づき探し回っている頃であるが

「しっかし、抜け出したのはいいけど・・・どこに行こうかな
あんまし、城内をウロウロするのは危ないしな

“野生の軍神が現れた”ってなっても、今は手持ちのポケモンは一
匹もないし”

“せめて恋がいてくれればなあ”と、呟く彼

ふとそんな彼の前方から、見覚えのある少女が歩いてくるのが見えた
特徴的なツンツン帽子が、ヒョコヒョコと揺れている
彼はその姿を確認し、大きく手を振って見せた

「おーい、雛里」

「あわ、御主人様？」

一刀の声に、少女・・・雛里は慌てて顔をあげる
それから、トテトテと彼のもとへと歩み寄ってきた

「やあ、雛里

何してたの？」

「えっと、お仕事で聞きたいことがあったので・・・ちよっと、朱里ちゃんのとこに行こうかなと

ご主人様はまた、“政務”をサボって“性務”をしてたんですか？」

「言ってくれるじゃないか、このロリツ娘軍師め」

“あはは”と笑いながら、雛里の頬を引つ張る一刀
それに、彼女は“いひやいでしゅ”と半べそをかいていた

「まったく、俺は悲しいよ雛りん

俺がいつもいつも、仕事を放りだして遊び歩くわけじゃないじゃないか

「っ・・・違うんですか？」

「おい、待てこら

なんですかその“なん・・・だと？”みたいな顔は
いくらなんでも失礼じゃないか？」

「ですが先ほど、“青龍偃月刀を片手にニコニコと笑いながら城内を歩き回る愛紗さん”を見かけたのですが・・・」

「すみません、サボってました」

速攻で、頭を下げる一刀

そんな自身の主の姿に苦笑しつつ、雛里は彼の袖をクイと引く

「大丈夫です

今なら、きつと間に合いますよ

今ならまだご主人様の“息子さんの頸”が飛んでいくだけですから」

「雛りん、それ全然大丈夫じゃないよ」

「大丈夫です

愛紗さんは一流の武人ですから・・・一瞬です」

「いや、だから全然大丈夫じゃないって

その台詞のどこに俺は安心したらいいのさ」

無駄に良い笑顔で、とんでもないことを言いだす雛里
その言葉に、彼は体をブルリと大きく震わせていた

「と、とにかくしばらく顔を合わせないようにしないと

でないと、俺の“天の御遣い”が大変なことになってしまう」

“それじゃ”と、雛里に別れを告げ駆け出す一刀

一刻も早く、城から出よう

そう決めて、彼はひとまず街へと繰り出すことにしたのだった・・・

――――

「お、相変わらず賑やかだなあ」

賑わう都の街中

そんな光景を眺め、彼は笑いながら呟く
時刻は、もうすぐお昼になるところ
そのせいか、人通りも中々多い
その中を、彼は軽い足取りで進んでいく

「ご主人様」

「ん？」

ふいに、そんな彼の背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた
彼はその声に足を止め、スツと振り返る
その視線の先、一人の少女を見つめ微笑みながら

「ご主人様！」

「璃々ちゃんっ！」

名前を呼び、広げた腕の中

少女・・・璃々は、勢いよく飛び込んできた

彼はそれを受け止め、笑顔で抱きかかえる

「こんにちは、璃々ちゃん

今日も可愛いね」

「こんにちは」

ご主人様は、あいかわらず“最低なるりぺど野郎”だね」

「あはは、言ったなこの幼女っ」

「きゃ」

抱き上げ、クルクルと回る一刀

それに対し、璃々は無邪気に笑っている

と、そんな二人のもとに歩み寄る女性の姿があった

「ご主人様、申し訳ありません

うちの璃々が、失礼なことを申したようで・・・」

「紫苑・・・別に気にしなくていいよ

俺、幼女になら何言われてもいいからさ」

「流石ご主人様、広いお心をお持ちなのですね」

“まあね”と、彼は笑った

その爽やかな微笑みに、紫苑は頬を微かに赤く染める

「紫苑は、今日は非番だったの？」

「ええ、そうなんです

ですから、璃々と一緒にお買い物

ご主人様は・・・いつものように、“政務”を放り出して“性務”ですか？」

「待ってください、紫苑さん

俺ってば、そんないつもサボってるみたいに見えますか？」

「ち、違つんですか・・・？」

「違つよ！

もう、俺は悲しいよ！！

どうして、皆してそんなふうにな・・・」

「ですが今しがた、“青龍偃月刀を片手に、獲物を狩るような目で街を練り歩く愛紗ちゃん”を見かけたのですが・・・」

「サボりだよ、悪いかチクショー！！！！！！」

大げさに頭を抱え、彼は叫んだ

その様子を見て、紫苑は“あらあら”と微笑みを浮かべていた

「そもそも、こんな天気な日に部屋に籠ってろっていう方が無理な
んだよ

こんなに良い天気なんだから、やっぱ外に出なくちゃ勿体ないって」

「確かに、今日は本当に良いお天気ですものね」

「だろ？」

こんな日こそ、外に出て街の人々と触れ合わないと
書簡と睨めっこなんてしてる場合じゃないよな、うん」

言って、彼は満足げに頷く

それから、彼は紫苑の手をとり微笑む

「というわけで、俺も一緒にしてもいいかな？」

「あらまあ、デートのお誘いですか？」

「まあね・・・璃々ちゃんも、いいかな？」

「うん！」

璃々、ご主人様も一緒がいい！」

「あらあら、では一緒に行きましょうか」

「そこなくっちゃ」

そう言つて、彼は璃々を自身の肩に乗せる
所謂、肩車というものである
そして空いた手で紫苑の手を握り締め、ゆっくりと歩き出したのだ
った

――――

「しかし、また色々とお店が増えたような気がするんだけど」

「そうですわね

賑やかになつてきましたわ

私たちの頑張りが、実を結んだのでしょう」

言いながら、彼女はフツと微笑む

その微笑みにつられ、彼もまた微笑んだ

「そうかな・・・俺、最近はずっと“政務”よりも“性務”に励んでた気がするんだけど？」

「そこでいきなり正直になられても・・・」

彼のぶつちやけに、紫苑は苦笑を浮かべる
当の本人はというと、涼しい顔で街を見回していた

「まあ、賑やかなのは良いことだよな」

「ええ・・・ですがやはり、人が増えれば色々と問題も起こるようです」

「何かあったの？」

「そこまで大きな事件は、今のところありませんが
些細な言い争いから発展する喧嘩のようなものが最近増えているようですわ」

「そうなのか」

それについても、対策を考えなくちゃいけないよな・・・朱里が

「・・・自分で考える気はないんですね」

「大丈夫だよ」

あの諸葛孔明だよ？

“数日前に桂花の唇にはれない様激から唐辛子を塗ったくるとい
荒業をやったのけた、あの諸葛孔明だよ？”

彼女なら、きつと大丈夫さ」

「ああ、あれはやはりご主人様の差し金だったのですね

気付かずに桂花ちゃんに口づけをした華琳ちゃんが、“はねるしか
覚えていないギャラドス”のように飛び回っていたのが未だに思い
出せます」

「ああ・・・あれは凄かったな

あの華琳が“んぎもつちいいいいいいいい”って叫びながら
飛び回るんだもん

俺、笑いを堪えるのに必死だったよ

秋蘭は爆笑してたけど」

「ええ・・・まさか、秋蘭ちゃんが爆笑するなんて思いませんでし
たわ」

「俺もだよ・・・」

秋蘭のツボって、そこだったんだなあ

どこか遠い目をし、二人は空を見上げる

もはや“思い出”となった出来事を思い出しながら・・・

「あら、一刀と紫苑じゃない」

そんな三人に向い、ふいにかげられた声

その聞き覚えのある声に、一刀は表情を僅かに歪めた

「俺の国にはさ・・・“曹操の噂をしたら、曹操が来る”っていう言葉があつてさ

まさか、本当に来るなんてな」

「そうなの、それは興味深い話ね」

そう言って、現れた少女・・・曹操こと、華琳はクスリと微笑んだ
彼女はそれから、三人の傍まで歩み寄る

「ギャラドス・・・じゃない、華琳は今日非番だったっけ？」

「違うわよ

街の様子を見ておこうと思って

貴方は・・・“政務”を放り出して、“性務”の途中だったのかしら？」

「いや、俺は普通にサボりだけ」

「そんな、堂々と言われても・・・」

“まあ、良いわ”と、彼女は呆れたよう笑う
そんな彼女の姿に微笑みながらも、一刀はあることに気づき眉を顰
めた

「あれ・・・けど、一人で来たのか？」

いつもなら、春蘭か秋蘭が一緒なのに・・・」

「ああ、そのことね

春蘭は今日、軍務での仕事が残ってるってついさっき桂花に怒られ
てたわ」

「ははは、春蘭らしいな」

「秋蘭は、まだ“例の発作”が治まらなくて・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

“まだツボってるんだ”と、一刀は笑いを堪えながら内心で呟く
因みに、彼の隣では紫苑が盛大に嘖き出していた
恐るべしギャラドス

「まあ、華佗に任せてあるから大丈夫でしょうけど早く治ってほしいわね」

「ああ、治るといいな・・・」

「そ、そうですね・・・ぶふっ！」

「紫苑？」

「どうかしたのかしら？」

「い、いえ何でも！」

「ギャラドス・・・華琳ちゃんには、関係のないことだから」

「そ、そうそう！」

「ギャラドス・・・華琳は気にしなくていいよ！うん！」

「そ、そう？」

「なら、いいのだけれど」

“うまく誤魔化せた”と、一刀と紫苑は密かにガッツポーズをするそれに気づくことなく、華琳は“ギャラドスって確か、女神って意味だったかしら？”と一刀の嘘の知識に頬を赤く染めていたのだった彼女が本当の意味に気づいた時、どうなるのかは想像に容易い

「あ、そういえば・・・」

そんな中、何かを思い出したかのように口を開いたのは華琳だった

「愛紗が、一刀のことを探してたわよ」

「愛紗が？」

「いったい、どんな感じだった？」

「そうね・・・“青龍偃月刀を片手に、ハンター（種馬）を狙う飛龍の目をしながら街を練り歩いていた”わ」

「ヤバい、なんかパワーアップしてる

もう絶対に見つかったらヤバいレベルまでパワーアップしてる
下位クエストから、一気にG級までレベルアップしてる」

見つかったら、それはもう大変なことになる

言葉では表せないくらいに、それはもうドエライことになる

一刀はその時のことを想像し、大きく体を震わせていた

「やばい、絶対に捕まったらヤバい

よし、早く逃げようそうしよう

なあ華琳、愛紗のことをどこらへんで見かけたか覚えてる？」

「覚えてるけれど・・・多分、もう意味はないでしょうね」

「え？」

「一体、どういうことだよ？」

「一刀・・・後ろを御覧なさい」

「え・・・？」

言われて、一刀はゆっくりと振り向いていく
世界が、時間が・・・全てが、スローモーションで流れていくよう
な錯覚

“ わかってたさ ”

微笑み、彼は思う

どうせこんなオチだったんだ・・・と
それでも、悔いはない
自分は、最期まで自由だったのだから

けど、だからこそ・・・と、彼は空を見上げながら思った

「空・・・お前が羨ましいよ」

見上げた先、何処までも果てしなく続く蒼天を見つめ
彼は微笑んだ
そして、呟く

目の前で物騒なモノを構え、ニコニコと笑う“軍神”を想い涙を流

しながら

「俺の“サボリ”・・・終わっちゃった」

「さあ御主人様・・・楽しい楽しい、お仕事のお時間ですよ？」

B A D E N D

第1話 恋姫な毎日〜それが、僕らの日常だから〜（後書き）

いかがだったでしょうか？

一刀君がついた嘘は、バレタラ確実に斬首ですねWWW

それでは、またお会いしましょう

第2話 忠犬でいこうっ！〜ワンタフルDay〜(前書き)

こんにちわw

第2話ということで

今作は年初めの連続投稿の折に執筆した作品です

“TINAMI”内にて掲載されましたw

それでは、お楽しみください

第2話 忠犬でいこうっ！〜ワンタフルDay〜

見上げた空

今日は快晴・・・降り注ぐ太陽の光が、何とも心地よい

うん、絶好の警邏日和だ

「良い天気だなあ、風」

「わんっ」

隣を歩く風も、そう思っていたのだろう

ニコニコとしながら、俺の言葉を肯定する

「今日は、気持ちよく警邏できそうだな」

「わんっ」

元気のいい風の返事に、俺は笑顔を浮かべていた
うん、本当にいい天気だ

いい天気すぎて、なんだか涙が出てきそうだよ

「く、くう〜ん？」

「いや、大丈夫だよ風
ちよつと・・・現実から逃げてただけだから」

そうだよな

そろそろ、現実と向き合わないとね

そう自分に言い聞かせ、俺は隣にいる風の方へと視線を向けた

当たり前のことだが、そこにいるのは当然風だ
風なんだけど・・・

「ああ、うん・・・心のどっかで、夢だったらよかったのにとか思
つてた俺の馬鹿」

彼女の格好を見てほしい

彼女は今頭には犬耳をつけ、尻尾までつけている
さらにトドメとばかりに、大きめな首輪が装備されている
その首輪につけられた紐の先は、俺がしっかりと握っていた

「わ、わふ？」

うん、可愛いなあ風は

こういうの、すごい似合うもんね

凧ちゃん、マジ凧ちゃん

でもね……

「街中でこういうことするのは、絶対にダメだと思うんだ……」

そう、ここは街中だ

冒頭で言っていた通り、見事に外で御座います
しかも、これから警邏なんだぜ？

「おい、あれ見てみるよ？」

「また御遣い様が何かやってるぜ」

「お母さん、あれ……」

「こら、見ちゃだめよ!」

「流石……“天の種馬”の名前は伊達じゃねえなあ……」

先生……視線が、すごく痛いです
そして、いつの間にか“天の種馬”にクラスアップしています
はい、嬉しくありません

「う……胃が痛くなってきた」

駄目だ、このままジツとしていても辛いだけだ

「……行こうか、風」

「わん!」

俺の一言に、元気よく返事をしてくれる風

そんな彼女を引き連れながら、俺は街の中を歩いていく

「はぁ……」

こぼれ出た溜め息

俺は頭を抱えながら思った

ああ、どうしてこうなったんだろう……と

忠犬でいこうっ！〜わんだフルDay〜

―――
―――

昨日

それは、城内でささやかな宴をひらいていた時のことだった

「ねえ、一刀

天の国にはさあ、こういう時にお酒を飲みながら楽しめるようなことってないの？」

「お酒を飲みながら楽しめること？」

皆が好きに酒を飲み楽しんでいる中、隣に座る雪蓮がそう言ったのだ
いきなりだなあ・・・

「あら、それは私も興味があるわね」

「華琳まで・・・うーん
お酒飲みながら、楽しめるようなことかあ」

その会話に興味引かれたのか、華琳もこの会話にまじってくる
天の国のことが気になったのだろう
他にも何人か、チラホラとこっちを見てる子もいるし

しかし、何かあったかなあ
そもそも俺って向こうじゃ普通に高校生だったわけで・・・お酒飲
んでワイワイしてたら、犯罪なんですけど
逮捕余裕ですよ？

「うーん・・・」

「ねえ、何かあるでしょ？
もったいぶらずに教えてよ」

別にそんなつもりじゃないんだけど・・・うーん
なんか、あったかあ？

「あ・・・」

・・・あった

一つ、思いつくものがあつたぞ
いや、実際にはやったことないけどさ
よく話は聞くよな・・・お酒を飲みながら楽しめる遊びだって

「えっと、一つ心当たりがあるんだ
こういう時にやる、天の国の遊びなんだけど」

「ええ、なにになに!？」

俺の言葉に、雪蓮が目をキラキラとさせながら食いついてくる
凄い、期待してる目だな

「そんな期待しないでよ
なんか、変に緊張しちゃうじゃないか」

「するわよ

なんたって、天の国の遊びだもんね」

そう言つて、無邪気に笑う雪蓮
その可愛さにクラツときてしまうが、何とか堪えた
いや、だって皆見てるんだもん
華琳なんて、俺の背中を抓ってるしね
ツンデレ、美味しいです
背中、千切れそうだけどねww
ごめん、そろそろ笑えない(痛みで)

さて、冗談は置いてだ
とにかく、言うだけ言ってみるか・・・
そう思い、俺は口を開く

その時は、まだ気づいていなかった

「えっと・・・ “王様ゲーム” っていうんだけど」

この言葉が、あんなことにまで発展してしまうなんて
俺は、気付けなかったんだ

――――十――――

数分後・・・俺は、自身の体の震えを止めることが出来ないうでいた

「な、なんでこんなことに・・・」

眩き、俺は眼前に広がる光景へと目をやる

中心に置かれた、何本もの木の棒

その棒を睨み付けるよう、囲む“修羅”達

ええ、恋姫な皆さんのことです

皆さんご自分の武器を構えたまま、ジッと機会をうかがっております

「王様ゲームって、こんな殺伐としたものだったっけ？」

あれから、簡単にゲームのルールを説明

そんで準備もして、“よし、じゃあ軽くやってみよっか”ってノリでゲームスタート

ていうかその時点で、気付くべきだった

だって皆して一斉に、武器を出し始めるんだもん

その時は、“ま、こんなこともあるよね”ってスルーしちゃってたけど

俺の馬鹿、普通に考えたらおかしいじゃないか

何処の世界に、武器を構えて殺気を出し合う王様ゲームがあるんだよ
いや、目の前にあるんだけどさ

しかし、まさかこんなことになるなんて・・・

「とうとうか、皆してどうやって俺のことをピンポイントで狙ってるんだ？」

特に華琳が恐い

この中では一番王様になった回数が多いうえに、未だピンポイントで俺のことを当ててくる

まだ王様になった子が何人かいないにも関わらず、だあれか、霸王的な補正でもかかっているんじゃないのか？

しかも、命令されることはどれも人前では恥ずかしいことばかりだし

それに対して、俺は未だに王様になれていない

正直もう、桂花以外なら誰でもいいやとか思ってる要するに、捨てゲーですわわかります

まあ桂花以外だったら、割と安全だし・・・

「どうふふ、次こそは私が頂いちゃうわよん」

「ぬぬぬ、儂だって負けんぞい！」

・・・前言撤回！
あいつ等だけは勝たせたら駄目だ！！
俺の貞操的な意味で！

「もう夜も遅い・・・分かってると思うが、次が最後だ」

気持を入れ替えて、俺は静かに言う
その言葉に、皆が無言でうなずいていた
よし・・・

「始めるぞ・・・最後のゲームを」

皆が、無言で棒を引いていく
目を瞑り、棒についている印が見えないように

そして・・・俺を含め、皆が引き終わった

さあ、これで最後だ

「王様・・・だあれだあああああああああ……！！！！！！！！！！」

“カツ！”と、皆が一斉に目を見開く

辺りが、凄まじい程の殺気で包まれた
その殺気に押しつぶされそうになりながらも、俺は自身の持つ棒を
睨み付ける

こい！こい！こい！こい！こい！

「キタ――――――――――！！！！！！！！！！」

叫び、俺は大きくガッツポーズをとっていた
その手に握りしめた棒には、王様を表す王冠のマーク
ついに・・・ついに俺の時代が来たんだ！！！！
ってというか王様になったことよりも、貂蝉や卑弥呼を王様にしなか
ったという事の方が嬉しいんだけどね

「一刀が王様、ねえ」

「うわ、御主人様凄い！」

ともあれ、俺が王様になったということとは紛れもない事実！

つまり、なんでも命令出来ちゃうわけで・・・

「御主人様の命令・・・どうふふ、ワクワクしちゃうわん」

「うむ、僕のハートがムネムネするのだ」

オウ、シット・・・第二の壁が立ちふさがってきたぜ
すっかり忘れてたよ、神様

だ、大丈夫だ

此処には何十人もいるんだ
あの二人をうまくかわして、何とか美味しい思いをしなくては・・・
!

「行くぞ・・・」

俺の言葉に、全員が息を呑んだ

俺はそんな皆の顔を見つめ、すつと棒を前へと突き出した

「三番が・・・犬耳に尻尾をつけて、さらに犬の真似をしながら明日一日中王様について歩く！！！！！」

ザワリと・・・周りが慌ただしくなった
皆が一斉に、自分の番号を確認しただしたのだ
もう皆、目がマジである

「ぐああああああああ、違ったああああああああ！！！！！！」

そう叫びながら膝をついたのは愛紗だ
少し、大げさすぎやしないか？
いや、軍神って言われるくらいだしこれが普通なのか？

「ああん、私じゃないわん！！！」

「ぬっっっっっ、悔しいぞい！！！」

そして、本当に安心しました

よかった・・・バッドエンドは回避したようだ
ていうか、あれ？

「あのさ、三番の子は？」

そう、未だに三番の子が名乗り出ないのだ
この一言に、皆がそれぞれ番号を見せ合いだす
そんな中・・・

「あの・・・私、です」

一人の少女が、恐る恐るといった様子で手を上げたのだ
彼女は・・・

「凧・・・？」

「はい・・・あつ、いえ、わん!!」

「いや、ちょ、明日から！
明日からだからね!!？」

そう・・・三番の女の子は、北郷隊一の“忠犬”
楽進こと凧だったのだ

—————

「……で、現在に至ると」

「わふ？」

「ああ、いや何でもないよ
ただちよつと、昔のことを振り返ってるだけだから」

回想終了

まあ、つまりそういうことだ

事前に“王様の命令は絶対”とか言っちゃったのが不味かった
今日一日は、絶対にこうやって過ごさなくちゃいけないのだ

因みに……先ほどからずっと、“鈴の音さん”と“御猫様I o v
e”が見張っているから不正は絶対にできない

例えば風が間違っ普通にならぶりそうになると、“チリン”と
音がしたり

俺が恥ずかしさのあまり仕事を投げ出そうとすると、“チリン”
と音がしたり

たまに、“御猫様〜”という声が聞こえたり

・・・いや、明命ちゃんと仕事しろよ

まあそんな感じで、彼女たちの監視のもと仕事をしてるわけです

「ま、仕方ないよな」

自分で言ったことだ

それに、凧のこんな可愛い姿が見れたんだ

そう思えば、少しは楽になってきたかな

うん、これが外じゃなければ本当に最高のものに

「ま、早く仕事を終わらせればいいことだよな」

「わん!?!」

「ははは、凧は可愛いなあ」

ていうか、律儀だよね凧って

こんな恥ずかしい命令を、こんな一生懸命になってやってるんだもん

「ああ、そうか・・・」

今更気づいたよ

良く考えたら、俺なんかより凧の方が恥ずかしいんじゃないか？
そうだよ・・・こんな格好で街中を歩き回るんだもん
それなのに、彼女はこんなに頑張ってるんだ
こんなに、一生懸命なんだ

はは、恥ずかしかつてた俺が馬鹿みたいじゃないか

「よっし、凧！」

今日も一日、頑張って仕事するぞ！」

「わふーーーーー！」

二人して、大きな声で叫んでみた
周りからの視線は、先ほどまでとは違い気にならない
ようは、気のもちようなのだ

そう思い、俺たちは二人並んで警邏をしていった・・・

ーーーーー

「ふいー、疲れた」

ドサリと、俺は勢いよくベッドに倒れこむ
その瞬間、仕事が終わったという解放感もあってか一気に眠くなっ
てきた

あゝ、ヤバい・・・このまま寝ちゃいそうだ

「ふあゝ・・・」

「わ、わふ？」

そんな俺の様子を察したのか、凧は可愛らしく首を傾げていた
大方、“私はどうしたらいいのでしょうか？”と聞きたいのだろう

「決まってるだろ

今日はずっと一緒にいなくちゃダメなんだ・・・だから、一緒に寝
るんだよ

それとも、俺と寝るのは嫌？」

「わ、わん！！！！！！」

猛烈に首を横に振ってから、凧は俺の寝台に腰を下ろす
心なしか、耳がピクピク動いてるように見える

「わふ・・・」

や、やべえっす・・・風、可愛いよ風

「も、もう我慢できない！」

いったただきm チリン はい、冗談です！！超冗談です！！」

鈴さんのこと、すっかり忘れてたああああああ！！！！
マジで危なかったああああああ！！！！

今日聴いた鈴の音の中でも、一番近くで聴こえましたよ！？
あと一歩遅かったら、俺の“艶王”が切り落とされてたかもしれないね

しゃ、シャレにならん・・・

「仕方ない・・・今日は、健全に寝よっか」

「わん」

仕方なしに、俺はそのまま風と一緒に寝台の中に入った
そのまま、風の体をギュッと抱きしめる
うん、今日はこれで我慢しよう

「風、おやすみ」

「わん・・・」

ああ、本当に凧は可愛いなあ
俺は、凧の頬を撫でる

凧は、気持ちよさそうに目を細めていた
うん、我慢とか無理だ

「キスくらい、いいよ　チリン　　すみません、言ってみただけ
す」

ちくしょう、判定が厳しすぎるよ思春さん

「はあ、仕方ない・・・朝なら　チリンチリンチリン！！！！　朝
はやっぱ、健全にいけないとね！！
うん、そうしよう！！！！」

うおおおお、めっちゃ鳴ったああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！
今のは、本当にギリギリだったろ！！！！！！
ていうか、屋根裏から殺気がダダ漏れてたもん！！！！！！！！
殺る気満々でしたよね！！！！！！

「はあ・・・寝よ」

「くう〜ん？」

「いや、大丈夫だよ

さあ明日も早いし、もうぐっすりと寝よう

煩惱が湧き出る前に、さっさと寝よう」

「わん」

そう言って、俺たち二人は目を瞑る

直後、ゆっくりと意識が闇に落ちていくような感覚を感じた

ああ、そっか・・・仕事で疲れてたんだ

凧が可愛くて、すっかり忘れてたよ

でもこれなら、案外早く・・・寝れそう・・・

「ぐ〜」

「す〜〜・・・」

翌日

目が覚めた瞬間、俺は犬耳をつけたままで眠る凧の姿に欲情

朝から“いただきます”といこうとした途端、天井から降ってきた

“鈴音”に危うく下半身の“宝慧”を切り落とされそうになりました

・・・思春さん、寝ずの番ご苦労様です

〈後日談〉

「よし、それじゃあ三人とも
早速、警邏に行こうか」

「はいなの〜」

「了解や」

「わん!?!」

――間――

「「「「え?」「」」」

「え、あ、こここここれはその・・・!!!!」

すっかりクセになっていました
可愛いから、いいけどね!!

く完く

第2話 忠犬でいこうっ！〜ワンタフルDay〜(後書き)

さて、いかがだったでしょうか？

僅かでもお楽しみいただければ嬉しいです

それでは、またお会いする日までw

第3話 メンマを求めて何千里！〜星さん、マジ星さん〜(前書き)

ども、3話公開ですw w

今作は“ TINAMI”にて年明けに投稿した作品です

星をメインとした、カオスな作品でありますw

それでは、お楽しみください

第3話 メンマを求めて何千里!?? 星さん、マジ星さん

それは、まだ日も昇らないころ

所謂、深夜というやつだ

今か今かと“け おん”や“恋 ”が始まるのをテレビの前でスタンバってるような時間帯

そんな時間帯に、俺こと“北郷一刀”の部屋に・・・“彼女”は来たんだ

「主、メンマを食べに行きましょう」

こんな、とても深夜に人をたたき起こしてまで言うようなセリフじゃないことを言いながら・・・

「ごめん、もっかい言うてくれる?」

いや、いくら自由人な彼女でもこんなことをいきなり深夜に言うよ
うな子じゃないはずだ

多分あれだ、聞き間違いだっただよ
俺も疲れてたもん

うん、きつとそうだ
そうだと信じt・・・

「主、メンマを愛でに行きましょう」

「信じた俺が馬鹿だったよ」

しかも言い方が、さっきよりも不味くなってるじゃないか
なんなんだよ、メンマを愛でるって

「それはもう“コリコリ”と口の中で感触を楽しんだり、“んぐっ”と飲み込んでみたり“トロトロ”なタレもまた・・・」

「別に、言えつてわけじゃないんだ

あと、そんな自然に心の中を読まないでくれ頼むから」

「おや、主・・・そんなに前かがみになって、いかがしたのですかな？」

くそ、わかってて言ってるだろ絶対

ニヤニヤしてるもん、悪意を感じる笑い方してるもん
いや、仕方ないだろ!?

男なんだもん!

下半身の“御遣い様”だつて反応しちゃうよ!

そんな俺もよそに、彼女は“それでは”と両手を大げさに広げていた
あまりに大げさな動作に、俺は苦笑をもらしてしまふ

そして・・・

「さあ行きましょう・・・至高のメンマを食しに」

この一言が、あまりにも早い今日一日の始まりとなったのだ

メンマを求めて何千里！？！星さん、マジ星さん！

+-----

「いや、ちょっと待て」

「何ですか？」

折角、気分が乗ってきたというのに「

「いや、気分とかもうそんなんどうでもいいから
まさか、今から行くとか言わないよな？」

「今から行くにきまつてるでしょう？」

「外を見てくれ・・・コイツをどう思う？」

俺に言われ、窓の外を眺める星

先ほども言ったが、現在は深夜

当然、外は真つ暗だ

彼女はしばらく無言で見つめた後に、フツと微笑みながら軽く息を吐いた

よかった

わかってくれたみたいd・・・

「すごく・・・メンマです」

「どっつしてそうなった!？」

ダメだ、メンマのことしか頭にないぞコイツ!?
なんだよ、すぐくメンマって!?
お前は夜空に何を見たんだ!?

「うむ、言ったらさらにメンマが食べたくなくなってきましたぞ
やれやれ、主も罪なお人だ」

「え、なにそれ俺のせい?
俺のせいなの?」

「ふふふ、こつしてはおれません
さっそく至高のメンマを食しに行きましょう、今すぐに!」

「だから、まだ深夜だつつの!」

俺のそんな叫びも聞こえていないのか、星はまだ見ぬ“至高のメン
マ”とやらを思い浮かべてるのかニヤニヤとしていた
そのうち“うえっ、うえっww”とか聞こえてきそうな勢いだ

駄目だコイツ・・・早くなんとかしないと!
俺が心の中で、密かにそう決意している時だった・・・

「んん・・・なんだお館、まだ起きてたのか?」

俺の隣・・・膨らんでいた寝台の中、一人の少女がゆっくりと体を起こしてきたのは

「焰耶・・・」

「さっきからなんかうるさいな・・・って、星!!!??」

バツと自身の体を隠し、俺の後ろに隠れる焰耶

言わずもがな、裸である

そっぴや、昨夜は焰耶と・・・星の登場のインパクトのせいで、すっかり忘れてたよ

「ななななんでお前がここに!!!??」

「何でとは、また無粋な

そんなもの、メンマを食す為に決まってるではないか・・・ですよ
ね、主?」

「いや、ないから

“メンマを食べに行こう”って深夜に訪ねてくるとか、まずないから
ら

「貴方の目の前に」

「うん、でも多分君だけだから」

俺の一言に、“そんな馬鹿なww”と笑いだす星
どうしよう、すごいむかつくんだけど

ていうか、焰耶とか話についていけなくてあたふたしてるし・・・
ま、可愛いからいつか

と、そんなことより・・・

「どうしていきなりメンマを食いに行こうなんてことになったんだ
？」

そうだ

いくら星がメンマ好きだからって、こんな深夜にいきなり起こして
まで行こうなんて言わないはずだ・・・多分

・・・すみません、自信ないですww

まあ、何か理由があつてのことだろう

そう思い、俺は彼女にたずねたわけなんですが・・・

「そこに、メンマがあるからです」

「うん、何となく予想してた」

まあ、星だもんね

何となくどころか、実はそうなんじゃないかって軽く確信してたよ

「……というのは、冗談でしょ」

「あれ!？」

今の冗談なの!?!？」

まさかの変化球!？」

いったい、どうしたんだ星!

「主……それは些か、失礼ではないでしょうか？」

私が四六時中、おはようからおやすみまでメンマのことを考えているメンマ女とも思っていたのですか?」

……はい、そうです

とは口が裂けても言えないので、全力で首を横に振っておいた
命大事、絶対

まあ何事も穏便に済ませるに限りますよn……

「何!？」

違うのか!?!？」

焰耶、空気読んでええええええええええええええええ!?!?!!

「っ……ほ、ほほう？」

ほら、星がなんかカチンときてるから！

自分で言っただくせに、かなりカチンときてるから！

普段はあんなにメンマ命なはずなのに、こんな時だけカチンときてるから！

「私はてつきり、そうだとばかり思っていた

“このメンマ汁女め！メンマに溺れて溺死しろ！”とか、密かにいつも考えていた

いや、済まなかったな星」

「そ、そうか……そこまで思っていたのか

よし焰耶、一回表に出ろ

一度私とじっくりOHANASHIをしようじゃないか」

「落ち着け星！！

目が、目がマジになってるから！！」

ひぐらしも真っ青な目つきの星を、俺は必死に止めようとする

先ほどからチラチラと見える鉈が恐いんだもん！

それいったいどっから持ってきたんだ！？

それ以前に、君はどこまでがセーフでどこまでがアウトなんだ！？
なんだ！？

今のは、流石に怒るところだったのか！！？

なのですよ

それを近くの山にて、保管していたのですが
どうしても主にも食べていただきたかったです」

「星……」

頬を微かに赤く染めながら言う星
やばい、今すごいキュンときた
まさか俺の為だったなんて……くそう、可愛い奴め

「よし、わかった……行こう、星！」

「主！」

俺の言葉に、嬉しそうに立ち上がる星
俺はその手をがっちり握りしめ、彼女のことを見つめる

「星が俺の為に作ってくれたんだ……食べに行かないわけがない
だろう？」

「主、では早速……」

「ちよーーーーっと思ったああああー!!」

「焰耶!?!」

いい雰囲気だったところに、突如として体を滑り込ませる焔耶
残念なことに服はもう着ている・・・うん、残念なことに
大切なことだから二回いつて（ry

「このような時間帯に二人で出歩くななど危険すぎる！
お館の身に何かあったらどうするのだ！」

「私がいるから問題なかるう」

「信用できん！」

なら星よ、一つ聞こう

メンマとお館がどちらも崖から落ちそうになっている・・・お前な
ら、どちらを先に助けるのだ？」

「めん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
くっ、あ、主？」

「うん、疑問形だね」

しかも、間髪入れずにメンマって言おうとしてたし
俺は今、泣いてもいいと思うんだ

「やれやれ、やはりそうだったか
仕方ない・・・この私も、ついて行く」

「焔耶も？」

「・・・嫌、なのか？」

「いえ、むしろバッチコイです」

上目使って反則だよね

隣で星がジト目で見てきてるけど、気にしないことにする
とにかく、善は急げだ

せっかく星が俺の為に作ってくれたんだ
早く食べに行くでしょう

「よし、それじゃあ早速・・・」

「話は聞かせてもらったぞ」

「うひゃあっ!？」

突如、すぐ背後から響いた声
俺はその場から慌てて飛びのき、その場所を凝視する
そこにいたのは、一人の少女
彼女は・・・

「思春!？」

なんでここに!？」

「いや、その、あれだ・・・そう、散歩だ！
眠れなかったので、少々屋根裏を散歩していたのだ！」

どんな散歩ですか、ソレ
などとツツコミたい衝動にかられるが、その手に持たれている“鈴
音”が恐いので何とか我慢する
命大事、うん

「それで、思春はいつたいどうしたのさ」

「なに、貴様らが少々気になる話をしていたのでな
乱世が終わったとはいえ、まだまだ危険は潜んでいるものだ
深夜の山などは、まさにソレだ
故に、私もついて行こう」

「思春も？」

「っ・・・べ、別に貴様の為じゃないぞ！？
貴様が怪我をしたら、蓮華様が悲しんでしまうからであってだな・・・」

はい、ツンデレはいりました
く、相変わらずのツンデレっぷりだぜ・・・流石は思春、恐ろしい
子！

まあとにかく、思春もついてくるようだ

これで、メンバーは四人になったわけだな

「よし、それじゃあ行きます・・・」

「お待ちください、隊長!!」

「おっほう!!!?」

立ち上がると同時に聞こえた声に、俺は思わず尻餅をついてしまう
声が聞こえたのは、寝台の下・・・そこから、一人の少女が飛び出
してきたのだ

「凧!?!」

「ぜひとも、この私も隊長の護衛にお加えください!
必ずや、役にたってみせます!!」

「いや待って、ツッコミ所が多すぎるんだけど!?!
なんで寝台の下に!?!
ていうか、いつからいたの!?!」

「よかったのか焰耶、ホイホイついてきちまって。俺は・・・敏
感な女の子でも容赦なく喰っちまうような男なんだぜ?」
“いいんです・・・お館のことが、好きだから”という辺りからず
っといました!」

「「最初からかあああああああああ！……！（ぎしあんの意味で）」」

頭を抱えたまま、俺と焰耶は膝をついていた

おもくそ見られとるがな

しかも、思いつきり入りの部分からいたんじゃないか
ていうか、それからずっとか！？

ぎしあんしてる寝台の下でスタンバってたのか！？

いや、何でさ！？

「そこに、隊長がいるからです」

「いや答えになってないし、なんで凄い誇らしげなの？
ていうか、心の中を読まないでくれ頼むから」

しかも、サムズアップまでしてるしね

こうまで爽やかな笑顔で言われると、逆に清々しいですね

「はあ……わかった、尻も来てくれるかな？」

「はい！」

この命に代えても、隊長のことをお守りいたします！……」

とてもメンマを食いに行くだけとは思えないほどの気迫で風が言う
因みになんて寝台の下にいたのかは、結局分からずじまいだ
案外、風なら“俺がいるから”っていう理由だけで何処へでも行け
そうな気もするんだが・・・きつと、ツッコんだら負けなんだろう
とにかく、これでメンバーは五人
なんか、予想以上の大所帯になってしまった
ともあれ、ようやく出発できそうだ

「よし、今度こそいk・・・」

「ちょっと待ってくださいー!!」

「ヒーーーーハーーーー!!!!??」

“バリッ!!”と音を立て、寝台の上に置いてあった枕が弾け飛んだ
そして、その中から飛び出してきたのは・・・一人の少女

「ひ、雛里!!??」

「ご主人しゃま!

私も一緒に行きましゅ!!」

「うう、ごめんちょっと待って!
今すぐく混乱してるんだ!!」

か、カミカミじゃないか・・・ていうか、もうツッコみ疲れたんだけど!?

いったいどうやって枕の中に!?

エスパー伊藤もびっくりだよ!?

いや、どつりでいつもよりも枕が大きいなあとは思ってたんだけどさ!?

「鳳統の畏でしゅ!」

「そんな馬鹿な」

そして、心の中を読まれるのはもうデフォなんです
いえ、もう慣れましたから

「えっと、それで雛里はついて来たいの?」

「はい!」

「星、いいかな?」

「仕方ないでしょう・・・あんな登場の仕方をされたら、ダメとは
言えませぬ」

と、呆れたように言う星

その言葉に、俺たちは無言で頷いていた

まあ、この中では一番インパクトあったもんね

いきなり枕が弾け飛ぶんだもん
そんな中から出てくるんだもん
そりゃ、ビックリするよ

にしても・・・

「六人が・・・けっこうな人数になったな」

「そうですな

それでは“作者の趣味が明確になった”ところで、さっそく出発
たしましょう」

「メタ発言、駄目絶対」

そんなこんなで、俺たちは星の作ったというメンマを求め・・・城
を飛び出していったんだ

—————
—————

というわけで、都の近くの山の中

俺達六人は今、とある場所で立ち尽くしていた
それは……

「ねえ、星」

「何ですかな、主」

「星はさつき、近くの山に保管してるっていったよね」

「言いましたな」

近くの山の……その奥深くにある洞窟の、そのまた奥深くにある
宝箱の中に保管しておりますと」

「うん、そこまでは言ってたかな」

俺の言葉に、星はニヤリと笑う

くそ、確信犯かよ!?

ていうか、なんで宝箱の中に入れちゃったんだよ!?

さて……ここまできれば、わかった人もいるだろう

俺たちは今、都のすぐ近くにある山

その奥深くにある、何だか薄暗い洞窟の前に立っていた

「な、何だか怖いですね」

「いかにも、といった感じが」

震えながらの雛里の言葉に、思春はいつもと変わらない声色で言う
まあ思春なら、こういうの大丈夫そうだな

「というか、なんでこのような所に保管したんだ？」

「そうですね」

些か、不便ではないでしょうか？」

焰耶の核心をついた一言

それに、凧も同意し頷いていた

そんな二人に対し、星は呆れたようにため息をついた

「やれやれ・・・二人ともわかっていないようだな

この洞窟を見ても、何とも思わんのか？」

「この洞窟？」

言われ、俺たちは洞窟を見る

入口がこんな薄暗いのだ、中は当然真っ暗だろう

足場もゴツゴツとして、とても歩きづらそうだな

これは・・・

「すごく・・・洞窟です」

うん、雛里の言うとおりだと思う

少なくとも、メンマとは一切結びつかないです

いや・・・それとも俺たちが知らないだけで、この洞窟内の環境がメンマを造るのに適しているのかもしれない

「うーん、わからないな」

「仕方ありませんな」

もう一度、よくこの洞窟を見てくだされ」

そう言われて、俺たちはもう一度じっくりと洞窟を観察する
そんな俺たちの様子を見つめ、星はフツと微笑んだ

「どうですか？」

無性に、メンマが食べたくなくなってきたでしょう？？」

「いや、ならないかな」

すごくどうでもいい理由だった
とりあえず凄く良い笑顔で言われたから、こちらも良い笑顔で返しておく

大体洞窟を見てメンマが食べたくなるって、それはもう病気が何かだと思っただ

「メンマは食べたくなりませんが、隊長のことが食べたくなりまして・・・性的な意味で、です」

「そしてモジモジしながら、何てこと言ってるんですか凧さん」

なんでそうなったの？

そんな恥ずかしいなら、初めから言わなければよかったのに
いや、すごい可愛いけどさ

というか、洞窟から俺を連想するのはどうかと思っただ

「お館を食べたくなるか・・・なるほど、な」

「え？」

いやちよっと待って、何がなるほどなの？」

「ふむ・・・深いな」

「深いの!?!?」

「あわわ、しゅごいでしゅ！」

「なにが!？」

洞窟「俺で、皆して何を想像してるの!？」

すっごい気になるんだけど!？」

特に思春!

深いって何さ!？」

「さて・・・話が纏まったところで、さっそく中へと入りましょう」

「いや、全然纏まってないからね!？」

なんか、皆して変なことばっか考えてるからね!？」

「大方“洞窟の中を冒険する”というのを、主がご自身の“七性我漏”にて我らの“洞窟”を冒険するということとかけて・・・」

「下ネタあああああああああ!?!?!?!」

星さん、マジ自重してください!

頼むから!

新年一発目から、ちょっとすっ飛ばしすぎだから!?!

「はっ・・・恋姫だけに姫初め、ということでしょうか!?!」

「いや、誰が上手いこと言えと!?!」

ていつか凧さん、ちょっと息が荒すぎるから!!
なんでそんなハアハアしてんの!？」

凧、君はそんな子じゃなかったハズだ!

「落ち着け、凧!

全ては帰ってから、軍議にて決めるのだ!」

「ああ、そうだぞ凧

これはもう、我々だけでは決められない」

「あわわ・・・皆さんのお力を借りないと」

「ちょ、まあああああ!!?」

いったいどこまで飛躍してんの!?

なんなの!?

いったい、どんな想像をしてたの!!?」

洞窟「俺のお話で、なんで軍議が出てくんの!?

なんで三国の皆で話し合おうとしてんの!?

「それはもう、お館がご自分の“裸腺槍”ラセンウで我らの“洞窟”を冒険
するといっ・・・」

「だから、下ネタああああああああ!!!!!!!!!!」

それから数十分・・・彼女たちの暴走が終わってからようやく、俺たちは洞窟の中に足を踏み入れたのだった
因みに、俺はもう精神的にヘトヘトです

正直、もう帰りたい・・・

—————

そんなこんなで、洞窟の最深部に辿り着いた俺たち
途中には別に畏があったわけでも、ましてやギアスに開眼したりなんてイベントは特になかった
いやうん、平和が一番だよなやっぱ

そして、俺たちの目の前には“ドラ エ”を彷彿とさせるような
かにも宝箱がある
開けたらミニミックでした、とかだったらマジでビビるぞこれ

「コレの中に、我が至高のメンマが入っております」

「この中に・・・」

ゴクリと、唾を呑みこむ

しかし・・・何だか、すごいモノが入ってそうに見えるよな宝箱ってこれは、期待できるんじゃないか？

「あわわ・・・私、なんだかw k t kしてきました」

「ヒナりん落ち着いて」

ギリギリどころか、普通にアウトな発言をかます雛里

そんな俺たちのことも知らず、星はゆっくりと宝箱を開けていく

ゆっくりと開かれていく宝箱

その中から、溢れ出す光・・・って、光!?

「なんだこれは!?

メンマが入ってるんじゃないの!?

「ふふふ、侮るな焰耶よ

この趙子龍が作りし至高のメンマ・・・黄金色の光を発することなど、造作もないわ」

「いやいやいや、ないないない!!
黄金色に輝くメンマなんてないから!!」

「主よ、今日の前にそれが存在しているのです」

「ちよ、わかった!

わかったから、勢いよく開けるな!!

眩しい、つてか目が痛い痛い痛い!!?」

「あわわ、まぶしいです!」

「く、これは・・・!?!?」

「隊長、私の後ろに!!」

あまりの眩しさに、俺たちは咄嗟にその場から足を引く

その間も、凄まじい程の光を放ち続けるメンマ(?)

くそ・・・これ、ホントにメンマ入ってるの!?

メンマって、こんな光るもんなの!?!?

「さあ・・・見せてあげましょう」

響く、星の声

段々と収まってくる光

そして・・・俺たちは見たんだ

「これは・・・」

「なんと・・・」

「あわわ・・・」

「むっ・・・」

「あ、ああ・・・」

宝箱の中

入っていた、蓋の空いた壺

その中に入っている、俺達がよく知るもの

「このツボの中を見てくれ・・・コイツを、どう思っっっ」

こ、これは・・・

「「「「すくく・・・メンマです」「」「」」

普通にメンマです

本当にありがとございました

――間――

「・・・って、いやいやいやおかしいだろ!!!？」

普通のメンマだったなら、なおのことおかしいだろ!!!？」

あの目が痛くなるほどの光は何だったんだよ!!!？」

「主よ、本当に美味しいメンマならばあのような輝きは当然のことですぞ?。」

「嘘おおおお!!!!?」

メンマってそんな凄いの!?
あんな輝いちやうもんなの!?

「こ、これが至高のメンマ・・・なんと、美しい」

「って、思春さん!?!」

思春さんが反応した!?!
思春ってメンマ好きだったっけ!?!

「ふふふ・・・本当に美味しいメンマとは、例え相手が素人だったとしてもその溢れ出す“メンマぱわー”によって魅了してしまうものなのです」

「嘘おおおおおおおお!!!!?」

メンマすげええええええ!!!!?
何それ、初耳だよ!?!
何なんだよ“メンマぱわー”って!!!!?

「さあ主・・・どござ、お食べください」

「あ、ああ」

な、なんか緊張してきたんですけど
これが“至高のメンマ”の力か!?

「で、では……いただきます」

ゆっくりと、俺はソレを口に含む
そして……言葉を失ってしまった

口の中に含んだ瞬間に広がる、心地よくも深い味わい
この、小気味の良い歯ごたえ

これが……至高のメンマ

「う、美味しい……」

「ふ、流石は主……その味の良さがわかりましたか」

「いや、良さっていうかもう美味しいって言葉以外は出てこないくらい
美味しいんだけど」

「それは良かった

ほれ、皆も好きに食べていいぞ」

その言葉に、皆が笑顔でメンマに群がった
勿論、凧から“携帯唐辛子”を没収することは忘れない
折角の“至高のメンマ”なんだ・・・そのままの味を楽しんでもら
いたいしね

しかし、何かホツとしたなあ

行きがアレだっただけに、こんな平和なオチが待ってるなんて考え
てなかったから・・・うん、やっぱり平和にオチるのが一番だよ

・・・って、あれ？

「なんだ・・・体が、すごい熱くなってきたぞ？
しかも、こうフラフラするとうるか何というか」

おかしい・・・これは、おかしいぞ
皆は・・・

「た、隊長・・・私、何だか体が火照ってきました」

「あ、あの凧さん？

何故、服を脱ごうとするんでしょうか？」

「お館、好きだぞ」

「うん、俺もだよ・・・つて、待て焰耶！
いつの間に服を脱いだんだ！！？」

「あわわ、ちこもげる」

「言動と行動が合っていないよひなりん！？
なんで服を脱がそうとするんですか！！？」

「ええい、男ならつべこべ言つな！！」

「思春、駄目だつて！
そこは駄目だあああああああ！！」

「いったい、何が起こってるんだ！！？
皆の様子がもう、明らかにおかしいぞ！？」

「ま、まさか・・・！」

「本当に美味しいメンマとは・・・食べた後に、しっぽりムフフと逝
きたくなるものなのです」

「嘘おおおおおおおおおおお！！！！！！！！？」

メンマって、そんなヤバいの!!!?
美味しいメンマって、そんな媚薬みたいな効果でちゃうの!?

「まあ、昨日混ぜた“媚薬”のせいでもあるかもしれないが」

「明らかソレだろおおおおおおお!!!!!??」

おもくそ、狙ってやったんじゃないか!!!?

だって、めっさ笑ってるもん!

悪意のある笑い方してるもん!!!

「ふふふ、まあ良いではありませんか

こちらの方が、“天の種馬”の渾名に相応しいオチかと」

「相応しいとか、そんな気遣いいらないから!」

「ふふふ・・・口ではそう言っていますが、いざ始まってみれば
主もノリノリではありませんか」

「や、やめる近づくな!

ひっ、皆離してくれよ!

なあお願いだから・・・」

「さあ・・・楽しみましょうか」

「ひ、や、まっ、らめえ・・・」

(^。^)>ハイパーメンターーーーーーイム

アツ

.....

・・・結局、星の予想通りにノリノリになってしまった俺
洞窟内ですっぽりムフフとなっていてしまい、気づいた時にはもう夕方
当然、愛紗や華琳や蓮華からはOHANASHIという名の“拷問
”が待っていましたとさ
めでたしめでたし

「聞いているのですか、御主人様!!!!!!」

「はい、聞いてます!!!!!!」

ああ、今日も都是平和だなあ

・・・完!!

第3話 メンマを求めて何千里！〜星さん、マジ星さん〜（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？
それでは、またお会いしましょう

第4話 真・失禁馬超伝！？（前書き）

第4話です

今回の主役は、題名のとおり翠さんです

それと、意外な少女www

それでは、お楽しみください

第4話 真・失禁馬超伝！？

「なあ翠、ちよつといいかな？」

「ご主人様、どうかしたのか？」

それは毎朝恒例の朝議が終わってすぐのことだった

皆が玉座を後にしていく中、天の御遣いである北郷一刀は一人の少女を呼び止めたのだ

彼女の名は馬超・・・真名は翠

西涼の“錦馬超”の名で知られる猛将である

そんな彼女のことを呼び止めた後、一刀は腕を組み何やら真剣な表情のまま口を開いた

「仲間を作らないか？」

「・・・はい？」

その一言に、翠は首を傾げてしまう

彼の言葉の意味が、よくわからなかったのだろう

彼女は眉を顰め、彼を見つめたまま軽く息を吐きだした

「あのだ、いきなり何の話だ？」

そもそも仲間って、いったい何の仲間だよ？」

翠の言葉に、今度は一刀が首を傾げていた
その表情からは、微かな驚きが見て取れる

「わからないのか？」

「わからないよ」

“そうか”と、少し難しそうな表情をする一刀

その様子に、何事かと翠はまた首を傾げる

そんな微妙な空気がしばし続いたのち、意を決したのか一刀が一度
大きく頷いて見せた

「まあ、確かに恥ずかしいことかもしれない
隠したくなる気持ちもよくわかる
でもさ、それじゃダメだと思っんだ」

「は？ え？」

「だからこそ、翠は作るべきなんだ
君のことを真にわかってくれる、親友とも言えるべき仲間を・・・」

戸惑う翠もそのままに、彼は額に指をあて“はぁ”とわざとらしく
ため息を吐きだす

それから彼女の肩を掴み、温かな笑みを浮かべこう言ったのだ

「お漏らしっ娘仲間をさ!!」

爽やかな笑みと共に紡がれた言葉
その直後、彼の顔面に彼女の拳が突き刺さったのは言うまでもない

真・失禁馬超伝!?

+

「……というわけで、取り出したるはこのカード!」

(け、結局押し切られてしまった……)

所変わって、ここは一刀の執務室

顔面に痛々しいアザを作りながらも何処か誇らしげな表情で微笑む
一刀をよそに、翠はとうとうと自分の押しの弱さを内心で恨んでいた
先ほどから、何故か嫌な予感しかしないのだ
そんな彼女のことなどつゆ知らず、一刀は楽しそうに手に持った何
枚かのカードを翠の前に差し出してきた

「それじゃ、こつから一枚引いてくれ」

「・・・なあ、これは何なんだ？」

「これは“お漏らしっ娘カード”
神が創りだした英知・・・いや、“武器”だ」

「だから、何なんだよ!？」

一刀の意味不明な説明に頭を抱える翠
そんな彼女の様子を見て、彼は“冗談だよ”と笑う

「このカード・・・札には、俺が厳選した“お漏らしっ娘候補”の
名前が書いてあるんだ
この中から一枚だけ翠が引いて、その書いてある名前の子を翠の仲
間・・・つまり、“漏れ友”にする」

「“漏れ友”ってなんだ!？」

なんだ、その悪意を感じる名前は!？」

「落ち着け翠

“失禁馬超”の名が泣くぞ？」

「むしろ、アタシが泣くぞ!？」

大声で泣きわめくぞ!？」

ギャーギャーと、顔を真っ赤にし涙目のまま叫ぶ翠

一刀はというと、その様子を楽しそうに眺めながら手に持っていたカードをさらに彼女に近づける

「まあまあ、モノは試しっことで

とりあえず一枚引いてみなって

それとも・・・俺のサポートが心配なのかい？」

「くそ・・・一枚だけだぞ!」

彼の言葉に、半ばヤケクソ気味にカードを引く翠

それから“ウエルカム、マイフレンド!!”と言いながらカードを凝視するあたり彼女もノリノリである

因みに、彼女が引いたカードの中身はというと・・・

“貂蝉”

「大当たり”じゃないか」

「大ハズレ”だよつ!!」

“バシン!”と、勢いよくカードを床に叩きつけ翠は叫んだ
それも割と本気で

「何でコイツの名前を書いた!?
いったい誰得だよ!?

そもそも“娘”じゃないし!!
いくらなんでも、これは駄目だろ!?!」

「俺だって、凄く嫌だよ
でも今、一枚だけって翠が・・・」

「なし！ 今のはなし！
もう一枚だ、もう一枚！！」

そうやって彼女は、強引に一刀の手からカードを一枚奪い取る
それから血走った目で、引いたカードを見つめる
なんだかねで、仲間が欲しいのだろう
一刀はそう勝手に納得し、彼女の引いたカードと一緒にあって見つめる

そして、ニヤリと面白そうに笑みを浮かべた

「ほう・・・これは中々良いカードを引いたじゃないか」

「いや、これは・・・いいのか？」

「問題ない

むしろ、俺的には大歓迎だ」

「この変態」

かくして、二人の計画は始まったのだ
まだ見ぬ、彼女の“漏れ友”を求めて・・・！

――十――

「やあ“亞莎”、今ちよつといいかな？」

「はい？」

太陽は、現在真上

そんな時間帯に、彼は彼女へと声をかける

呂蒙こと、亞莎である

彼女はというと・・・一瞬だけ驚いたような顔はしたものの、好きな相手に声をかけられて嬉しそうに八二かんでいた

その様子に、彼と一緒にいた翠は“うっ”と表情を僅かに歪める

「なあ、ご主人様

アタシ今、何だかすっごい罪悪感が・・・」

「おいおい翠

ここまで来て、今さら何を言ってるんだよ？」

「けござあ・・・」

「あの・・・一刀様？」

「ああ、いや

何でもないよ、うん」

不思議そうに、自分たちを見つめる亞莎
そんな彼女に笑みを浮かべ、二人はひとまずは会話を中断した
それから、彼は亞莎の手をとった

「亞莎、今ちよつと時間あるかな？」

「あ、その、ええええつと！

あ、あります！！

それはもう、たっぷりと！」

「そ、そっか

ならよかった・・・実は、少し手伝ってもらいたいことがあってさ」

「はい、私でよければ毎晩でも呼んでください！」

「うん、その一言で亞莎が普段俺のことをどう思ってるのかわかったよ」

眩いばかりの笑顔でそんなことを言われ、流石の一刀も頬をピクピクとさせる

だが、否定ができないのでスルーすることにした

因みに、翠はそんな一刀の姿を見て“ザマアｗｗ”と呟いていた
“後で覚えてるよ”と、一刀が思ったのはひとまず置いておこう

ともあれ、作戦の第一段階は成功した

翠が引いた“お漏らしっ娘カード”に記された新たなる“漏れ友候
補”

亞莎

二人はひとまず彼女を連れだって、一刀の部屋へと向かっていった。
・
・

—————
+—————

「これは・・・？」

部屋に入った瞬間、彼女の口から思わず驚きの声がこぼれる
そんな彼女の様子に、一刀は満足げに頷き彼女の手を引いた

「これは、天の国の飲み物だよ

野菜や果物を絞って造ったものなんだけど

実は、これの味見を頼みたかったんだ」

「それは・・・私なんかで、いいんでしょうか？」

「何言ってるんだよ

俺は・・・亞莎に、頼みたいんだ」

「か、一刀様・・・」

この言葉に、頬を赤くし俯く亞莎

その様子を見て翠が、“この種馬”と不機嫌そうに呟いたのは言うまでもない

ともあれ、これで二人の“作戦”は成功したと言ってもいいだろう
ここまできたら、あとは我らが種馬のペースである

彼はそのまま亞莎を席へと座らせると、ニコニコと笑顔を浮かべた
まま手作りのジュースを差し出した

「はい、まずはこれ」

「これは？」

「林檎ジュースさ

まずはサツパリとしたものからってね」

「あ、ありがとうございます」

お礼を言い、笑顔のまま飲む彼女

翠は、そんな彼女の笑顔を見つめまた軽い罪悪感に悩んでいた

「お、美味しいです！」

「だろ？」

ホラ、もっと飲んでいいんだよ」

「ありがとうございます！」

勿論、そのようなことなど彼女は知る由もなく
差し出されるジュースを、美味しそうに飲み干していく
仕事の疲れもあったのだろう、そのペースは驚くほどに早い
そんな彼女の様子に、一刀はニヤリと笑みを浮かべていた

—————

「うう・・・」

数分後

そこには、二人の計画した通りの状況が出来上がっていた

「ん……」

モジモジと挙動不審な亞莎の姿に、一刀と翠はグツと彼女に見えな
いよう親指を突き立てた

どうやら翠が抱いていた罪悪感は、もう消え去ってしまったらしい
それはともかく、亞莎の様子を見る限りもう限界は近いらしい

“ここからが勝負か”と、一刀は不敵に笑う

「あ、あの……」

勿論、そんなこと知らない亞莎

彼女は恐る恐る手を上げ、か細く声を出す

「そ、その少し……って、ひゃうっ!？」

「ああ、亞莎は可愛いなあ」

その瞬間、すかさず一刀は彼女のことを抱き締めた

それはもう、目にも止まらぬ速さでだ

翠はそんな彼の早技に、“流石は、天の種馬”と息を呑んだ

「あ、あの一刀様!？」

「どうしたの？」

まさか・・・俺に抱き締められるの、嫌だったりする？」

「そそそそんなわけないです！！」

そうじゃなくって、今はその・・・！」

「なら、もうしばらくこのままでもいいかな？」

「は・・・はい」

力なく、頷く亞莎

しかし明らかに、先ほどよりも体が震えている

それこそ、この部屋には翠がいるということをおぼろげに忘れてしまっただけに
それも、顔を真っ赤にしながら

(ご、ご主人様・・・アタシ、帰ってもいいかな？)

(駄目)

これは、翠の仲間を作る為なんだから・・・ホラ、ちゃんと見てて)

(うう・・・変態)

アイコンタクトでの会話もそこそこに、一刀は亞莎を抱き締める力を強めていく

それに伴い、彼女の体はビクビクと震えていた

近い・・・と、一刀は自身の勝利を確信する

（やったな、翠
これで仲間が出来たな）

そして新たな仲間の誕生を祝おうと、笑顔で翠へと視線を向けた矢先彼の表情は、一気に引きつったものへと変わってしまう

「あの、翠さん・・・なんでそんな、モゾモゾしてるのでしょうか？」

「えっ!?!」

いや、その、ななななんでもないぞ!!?」

「お、おい翠、お前まさか・・・」

（「う、ごめん・・・ご主人様）

（「やっぱりか————!!?」?」）

ぎこちなく笑う一刀

しかしそんな不自然な様子に気づけない程に、亞莎もまた限界が近かったのだ

対して、翠も同様に限界が近かった

彼女は大量の冷や汗を流しながら、下腹部をおさえガクガクと体を震わせている

そんな二人の姿に、一刀もまた冷や汗を流していた

かくして、場は一気にクライマックスに突入したのである・・・

――――

「おいおい、マジかよ・・・」

一刀がそう呟いたのも無理はない

現在、太陽はもう帰り支度を始めた頃

窓から見える空は、微かに赤みがかかっている

しかし、未だに二人は体を震わせながらもその場にいたのだ

「・・・」

しかも、無言で・・・いつの間にか、翠まで一刀に抱き着きながらそんな二人の様子に、一刀は苦笑しながらも頭を抱えていた

（まさか、亞莎がここまで粘るなんて・・・予想外だった
ていうか、これ以上は不味いな

あんまり長い間我慢させると、体に悪いだろうし・・・仕方ないか）

そう思い、一刀はフツと亞莎を抱き締めていた力を緩める
瞬間、“ハッ”と顔をあげる亞莎
それに伴い、体の震えが大きくなった

「う・・・ごめんなさい！！」

そう言つて、一刀のもとから離れ駆け出す亞莎
“間に合うといいけど”と思いつながら、一刀はその背を見守っていた
それから、彼は翠へと視線をうつす
彼女も限界が近かったのだ
故に、彼女も早く廁へと向かうよう伝える為である

「おい、翠・・・」

「・・・かよ」

彼女はそれから“キラキラ”と輝く目を亞莎へと向けたまま、ニイと笑みを浮かべた

「亞莎く、まさかここまで来て一人で楽になるうなんて思っていないだろうなあ？」

「あ、あのすすすすす翠さん！？
いったい、どうし・・・」

「ご主人様も！！！！」

言いだしっぺのクセに、なぐに勝手に終わらそうとしてるんだあ？」

「は、はい、すいませんでした！！！！」

そのあまりの恐ろしさに、一刀と亞莎は体を大きく震わせた

“ヤバイ・・・”

そう思った時は、いつだつて手遅れだ

今までの経験上、一刀はそう理解していた

故に、もう軽く諦めモードである

対して、亞莎はようやく助かったと思った矢先の出来事だったせいだろう

もう泣きそうになりながら、その場に座り込んでいた

そんな二人に向けられたのは、天使の微笑みか・・・はたまた、悪魔の笑みだったのか

「さうて、二人とも・・・覚悟はできてるか？
アタシはできてっぞ？」

今となつては、もうわからないだろう・・・

――――

「ど、どうしてこうなつた？」

目を覚ました翠がまず言つた言葉がこれである

自分は勿論のこと亞莎までもが衣服を脱ぎ捨てたままの状態で、こ
れまた同じような状態の一刀に抱き着き眠っているのだ

いや、それだけならいい

いやよくはないかもしれないが、今は些細なことだ

そんなことよりも、だ・・・

「“アレ”って、もしかして・・・」

言いながら、彼女が見つめる先

一刀の部屋の中心

そこにある、“黄色い見覚えのある跡”とその中心に置かれた見覚えのある“パンツ”

ここまでで、ようやく彼女は自身がやってしまったことに気づいたのだ

もっとも・・・

「おはようございます、御主人さま・・・」

「まったく、あんの馬鹿まだ眠って・・・」

「あ・・・」

時、すでに遅し

その後のことは、ここにはあえて記さないでおこう
唯一つ言えることは、あの“翠語”が発せられたことはお約束である

·
·
·
完！

第4話 真・失禁馬超伝！？（後書き）

いかがだったたでしょうか？

それでは、またお会いしましょう

第5話 俺の知ってるシヤムと違う(前書き)

今回は、シヤムの物語

“ TINAMI ” に投稿した、問題作です W W W W
書いてる僕ですら、よくわからなかった物語

それでは、お楽しみください W W

第5話 俺の知ってるシヤムと違う

「今日も“性務”だ、ほっほほ~~~~い」

本日も晴天なり

あまりの天気の良いさに、思わず鼻歌(?)まで口ずさんでしまう始末だ

それほどまでに、今日も今日とて良い天気なのだ

おっと、自己紹介が遅れたな

俺の名前は“北郷一刀”

乙女だらけの三国志の世界に迷い込んだ“彷徨えるイケメン”こと“天の御遣い”として三国の中心に造られた都で日夜乙女たちと“イチャコライチャコラ”している“健全な男の子”だ

それはもう健全な毎日を過ごす俺にとって、このような天気の良い日はこうして散歩するのが日課になっている

いや、決して仕事が嫌で逃げ出してきたわけじゃないんだ

ほ、本当だぞ!?

俺だって、ヤルときはヤル男なんd・・・

「ご主人様~~~~~~~~!!!!!!」

仕事を放りだして、何処に行かれたのですかあああああああ
あああああああああ!!!!!!」

お、オーマイガッド
もう怒れる軍神様にバレちまったい
こつこつ時は、さつさと逃げるに限るってねww
あばよ、とつとあん！

「・・・ん？」

ふと、俺の目の前

一人空を見上げる幼女の姿を発見
あれは・・・“シヤム”？

「一人でいるなんて珍しいな」

いつもなら、美以やミケやトラと一緒になのに
気になるな・・・ちよっと話しかけてみるか

「おい、シヤム！

そんなところで、なにやってるんだ？」

そんなわけで、俺はシヤムのもとに駆け寄り声をかける
だが、聞こえてきたのは小さな声

「・・・な」

「・・・え？」

あまりに小さな声

俺はその声を上手く聞き取れず、首を傾げてしまう
そんな俺に向い、シヤムはニツコリと微笑んだのだ

そして・・・眩いばかりの笑顔で言ったんだ

「気安く話しかけんな、このチ カス野郎」

「えっ、あ、その、す、すいません・・・」

何これ、俺の知ってるシヤムと違う

あのシャムたんが、そんなこと言うわけないもん

「そうだ・・・きつと俺、日頃の政務（性務）で疲れてるんだよ」

最近、ちよつと働きすぎだったもんな（主に、下半身が）
よし、気を取り直して・・・

「いやあゝ、今日は良い天気だなシャム」

「お前さえ来なけりや、最高だったよ」

――間――

「う、生まれてきてごめんなさい・・・」

あ、あれええええええええええ！！！？？

おかしいぞ、絶対おかしい！

こんなの絶対おかしいって！！

こんなの、俺の知ってるシャムじゃない！

ていうか、なんで物凄い笑顔なの！？

逆に、凄いダメージくるんだけど！？

「ご主人様！！」

こんな所にいらっしやっただのですかごるああああ！！！！！！

「げえ、関羽！！？」

ジャーンジャーンジャーン

などと、俺が色々と苦しんでいる間に・・・いつの間にやら、俺のすぐ傍には軍神様がいらっやいました

ああ、そういうば逃げてたんだっけ

これはマズイ・・・いや、ちょうどよかったのか？

「なあ、愛紗！」

ちょっと、思いっきり俺のことを叩いてくれないか!？」

「ええっ!？」

何ですかいきなり!？」

そういうプレイでしたら、華琳殿にでも・・・」

「ちっげーよ!

けど説明してる時間も惜しいから、今はとにかく叩いてくれ!！」

「え、あ・・・はい、わかりました!！」

頷く愛紗に、俺は“来い!”と声をあげた

よくある方法・・・頭でも叩いてもらって確認する為だ

もしかしたらコレは、俺が見ている夢かもしれない

いや、きつとそうだ!

俺のシャムたんが、あんなに怖いわけがない!

「いきます!！」

「よっしゃ、バッチこおおおおおいぶ!」
つぶんつぶんつぶんつぶんつぶん
うううううう!?!?!?!?!?!?!?」

“ズドムツ!?!?!?!?!?”と凄まじい音をたて、愛紗の拳が俺の腹に

吸い込まれていく

その威力で、意識がぶっ飛びそうになった

愛紗さん・・・よりもよって、ボディーですか

しかも、手加減とかそういうの一切感じないのですが・・・

「ご、ご主人様！

いかがだったでしょうか！？」

「い、いかがだったって・・・ゲホツ、ゴホツ・・・普通に痛い、てか・・・ゴホ・・・なんで、そんな“やりきった顔”してんだよ」

「日頃の“様々な想い”を込めてみたのですが・・・」

「なんか、すいませんでした・・・」

“様々な想い”ってなんだよ

意識がぶっ飛びそうなほどに、何を溜めこんでるんだよ

いやたぶん、殆ど俺関係なんだろうけどさ

でも、これでわかったことがある

「夢じゃ、ない？」

恐る恐る眩き、見つめた先
相変わらずニコニコとしたまま、シャムは俺のことをみつめていた

「なに見てんだよ、このウジムシ」

「あ、すみません・・・」

目を逸らし、溜め息を一つ
参った・・・どうして、こうなったんだ？
考えるが、答えは出てこない

因みに、俺の隣では愛紗が驚きのあまり固まっていた
ですよー、そういうリアクションになっちゃいますよー

「仕方ない・・・みんなの力を借りよう」

そうだ、俺は一人じゃない
頼もしい仲間がいるじゃないか
そんなこんなで、俺は手が空いている者に声をかけるべくその場を
後にしたのだった・・・

――――

「で、集まったのはこれだけか」

呟き、見つめる先

其処には、愛紗・蒲公英・鈴々・凧・朱里がいた

「おいおい、なんか随分とノリが悪いな
皆今日は忙しいのか？」

「ええ、とても忙しいですよ

“何処かの誰か”が、“政務にかこつけて性務をしていた”せいで溜まっている仕事はかなりあるのです」

「よ、よーし皆

こうして集まってもらったには、ちょっと理由があっただな・・・
」

ジト目で愛紗がこっちを見ているが、華麗にスルー
そして俺は話を進めていった

「シヤムについてなんだが・・・」

「シヤムがどうかしたの〜？」

蒲公英の質問に、俺は頷く

それから彼女の肩を掴み、真っ直ぐに瞳を見つめた

「簡単に言つとな・・・“シヤムが何処か遠くへ行つてしまつたんだ”」

「ご主人様、まったくこれっぽつちも伝わってませんよ」

「うん、俺もそう思う」

気を取り直して、咳払いを一つ

「まあ、聞けばわかると思うんだけどさ
なあ、シヤム？」

「ファックユー」

「ご覧の通りだ」

ちよつと泣きそうになりながら、皆に言う

かくいう皆はというと、一様に驚きを隠せないでいた

無理もない

あのシヤムが、こんな感じになってしまったのだ

「い、いつたい何があったのでしょうか？」

「朱里・・・それがわからないから、皆の力を借りようと思ったんだ
正直、俺じゃ手におえないよ」

「にゃ〜、鈴々にもサツパリなのだ」

う〜ん・・・みんな、わからないって顔をしてるなあ
でも、こんなに集まったんだ

何かしら、解決の手段が見つかるかもしれない
まずは・・・

「まずは・・・“どうしてこうなったのか”ということから、考え
ていこう」

「どうしてこうなったのか、ですか？」

愛紗の言葉に、俺は頷いた

それから腕を組み、皆を見回してニツと笑う

「俺が見つけた時、シヤムはもうあんな感じだったんだ
なら、俺と会う前に何かがあったってことだろ？」

「ふむ・・・そうなりますね」

「だろ？」

皆、何か心当たりはないかな？」

俺の一言に、皆は一斉に考え込む

そんな中、考えがまとまったのが皆が次々に口を開いていく

「私は、心当たりはないかなあ

強いて言うなら、“昨日私が仕掛けた深さ五メートルの落とし穴にシヤムが頭から勢いよく落下していったことくらいかなあ”

「私も、心当たりはありませんね

ただ、強いてあげるなら・・・“昨日執務室から逃げ出したご主人様を探している時、勢いよく振り回していた青龍偃月刀が偶々近くにいたシヤムの頭にぶち当たったくらいでしょうか”

「はわわ、私も覚えはありません

ただ、多分関係ないとは思いますが・・・“昨日買ったばかりの本を抱えて走っている時に、偶々通りかかったシヤムさんの頭にその本の角の部分をつつけてしまったくらいです”

「にゃ〜、鈴々もわからないのだ

でも、そういえば昨日・・・“翠と一緒に鍛錬をしていた時、偶々近くにいたシヤムの頭に蛇矛が思い切りぶち当たっちゃったのだ”

「私にも、皆目見当がつきません
強いてあげるなら、昨日・・・“ 氣弾で城壁を壊す修行をしていた
時、その破片が偶々通りかかったシヤム殿の頭にクリティカルヒッ
トしたことくらいでしょうか”」

「おい、ちょっと待てコラ

ちよつと心当たりがあるなんてもんじゃねーぞ

もう、“ 誰が犯人でもおかしくないレベルじゃねーか”
全弾、頭にクリティカルヒットしてるじゃねーか」

そして、シヤム頑丈だなオイ

よくそんなダメージを受けて、無傷でいられるな
いや、色んな意味で大変なことにはなってるけど

「ていうか、何だお前ら？

シヤムになんか恨みでもあるのか？」

「ち、違います！

その、本当に偶々シヤムが通りかかっただけなんです！
なあ、シヤムよ！」

「黙れ、陥没 首」

「なっ、だだだだ誰が陥没だごるあああああああ！……！」

「ばっ、落ち着け愛紗！」

愛紗が陥没じゃないことは俺が一番わかってるから！！」

ていうか、それどんな悪口だよ

そして、なんで笑顔なんだよシヤムたん

「でも、本当におかしいって

こんなの、私の知ってるシヤムじゃないよ」

言っつて、戸惑いを隠せないのは蒲公英だった

うん、彼女の言うとおりだ

絶対におかしい

「いったい、何があつたんだよ・・・シヤム」

「黙れ、カス」

「さーせん・・・」

ていうかね、これ以上はもう俺の精神がもたないよ

なんだよ・・・これじゃまるで、何か悪い病気にでもかかったみたいじゃないか・・・

「さてよ・・・」

“悪い病氣”？
そつだ・・・“アイツ”がいたじゃないか！

—————

「・・・というわけで、頼んだ華佗」

「いや、頼んだって言われても・・・“昼食中にいきなり首根っこ
掴まれて引き摺り回されてきたばかりで何も説明を受けてないのだ
が”」

俺の目の前にいるのは、赤髪の青年

この大陸一の名医にして、俺の親友の華佗である
彼に来てもらったのは他でもない・・・シヤムのことを診てもらっ
たのである

もしかしたら、何か未知の病のせいであつたのかもしれない
そう思つたからだ

大体この世界は“飲んだらエクスカリバーがこんにちわする蜂蜜”
や“ある日突然猫耳に尻尾が生えてくる”なんて出来事があるよう
なところだ
そんな病気があっても、何ら不思議ではない

「で、どんな症状が出ているんだ？」

「ああ、それは・・・シヤム」

「もげろ、カス」

「まあ、こんな感じだ」

「なるほどな・・・」

泣きそうになりながらの俺の言葉に、華佗は腕を組み考え込む
それから、難しそうなる表情を浮かべながら溜め息を吐きだした

「これは、俺の知る病の中にはない症状だな
少々、時間をかけて診察してみよう」

「頼んだ、華佗」

“任せろ”と、笑みを浮かべる華佗

ここに貂蝉たちがいたら絶対に“ウホッ、イイ男”と悶えていた

に違いない
そんな俺の考えていることなどつゆ知らず、華佗はシャムの前にし
やがみ込みニッコリと微笑んだ

「さて、早速診察を始めろぞ？」

「……ちよ」

「え？」

「童貞臭がプンプン臭ってきて、クサいっつったんだカス」

――間――

「え、あ……………」
「ごめんなさい」

（（（（（謝ったああああ！！！？）））））

しかも、ちよつと泣いている

お、恐るべしシヤム

何だ、この“シヤム無双”は？

「と、とりあえず…………ぐすつ…………ちよつと、病をみて、えぐつ……………」

そして華佗はというと、ちよつとどころかもうマジ泣きだった

それでも、診察を続ける彼はまさに医者の中の医者だと思っただ

まあ…………その間も、ずつと、シヤムに散々言われてたわけだが

そんなこんなで、診察結果…………

「診たところ、病らしきものは見当たらなかったな」

「そっか・・・ありがとな、華佗」

「いや、こちらこそ力になれなくてすまない」

そう言って笑う華佗の目は真っ赤に充血していた

こっちこそゴメン華佗

まさか、シヤムがあそこまで情け容赦ないことを言うとは思わなかったんだ

この短時間で、何回“童貞”という単語が飛び出したかわからない
ていうか、華佗・・・密かに、気にしてたのか？

・・・今度、一緒に酒を飲もう

「しかし、病でないとすると・・・いったい、何なんでしょうね」

「いや、もう普通に愛紗たちのせいだ・・・」

「そ、そっだ!!」

ちよっと、“あの人”に相談してみよう!」

「そ、そうなのだっ!」

誤魔化しとる

何時の間にか、凄い連携で必至に誤魔化そうとしてる
ていうか・・・

「あの人」？」

俺の言葉

凧は自信満々といった表情を浮かべる

「完璧超人」とまで言われる、あのお方のことです

「ああ、なるほど・・・」

“彼女”のことかあ・・・

十-----

「とういうわけで・・・頼んだ、“華琳”」

「いえ、頼んだって貴方・・・貴方にはこの私の目の前にある、机が埋まるほどの書簡が見えないのかしら？」

魏の屋敷

その中にある魏王曹孟徳こと華琳の部屋の中、彼女は天高く積み重ねた書簡を見つめ溜め息を吐き出していた

「あゝ、なんていうか・・・珍しいな

あの華琳が、こんなに仕事を溜めこむなんて」

「ええ、そうね

“どこかの誰かさんが政務の最中にも関わらず、人を性務へと巻き込むから大変よ”

それで“私よりも先に桂花を孕ますんだから、尚更手に負えないわ”

「う、ごめんなさい・・・」

なんていうか、容赦なかった

そして密かに気にしてたんか華琳・・・

「でも、そんな容赦のない華琳だからこそ・・・ひとつ、頼みたい

「ことがあるんだ」

「いったい何を頼みたいのよ？」

「俺のシャムたんが、何処か遠くへと行ってしまったんだ」

「ご主人様

ですから、それでは伝わってませんから」

「ああ、そっか

まあ簡単に言っと・・・シャム」

「ググれ、カス」

「この通りさ」

「なるほどね・・・」

腕を組み、深く考え込む華琳

ていうか、今のでわかったんか？

“ググれ”とか言われて、本当に伝わったんか？

「私は“Yahoo派”なのだけれど・・・ひとまず、幾つか質問をしていくわ」

「ごめん、ちょっと待って
むしろ、俺が聞きたいんだだけ……」

「まずは、そうね……こうなった原因に、本当に心当たりはないの？」

スルーされた……いや、まあいいんだけどさ
それよりも、心当たりねえ

「うーん……愛紗たちが皆してシャムのことをポッコボコにしたことくらいかなあ」

「……ねえ、普通にそれが原因じゃないの？」

「はわわ!？」

ち、違いますしゅよ!!

というか、それじゃまるで私たちがシャムちゃんを虐めたみたいに聞こえましゅよ!？」

「そうですよ隊長!

私たちは、絶対に関係ありません!」

俺もそう思うんだけどなあ

見事にコンボまで決めてるしな

凧なんて、破片ぶつけてるし

「まあ、それ以外の可能性を考えてみましょう
最終的に他になかったら、彼女達のせいにしてしまえばいいわ」

「さすが華琳、容赦ないな」

“まあね”と、笑顔で一言

そのまま、華琳はシヤムの前にしゃがみ込む

「ねえ、シヤム

ちよっと聞いてもいいかしら？」

「・・・な」

「・・・え？」

ボソリと、何かを呟くシヤム

あ、あれ？

何だろ、物凄く嫌な予感・・・

「近寄るな、ペチャパイがうつるだろーが」

「.....」

――間――

「ねえ一刀・・・治し方がわかったわよ」

「へ、へえ、いいいいったいどんな方法なのかなあ？」

ひ、ひええ

嫌な予感しないよ華琳さん

絶を手に持った時点で、もうアウトだよ

「いっそのこと首を刎ねてしまえば解決すると思わない？」

「全軍、撤退！……！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「」

「っ、待てごるああっああああ……！！！」

「ひいひいひい……！！！！！！？」

「きたああああああああああ……！！！！！！？」

そんなことなどで、俺たちは一斉に魏の屋敷から飛び出していったのだ……

――――十――――

「け、結局何もわからなかったな・・・」

「は、はい・・・そうでしゅね」

蜀の屋敷にある中庭に皆で座り込み、とりあえず乱れた息を整える
さすがに魏の屋敷からの猛ダツシユはキツかった
背中に霸王の怒りを背負いながらじゃ尚更だ

「ふえ〜、蒲公英もう疲れたあ〜」

「鈴々もなのだ・・・」

「う〜ん、疲れたって言われても
まだシャムが・・・」

「ジーザス」

「・・・こんな感じだし」

もう、段々とわけがわからなくなってきたるしな
最初はただの悪口だったのに、何かいつの間にか変な英語を使い始
めてきてるし
むしろ、こっちがジーザスだよ

「・・・ん？」

てか、ちょっと待てよ
なんだ、この“既視感”
シヤムの言う悪口や罵声が・・・なんか、何処かで聴いたことがあ
ったような気がするんだ
いったい、どこで・・・

「アンタら・・・何してるのよ？」

「んお？」

そんな俺たちに、ふとかけられた声
目を向ければそこには、幾つかの書簡を抱えたまま立っている桂花
の姿があった

「桂花・・・ちょっと、色々とあってさ」

「色々？」

どうせまた、馬鹿なことでしょ？」

シヤムさんの一大事だぞ？
まったく、失礼な奴だ

「失礼な

本当に大変なことが・・・って、ちよつと待て桂花
お前、なんでここにいるんだよ?」

「少し、桃香に用事があったのよ
ちよつと、仕事のことだね」

「いや、それくらい他の奴らに任せろよ・・・」

「きゃっ!?!」

桂花を抱きかかえ、俺は歩き出す

突然のことに驚く桂花だが、すぐにおとなしくなつた
まったく、なんでこんなところにいるんだよ

確か桂花は、部屋で安静にしてるよう言われたのに

「桂花のお腹の中には、俺たちの子供がいるんだから
安静にしてないと、な?」

「わ、わかつたわよ」

さつき華琳にも言われた通り、桂花のお腹には新たな命が宿っていた
勿論、俺と桂花の子だ

そんな俺たちの姿を、いつの間にか皆が羨ましそうな目で見つめていた
その中に・・・

「ジ〜・・・」

「シヤム？」

シヤムの視線もあつたのだ

ただ、さっきまでとは様子が違う

さっきまでなら目が合えばすぐに、素晴らしい罵声が飛び出したのに
今は何も言わずに俺を・・・いや、“桂花”のことを見つめていた

「・・・羨ましい」

「・・・え？」

ボソリと、何か聞こえた

それが一体なんだったのかわからないままに、彼女はその場から走り出す

「お、おいシヤム!？」

慌てて声をかけると、彼女はピタリと足を止める
それから眩しいほどの笑顔を浮かべ、こう言ったのだ

「いつか・・・シヤムも、にいの・・・子供が、欲しいな」

「あ・・・」

そう言葉を残して、走っていくシヤム

そこで、俺は気づいたのだ

あの、既視感の正体に

それは・・・

「桂花、だったのか」

「なによ、どうかしたの？」

「いや・・・なんでもないよ」

桂花だったんだ

彼女はきつと、桂花の真似をしていたんだと思う
彼女と同じように・・・“新しい命”が欲しくて
彼女なりに、俺のことを誘っていたのだろう

それがわかってしまえば、あの罵声も全て心地の良いものに聞こえてしまう

「つたく・・・鈍感だな、俺」

「なによ、いまさら気づいたの？」

「ああ、まあね」

まったく、そのことに気付けないなんて

俺もまだまだだなあ・・・

「そうだな、シヤム・・・」

いつか、そう遠くない未来

2人でつくろうか

2人の・・・“愛の結晶”を、さ

俺の知ってる、シャムと違う

く副題く

シャムのツンデレ！？大作戦

これにて、閉十幕

く以下、閑話休題く

余談だが・・・

「シヤムは何処かしら？」

「し、知らないなあ・・・あ、あはは」

「そう・・・それは残念だわ

少し、”お話をしようと思っていたのだけれど”」

「そのお話に、絶をどう使うのでしょうか華琳さん」

あれから数日の間ずっと、絶を片手にシヤムの姿を探し回る“荒ぶる霸王”の姿が目撃されることになるのだが
まあ、それはまた別のお話

「待つてなさいよ、シヤム
楽しい楽しいお話を、一緒にしましょうね・・・ふふふふふふふ
ふふふ」

「か、華琳が乱心したぞ！！！！
誰か、誰かきてくれええええええええええ！！！！！！」

ああ・・・今日も都は賑やかだ

〜閉幕〜

第5話 俺の知ってるシヤムと違う(後書き)

さて、いかがだったでしょうか？

ええ言わずともわかります

とても酷かったですねww

それでは、またお会いしましょう

第6話 蓮華さんは、何処か遠くへと行ってしまったようです(前書き)

こんばんわ

眠い中、頑張つて投稿しますw

さて、本作についてなんですが

これは TINAMI に掲載した、読者のリクエストに応じてみた作品です

凄く、カオスな内容ですwww

それでは、お楽しみくださいw

第6話 蓮華さんは、何処か遠くへと行ってしまったようです

「ペットをね、飼おうと思うの」

「ペット……ですか」

それは、呉の屋敷にある蓮華の執務室の中

仕事の合間に蓮華が呟いた、この何気ない一言から始まった

その一言に、甘寧こと思春はフツと微笑を浮かべる

「良いではありませんか？

私にはよくわかりませんが、“癒し”というものも大切らしいですから」

「そう思う？」

「はい」

思春の返事

それに、蓮華は嬉しそうに微笑み“それじゃあ”と席を立つそれから何かを取り出すと、それらを両手に持った

右手には……あの霸王曹孟徳が持っているはずの“絶”を左手には首輪を

それぞれ持ちながら、彼女は朗らかな笑みを浮かべ言ったのだ

「 ちょっと、一刀を飼ってくるわね 」

節子、その装備は違う

“ 飼ってくる ” やなく、 “ 狩ってくる ” や

そう思うのと同時に、思春は蓮華よりも先に部屋を飛び出していった

蓮華さんは、何処か遠くへと行ってしまったようです

開十幕

—————

「今日も楽しく“性務”だ、イエイエエ~~~~~イ」

本日もまた晴天なり

あまりの天気の良いさに、思わず鼻歌(?)まで口ずさんでしまう始末だ

それほどまでに、今日も今日とて良い天気なのだ

おっと、自己紹介が遅れたな

俺の名前は“北郷一刀”

乙女だらけの三国志の世界に迷い込んだ“孤高のイケメン”こと“天の御遣い”として三国の中心に造られた都で日夜乙女たちと“イチヤイチヤチュツチュ”している“健全な男の子”だ

それはもう健全な毎日を過ごす俺にとって、このような天気の良い日はこうして散歩するのが日課になっているのだ

「ん、今日はどうすっかなあ

久しぶりに、霞でも誘って遠乗りにも行くか？」

こんなに良い天気なんだ

少しくらい遠出したってバチはあたらないだろ

そんで、そのまま・・・っと、いかんいかん

想像が、どんどんと健全な方向へと進んで行ってしまった

「北郷—————!!!」

「ん？」

などと俺が考えている時だった

遠くから聞こえてきたのは、思春の声

どうしたのかと向けた視線の先

猛ダッシュでこっちに向かってくる思春の姿が見えた

「おいおいおい

俺ってば、またなんかやっちゃいましたか？

彼女の堪忍袋の緒をプツンさせるようなことしちゃいましたか？」

アレか？

この間、“思春の禪のガラをコツソリとつとこハム太郎にしたことか？”

それとも、“思春に内緒でメイド服思春の抱き枕を作って部屋に飾
っちゃったことか？”

うん・・・ダメだ、心当たりがありすぎる

「逃げるか・・・」

「そうは問屋がおろさんぞ」

「げえ、甘寧!!?」

は、早い!?

流石、呉の暗殺部隊・・・恐ろしい速さだ

「オーケー、わかった
もう逃げも隠れもしない
ただ一つだけ頼みがある・・・俺の息子（下半身の）だけは殺さな
いでやってくれ」

「何をわけのわからないことを言っているんだ?」

「あれ?」

俺のことを成敗しにきたんじゃないの?」

「お前、私がいつもそんな理由でお前のことを呼ぶと思っているの
か?」

というか待て・・・そういう心当たりがあるってことだな?」

「あっははは、藪蛇だったWWW」

やっちったZE

「・・・って、そんなことを話している場合じゃない！
北郷、ちよつとこつちへ来い！」

「・・・へ？」

グイと服を引つ張られ、連れて行かれたのはすぐ近くの空き部屋
彼女は俺をそこに押し込むと、一緒にその部屋へと入り静かに扉を
閉じたのだ

「お、おいおい

今日はやけに積極的だな思春

こんな朝っぱらに、そっちの方から誘ってくるなんて・・・」

「ばっ、違う！！

これには、理由があるんだっ！」

「理由？」

なんだなんだ？

思春がいきなりこんなことするなんて、どんな理由があるんだよ？

「一刀~~~~！」

「ん……？」

そんな時ふと、声が聞こえてきた
この声は……蓮華？
どうやら、俺のことを探しているらしい

「いったい、何の用だろう」

「あ、馬鹿……！」

呼ぶからには、何か用事があるのだろう
そう思い、ゆっくりと扉を開いていく

そして見えたのは……

「一刀~~~~、何処にいるのかしらあ？」

笑顔のまま、絶と首輪を持って歩く蓮華の姿だった

「・・・・・・・・」

無言のまま、静かに扉を閉める

それからその場にしゃがみ込み、俺は大きく頭を抱えた

「おいおいおい、ちょっと待ってくれ
俺、なんかした？」

ていうか、なんで絶持ってたの？

なんで華琳、蓮華に貸しちゃったの？

いやそもそも、なんで首輪？

飼われるの？

俺を飼うつもりなの？」

「落ち着け、北郷」

「これが、落ち着けるかよ！

“今まで散々色んな人のSSの中で蓮華が病華になるやつがあったけど、いざ目の前にそうなった蓮華がいた時のこの驚きがわかるか”！?」

「馬鹿、静かにしろ!？」

「一刀~~~~?」

「「っ!！」」

二人で、咄嗟に口をおさえる

幸いにも、先ほどは俺の姿を見られることはなかった
ここで静かにしていれば、たぶんやり過ごせるだろう

「……そもそも、どうしてこうなったんだよ？」

「ああ、それはな……一言でいうと」

「蓮華様は、何処か遠くへと行ってしまったようなのだ」

「ごめん思春、わけがわからないよ」

本当にわけがわからないよ思春
だいたい、何処に行っちゃったんだよ
蓮華は、何処まで行っちゃったんだよ

「そうだな、簡単に言つと・・・“浮気ばかりの夫を何とかして自分の傍に置いとこうと考えた結果、首輪をつないで家で飼えばいいじゃないという結論に至ったみたいだ”」

「どうして、そういう結論に!?!
そして、浮気ばっかしてごめんなさい!?!」

浮気っていうか、皆おれの嫁なんだけどねw
まあ言ったら殺されるから、絶対に言わないけど

「ど、どうしよう
もし見つかりでもしたら、俺孫呉の屋敷で飼われることになるのか
?」

「正確には、“蓮華様の寝所” だな
だが、安心しろ
その・・・わ、私が助けてやろう」

「・・・え?」

「まだ幼い甘迷に、父の死は早すぎるしな」

「思春……」

「……ごめん、ちょっと待って

なんか良い話な感じで纏めてたから、聞き流しそうになったけどさ
“なにこれ、命までかかってんの”!？」

「ああ……一言でいうなら、“デッドorダイ”だ」

「死んでるじゃねーか
もう、殆ど死んでるじゃねーか」

なにそれ、飼い殺す気ですか？
蓮華さんは俺のことを飼い殺す気なんですか？

「まあ、多少の御幣はあるかもしれないが……先ほどの様子を見てわかっただろ？」

今の蓮華様に見つかったら、マズイということが」

「ああ、絶対に見つかるわけにはいかないな」

「幸いにも、私は呉の暗殺部隊だ
隠密行動に関してなら自信がある
蓮華様一人なら、問題ないだろう」

“蓮華一人なら”

その一言を聞き、俺はサアと血の気が引いていくのがわかった

「思春、ごめん・・・」

「む・・・いつたい、どうしたのだ？」

「実はさ・・・」

「ご主人様あああああああ、いつたい何処をほつつき歩いてん
ですかごるああああああああああああ！……！……！」

「一人じゃないんだよねww」

「貴様、また政務をサボったのかあああああああああ!!!
!???」

ごめん、思春w

おれつてば今、怒れる軍神様に追いかけてる途中だったんだよ
ねww
ていうか、そんな大声で叫んじやったら・・・

「っ、そこかつ!!!?」

「そつちね!!!?」

ああ、ホラやっぱり
なんて俺が思うのと同時に、思春は俺のことを背負い窓から部屋を
飛び出していった

—————

「華佗、大変だ！」

なんか俺、厨二病を患ったみたいなんだが……」

「なあ、冷やかしなら帰ってくれないか？」

などと言いながら、目の前の青年……華佗は、心底疲れたような表情で言った

そのノリの悪さに苦笑しつつ、俺は診察用にと置かれた椅子に腰をかける

「冗談だよ

実は、ちよつと匿ってほしくてさ」

「なんだ、また何かやらかしたのか？」

「いや、まあ色々あってさ」

言いながら見つめた先

窓から、外の様子を警戒する思春の姿があった

「思春・・・どうだ？」

「今のところ、大丈夫そうだ」

そう言つて、思春は安堵の溜め息を吐きだした
よかった・・・無事に撒けたようだ
ていうかあの二人から俺を背負った状態で逃げ切るなんて
思春さん、マジパネエっす

「はあ・・・よかった

背負われながら、チラツと見えただけどさ
2人とも、凄い怖い目をしてたんだよね」

「ああ、凄まじい目をしていた

“まるで、つい最近までシャムを探し回っていた華琳のような目を
していたな”」

「ああ、そういえばそんな感じだったな」

あの時の華琳は恐かったなあ
璃々ちゃん、泣いてたもんね
幼女の泣き顔可愛いよ、幼女

「いかん・・・思いだしたら涎が」

「馬鹿なこと想像している場合じゃないぞ北郷
此方に向い、足音が近づいてきている」

「マジかよ？」

悪い華佗、ちよつと寝台を借りるよ

仮に蓮華か愛紗が来て俺が何処か聞いてきたら、
“世界の中心まで
愛を叫びに行つたつて言つといてくれ”

「わかつた

“別の女の尻を追いかけて行つたと伝えておこつ”

ちよ、てめつww

よくわかつていらつしやるww

「華佗、少しいかしら？」

「「っ・・・！」」

「ああ、構わない」

聞こえてきた声は、今は一番聞きたくなかつた
蓮華の声だ

俺と思春は咄嗟に、部屋にある患者用の寝台に潜り込んだ

「少し、聞きたいことがあるのだけど」

「なんだ？」

「此処に世界の中心まで愛を叫びに行くとか言って、別の女の尻を追い掛け回しに行くような男が来なかったかしら？」

クリティカルです、蓮華さん
いつそ清々しい程に、胸の奥を抉っていく一撃です
本当にありがとうございます

「ぶ……く、いや、知らな……ぶぶっ」

そして華佗、ためー何笑ってんだよ
いや、思春もおれの隣で必死に笑い堪えてるみたいだけでもさ

「そう、知らないのね
何故かしらね……」
「此処から一刀が他の女とイチャラブしている
ような気配が漂っているのだけだ」

どんな気配ですかそれは
そこまでくると、素で恐いんですけど

「不味いかもしれんな・・・」

「どうした、思春？」

「いや・・・今の蓮華様は、いつもより鋭いなんてものじゃない
それこそ、“北郷の穿いた下履きをゴツソリとすり替え部屋に持ち
帰った時と同じ目をしている”」

「待つてください、思春さん

今、なんかとてもスルー出来ないような事実が飛び出したような気が
したんですけど」

「それだけじゃない

あの体中から発せられるオーラは、“この間凧と一緒に自分たちが
集めた北郷の下履きコレクションを見せ合っていた時のものだ！”」

「ねえ、お願い

お願いだから、そこら辺のお話を一回詳しく話してくれないかな？
場合によっては俺、“今日から下着は金庫に仕舞うから”」

ていうか、蓮華さん何してるの？

そして、なんで凧まで混ぜっちゃってるの？

「あれえ〜、おかしいわねえ」

「え……」

ふいに、聞えてきた声

蓮華の声が、だんだんと近づいてくる

おいおい、まさか……

「今確かに、一刀の音が聞こえた気がするのだけけど？」

「っ思春!!！」

「わかってる!!！」

バツと、2人で同時に勢いよく寝台を飛び出す

瞬間、その突然の行動に焦る蓮華

その隙をついて、俺たちは彼女を通り抜けた

そして向かうのは、出口……!!！」

「ご主人様、お仕事のお時間ですよ？」

「オーマイゴッド……」

ジャーンジャーンジャーン

あれ、関羽って伏兵持ちだったっけ？

「さて一刀、追いかけてこはお終いね？」

「蓮華さん、当たってます」

華琳さんから借りている絶の刃が首に当たっております」

そして、後ろには孫権様です

まさかあの孫権と関羽のタッグとはね

正史もビックリだ

ていうか、思春は……彼女の背に、グッタリとした表情で背負わ
れているじゃありませんか

マジですか、蓮華さん

あの思春を一瞬でKOですか

「まったく……やれやれだ」

そう思い、見つめた先

窓の向こう、広がる青空を見つめ……俺は微笑んでいた

ああ、そうですね
またこんなオチですか

「空……お前が羨ましいよ」

でも、不思議と悔いはないよ
何故なら俺は、やるべきことをやったんだから

「俺の夏休み（サボリ）……終わっちゃった」

けどさ……

「さあ、御主人様……」

「さあ、一刀……」

“恐怖”は、ものっそいあるかなあ……

楽しい楽しい、“性務”のお時間ですよ

アツ
.....

+-----

「俺は蓮華のことを愛してるから
だから、心配したりしないで」

「うん・・・」

寝台の中

生まれた時のままの姿で、眠る俺たち

隣では、蓮華が微笑ながら俺に抱き着いている

「蓮華は、とても魅力的な女の子だよ」

「うん、うん・・・」

おれの言葉に、頬を微かに赤く染め喜ぶ彼女
愛する人と、こうして愛を語り合う
とても幸せな時間

そう・・・

「だからお願い・・・」 “この首輪と手錠と足枷とピーポ君人形を外
してください蓮華様”

「ダメよ」

こんな状況じゃなければ、とても幸せな時間だったはずなんだ

どうしてこうなった？

なんて考えるまでもなく、結局あの後捕まったからである

愛紗はというと、どうやら明日は彼女の番らしく笑顔のまま帰っていった

因みに思春はというと・・・ふっ、まあいい

「さあ一刀、今日は一日中愛し合いましたよ」

首輪を引っ張りながら言う蓮華さんは、本当にイイ笑顔でした
蓮華さん、愛が痛いです

「お、お手柔らかに」

「だが断る」

「ちよ、ま・・・アツーーーーー」

次の日

見つめた太陽は、何だか黄色く見えた

余談だが、次の日から思春の渾名は“王墨”になった

知らない人は、ぜひともググってほしい

蓮華さんは、何処か遠くへと行ってしまったようです
閉十幕

超絶余談なのだが・・・

「あ、あの皆さん？
今が一体何のお時間かわかりでしょうか？」

「なにつて、朝議の時間でしょ？
そんなのわかってるに決まってるじゃない、ご主人様」

「ああ、そうだね
今は朝議の時間だ」

うん、桃香の言うとおり

今は大事な大事な朝議のお時間さ
だからね・・・

「その皆さんが持っている首輪やら手錠やら鎖やらは、朝議では
一切使わないんじゃないでしょうか？」

あのね、さっきから“ジャラジャラジャラジャラ” 凄いだよね
もうね、冷や汗が止まらないもの

ていうか思春さん？
なんで貴女まで混ざっているのでしょうか？

「大丈夫だよご主人様」

「そつよ、安心なさい一刀
すぐによくなるわ」

華琳さん、安心できません

ていうか待って、華琳さんその“ポチ（種馬種）” って名札はなん
ですか？

第6話 蓮華さんは、何処か遠くへと行ってしまったようです（後書き）

いかがだったでしょうか？

機会があれば、こちらでもリクエストを聞いてみようかと思います

ww

それでは、またお会いしましょう

第7話 焔耶さん、犬耳です！？（前書き）

続けて、7話です

本作もまた、リクエストSSでしたw

しかもお気づきの方もいらっしゃるでしょうが、本作と前の作品と
その前の作品

地味に、お話がつながっておりますww

それでは、お楽しみください

第7話 焰耶さん、犬耳です!?

「・・・は？」

それは、心地の良い朝の陽ざしに照らされた中庭でのこと
馬岱こと蒲公英は、その一言に言葉を失ってしまった
そんな彼女の様子にも気づくことなく、その問題の一言を発した張
本人である焰耶は真剣な表情を浮かべたまま話を続ける

「お館に愛してもらうにはやはり、犬耳だと私は思うんだ」

「う、ごめんちょっと待って

あまりの急展開に、蒲公英ちょっとついていけないから」

“というか、いつの間にデレたの？”

などと、彼女は小さく頭を抱える

無理もない話である

“真・恋姫十無双”では、最後まで完全にデレることのなかった彼女がここまでデレたのだから

“萌将伝”恐るべし

「ていうか、なんで犬耳？」

ご主人様って“女の子なら百合だって構わないで喰っちゃまうような男なんだし”

そんな、犬耳とか気にしないでも大丈夫だと思うけど」

「いや、そんなことはない

こちらの服装などがお館のストライクゾーンだった場合、いつもの三倍は愛してもらえるんだ」

「さ、三倍・・・？」

「わかりやすく言えば・・・“次の日、足腰が立たない”」

その一言に、ゴクリと蒲公英は唾を呑みこんだ
想像してしまったのだろう

彼女の頬は、微かに赤く染まっている

「す、すごいね・・・」

「ああ、すごいんだ

だからお館のストライクゾーンを狙っていこうと思ったんだが・・・

」

そこで彼女は腕を組み、蒲公英を見つめ呟いた

「“粗暴な蜀軍に咲く一輪の冬虫夏草こと蒲公英”の意見も聞いて
みたくてな」

「ちょっと待てコラ
なにその、全然可愛くない二つ名
そんなの名のつた覚えないんだけど・・・」

「私はやはり犬耳が隊長のストライクゾーンだと思うんだ
いや、“熟女”も有力なんだがな
流石にまだ、“そこまで歳はとってないし”・・・」

「話を聞けつて・・・ていうかちょっと、ホント待って！
駄目、その話題ダメ絶対！！」

言うやいなや、“スコン”と蒲公英の尻に刺さる矢
“なんで私!?!?”と叫びながら、彼女はその場を転げまわった
そんな彼女の様子に気づくことなく、焰耶は“よし”と呟き駆け出
して行った

「とにかく、やってみる!!
桔梗様たちみたいにな年増な技はなくても、お館をメロメロに出来る
んだって証明してみせる!!」

「ちょ、まつ、ひんっ!?!?!?」

“ヒュン” “プスリ” “スコン”と、次々と蒲公英の尻に刺さつて
いく矢

“だから、なんで私っ!?!?!?”と、悶える彼女

その目には、大粒の涙が溜まっていた・・・

焰耶さん、犬耳です!?

――――

「性務” イエイイエ”~~~~~イ”

本日もまた晴天なり

あまりの天気の良いさに、思わず鼻歌(?)まで口ずさんでしまう始末だ

それほどまでに、本日もこれまた良い天気なのだ

おっと、自己紹介が遅れたな

俺の名前は“北郷一刀”

乙女だらけの三国志の世界に迷い込んだ“孤独な檻に封じ込められ

しイケメン”こと“天の御遣い”として三国の中心に造られた都で
日夜乙女たちと“真夜中の武闘会”を繰り広げている“孤高の武人
”だ
それはもう健全な毎日を過ごす俺にとって、このような天気の良い
日はこうして散歩するのが日課になっているのだよ諸君

「ん、今日もいい天気い
そうだなあ・・・“今日は麗羽のクロワツサンでもコッペパンに変
えて遊ぼうかな”」

うん、そうしよう

“本当は華琳のクロワツサンを明太フランスにしてやりたいけど、
その後のお仕置きが恐いもんな”
その点、麗羽なら全然恐くないし
安定の袁家だよね、やっぱ

「そうと決まれば、さっそく麗羽を探しに・・・」

「お館~~~~~!!」

「ん？」

ふと目を向ければ、こちらに向かって走ってくる焰耶の姿が見えた
その姿を見つめ、俺は言葉を失ってしまう

「なっ・・・焰耶、それは？」

「へへ、どうかな？」

お館、こういうの好きだったと思って・・・」

「焰耶、好きだああああああ！！！！」

「ひゃあ！！！！？」

照れ笑いする焰耶を抱き締め、俺は叫んでいた

だつて、仕方ないだろ？

“犬耳”なんだぜ！？

あの焰耶が犬耳を装備して、さらに尻尾までつけてるんだぜ！？

これが叫ばずにいられるか！？？

おれにはできない！！

「ヤヴァイ！！

ヤヴァイよ焰耶！

すっげえ可愛いよ、焰耶可愛いよ、くぁ W s d r f t g y ふじこー
ッ！！！！」

「お、お館落ち着いてくれ！

そのっ、ここだと人に見られちゃうからっ！！！！」

「構うもんかっ！！！！

むしろ、見せつけやる！！

俺と焰耶のこの超絶ラブラブっぷりを・・・」

「ご主人様あああああ！！！！」

今日という今日は、もう本当に“関羽袋の緒が切れましたよ”！！！！！！

見つけ次第、今夜は私の部屋に閉じ込めて寝かせませんからねゴル
アアアアアアアアアアア！！！！！！」

「・・・よし、場所を変えようか」

「お館・・・また仕事サボったのか」

「違うんだ、違うんだよ焰耶
今回は真面目に頑張ってたんだ

“頑張って机の上に積まれていた書簡で焼き芋を焼いてたんだ”

「なんてことしてんだよ・・・そりゃ、愛紗も怒るよ

“関羽袋の緒”もプツンしちゃうよ」

「いや、そこまでは良かったんだ

愛紗が後でやってきて、“こんなこともあるのか”ってドンと机の上に“新しい書簡と亀甲縛りされた思春を置いて行ってさ”

嘘みたいだろ？

俺がそうすると見抜いて、偽の書簡を置いてたんだぜ？」

はは・・・これは、ある意味信頼されてるって思ってもいいのかな？

最初の一発目は、絶対に真面目にやらないって思われてるんだもんな

あはは、泣いちゃいそう

いや、やらないんだけどさ

「けど、俺もそこで思ったんだ

ここで負けるわけにはいかないよ」

「いや、真面目に仕事しろよ」

焰耶のツッコミをスルーしつつ、俺は語り続ける

あの苦しくも、熱い戦いのことを・・・

「まあ簡単に言うとな・・・“閉じ込められた世界が嫌で、外の

世界へと飛び立ってみたくなつたんだ”」

「ああ、“逃げたんだな”」

はい、その通りであります

因みに、思春はそのままスルーしました

前回の“王墨の刑”以来、何かに目覚めてしまったらしい机の上で、なんか“ビクンビクン”してたし

とりあえず、美味しくいただくのは今度にする

—————

というわけで、場所は変わり・・・此処は“中庭”
俺は今、焰耶を膝枕している

「な、なあお館

これって、普通逆なんじゃないのか？」

「いや、そんなことないさ

今の焰耶は可愛い犬なんだし、もう少し飼い主に甘えてもいいんだ

ぞ？」

「か、可愛い犬・・・」

言われて、焰耶は顔を真っ赤にさせる

ああ、可愛いなあ

心なしか、尻尾もパタパタ動いてるように見える
やべえ、マジで癒される

「ああ、何か冗談抜きで幸せだ

“少し前まで皆の部屋に首輪とかつけたままの状態で監禁されてた
日が、もう気にならないくらいだよ”

あれは、嫌な事件だった

もう、正直トラウマになりかけたもん

まあ、いいか

そんな出来事も、いずれ楽しかった思い出に変わっていくんだ

ああ・・・

「こんな日が、いつまでも続けばいいのにな・・・」

「お館・・・？」

そう言つて、見あげた空
憎らしいほどに、青く澄んだ空を見上げながら
俺は、小さく笑いを零していたんだ

「こんな風に、皆で馬鹿やってさ
大好きな人と、こうやって温もりを感じあつて
ずっと……こうやって、楽しい時間が過ごせればいいのにな」

「お館？」

なに言つてるんだろ
そう思い、苦笑してしまう

きつと、今が楽しすぎるから
今が、本当に幸せだから

きつと……恐くなつたんだと思う

「……お館」

「ん……つて、ひゃあ!？」

呼ばれて、振り向いた直後

焰耶の行動に、俺はビクリと体を震わせてしまった

彼女は、俺の頬をペロリと舐めてきたのだ
それから、照れくさそうに笑った

「似合わないよ、そんな顔

お館は、やっぱり笑ってないと」

「焰耶……」

そう言っつて、彼女は俺の体に抱き着いたのだ
それから、小さな声で呟く

「飼い主がそんな顔してると……不安になるんだぞ？」

「っ……」

“わんっ”と、犬の真似をしながら笑う焰耶
その姿に、胸が高鳴った

あ、これはヤヴァイ

もうね、“俺のパトスが弾けちゃいそうなの”

「焰耶……」

「お館・・・」

眩き、顔を近づけていく

焰耶は、頬を赤くしたまま目を瞑っていた

やがて、二人の距離は・・・

「見つけましたよ、御主人様？」

「・・・」

一気に、離れていった

そして、無言のまま見つめた先

素晴らしい笑顔のまま立つ軍神の姿に、俺たちは二人ともクスリと
笑いを漏らす

それからゆっくりと立ち上がり・・・

「逃げるぞ、焰耶!!」

「わんっ!!」

「待てごるあああああああ!!!!!!!!」

一気に、駆け出したのだ

そんな俺たちのことを見逃すはずもなく、愛紗もすぐさま駆け出す

ここに、命を賭けた追いかっつこが始まったのだ

「急げ、焰耶!

俺たちの物語は、まだまだ始まったばかりだっ!!」

「わんっ!!」

「待たんか、ごるあああああああ!!!!!!!!」

まあ・・・二分後に、二人仲良く捕まったのだが
愛紗さん

いつの間に、テレポートなんて覚えたんですか?

焰耶さん、犬耳です!?

閉上幕

――――十――――

いや、まあ

本当に、余談なのだが・・・

「おい、北郷・・・」

「な、なにかな思春」

執務室

俺がいつもものように机に積まれた書簡でジェンガをして遊んでいる時のこと

思春は真剣な表情のまま、俺のもとまで訪ねてきていた

最初こそ、“何かあったのか？”と思ったのだが

彼女の姿を見て、俺は引き攣った笑みを浮かべることしか出来なかった

その恰好とは・・・

「北郷、私の格好を見てくれ

コイツをどう思う？」

「すごく・・・亀甲縛りです」

そう・・・亀甲縛りである

いや、ていうか何で？

「そして偶然なのだが、私は今“蠟燭”を持っていてな」

「へ、へえ」

なんで？

なんで亀甲縛りなうえに、蠟燭まで持ってるの？

なんでそんな準備万端なの？
なんでそんなハアハアしてるの？

・・・ダメだ

嫌な予感しかないよ

「いつけね、そういえば愛紗に呼ばれてたんだっただ・・・」

「おっと、逃がさんぞ」

「ひいつ!？」

一瞬だ

一瞬で頬を赤くさせたまま、思春は俺を担ぎ上げ寝台へと投げ込んだのだ

そして、そのまま俺の体の上に馬乗りになる

「なんだ？

蠟燭では足りないのか？

いや、私としては鞭で叩かれるというのも存外悪くないのだが
それともあれか？

放置プレイか？

ふふ・・・悪くない」

「ちょ、まっ、違う!!!」

思春さん、頼む相手を間違ってるよ!？
君のトレーナーは蓮華だろ!！？
俺じゃない、俺じゃないよ!！?」

「さあ、北郷!

この蠟燭で!この鞭で!
存分にこの私を可愛がってくれ!！」

「それは、俺の趣味じゃないんだあああああああ!!!」

・・・完!

第7話 焔耶さん、犬耳です！？（後書き）

さて、いかがでしたか？

蒲公英は、近いうちきつと活躍するはずですよ！

それでは、またお会いする日までww

第8話 私のことを見てほしくて、華琳の、華琳による、華琳の為の、華琳・

ども、8話になりますw

今回は“TINAMI”にてお世話になった御方のイラストにつけたSSです。

カオスな内容ながら、最後にちょっと温かな気分になれる・・・そんな物語

それでは、お楽しみください

第8話 私のことを見てほしくて、華琳の、華琳による、華琳の為の、華琳・

それは、ある日のことだった・・・

「・・・？」

廊下を歩いていたら私の耳

ふと・・・誰かの声が聞こえた気がしたのだ

私は一度足を止め、軽く辺りを見回した

すると視界の先・・・中庭の方

そこに見えたのは、見慣れた姿

あれは・・・一刀と霞？

「何をやってるのかしら・・・」

眩き、そつと近づいていく

それに伴い、二人の会話が聞こえてきた

「やっぱり・・・霞って、髪をおろしたら雰囲気変わるよね」

「そ、そうなん？」

「うん・・・なんかいつもと違う感じで、すごいドキドキするよ」

「なんやその言い方やと、普段はドキドキせえへんみたいに聞こえるんやけど？」

「ははは、そんなわけないだろ」

「いつもと違うドキドキって意味さ・・・もちろん」

「ふふ、なら・・・ええわ」

「霞・・・」

「一刀・・・」

へっ・・・真っ昼間から、良い度胸じゃない一刀

まさかこの屋敷の中で白昼堂々、その種馬っぷりを発揮するなんてねえ

けど・・・

「今回は、見逃してあげましょっ・・・」

ふう、と・・・溜め息をこぼし、私はその場を後にする

というのも、霞の邪魔をしたくなかったからだ

北郷一刀

彼の存在はもはや、三国の者にとって掛け替えのないものとなっている

そしてその為、彼と共に過ごす時間は限られてしまう

何せ、三国の者が皆・・・彼のことを愛しているのだから

だからこそ、私は霞の邪魔をしたくなかった

彼女もきつと・・・その日を待ちわびていたのだから

ようやく彼と一緒に過ごす今日という日を、きつと待ちわびていたのだ

「けど・・・髪、ねえ」

自分の髪を触り、私は小さく呟く

一刀は言っていた

髪をおろした霞を見て、ドキドキすると

じゃあ・・・

「私も・・・なんて、ね」

言って、苦笑する
馬鹿馬鹿しい

いくらなんでも、それだけのことで・・・

それだけのことで・・・

「それだけで・・・なんだっていうのよ」

わけがわからない

私は今、何を思っていたのだろうか？

「疲れてるのかしら・・・」

きつと、そうだ

そう自分の中で解決し、私は足早に歩いていく

自分の中・・・ぐるぐると渦巻く感情を、胸の奥にしまい込んで

《私のことを見てほしくて、華琳の、華琳による、華琳の為の、華琳・・・あれ？》

――十――

翌日

仕事も落ち着き、どこかに昼食でも食べに行こうと城内の廊下を歩いていた時だった

「あら？」

視界の先に、一刀の姿があった

その隣には、雛里がトコトコとついて歩いている

今から、お昼なのかしら？

なんとなく気になり、私は二人に話しかけようと近づいていく
すると、聞こえてきたのは・・・一刀の声

「なあ雛里・・・ちよつと、髪おろしてみないか？」

ピタリと、足が止まる

そんな私のことに気づかないのか、二人は話し始めた

「あわわ!？」

いきなり、どうしたんですか?」

「いや、ちょっと気になってさ・・・駄目、かな?」

「あわわ、別に・・・構いませんが」

微かに頬を赤く染めながら、雛里は頷く
それから、彼女はゆっくりと髪をおろしていく

「ど、どうでしょう?」

やがて、真っ直ぐにおろした髪を恥かしそうにいじりながら・・・
雛里は一刀の言葉を待つ

「可愛い・・・」

「・・・え?」

「すごい可愛いよ雛里!」

似合う、超似合うよひなり~~~~ん!」

「あ、あわわわ!？」

そ、そんな急に抱きつかないで下さいよ!?!?」

頬を思いっきりユルまし、雛里に抱きつく一刀・・・もとい、種馬あの時と場所を選ばない行動に、私は改めて殺意を抱いた

それと同時に、胸の奥広がっていくのは・・・よくわからない、モヤモヤとした感じ

この感じ、昨日と同じ感じ

よくわからない、不快感にも似た感じ

これは・・・何なの？

「あつ、華琳っ!」

「っ!?!?」

考え込む私にかかる、彼からの声
急ぎ見た先に、彼の笑顔があった

瞬間、私の中で意味不明な苛立ちがわいてくる

なによ・・・なんなのよ!

人がこんな悩んでいるのに、なにへラへラ笑ってるのよ!?!?

「……………」

その翌日

「……はあ」

一人歩きながら、こぼれでる溜め息
原因は、昨日の出来事

昨日のアレは、いくらなんでもやりすぎた
イライラしたからって、いきなりアレは不味いわよね普通
でも……

「何だったのかしら、あの感じは……」

わからない
胸の奥に広がった、あの妙な感じの正体が
なんなのよ、もう

「あ……」

そんなことを思いながら歩いていた私の前に見えたのは、件の彼の姿

一刀はどこかへ向かう途中なのか、手に幾つかの書簡を持ったまま歩いていた

声をかけよう

そう思い、彼を呼ぼうとした時だった

「ああ、隊長なの」

彼の後ろから勢い良く彼に抱きつく少女の声に、私は出そうになった言葉を引っ込める

そんなこと露知らず、少女……沙和は嬉しそうにニコニコと笑いながら、彼の手を握っていた

「見て見て、沙和髪おろしてみたの」

「へ、うん……可愛いよ、沙和」

「えへへ」

・・・まただ
また、この感じだ

彼を見ていると・・・広がっていく、このわけのわからない感じ

駄目だ、わからない
私には・・・

「あ、華琳じゃないか」

「っ・・・」

ハッと、我にかえる

そして見つめる先、ニッコリと笑う彼がいた

とにかくまず、昨日のことを謝りましょう

そうよ、魏王たるもの・・・己がしでかした事に対して、しっかりと謝罪をしなくてはいけないのよ

何度か自分にそう言い聞かせ、私は再び彼を見つめる

「あの、かず・・・」

「あ、そうだ見てよ華琳

沙和が髪おろしてみたらしいんだけど、似合うよな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピシリと・・・私の中で、何かにヒビがはいる
そして広がっていく、あの不快感にも似た感覚

「この・・・」

「あ、あれ華琳さん？」

なにこれ、すごいデジャブ・・・」

「この超絶鈍感ドM一刀――――！！
！！！！！！！！！！」

「サ――――イエッサ――――！！

「……………!?」

「隊長……………!?」
「?????」

彼の“七性我漏”を決るように蹴り上げ、私は駆け出した

この胸を締め付けるような“感情”に、戸惑いながら……

……………

そのまた翌日……

「ふう……」

政務も一段落し、私は一人……窓の外を眺めていた

一昨日に続き、昨日のことを思い出しながら

まさか私が、あんなことを続けてしでかしてしまうなんて

参ったわね

「本当に……どうしたのかしら」

胸に手をあて、そっと呟く

わけのわからない、理解できない……あの、モヤモヤとした感じ

私は……いつたい、どうしたというのだろう

「はっ……魏王ともあろう者が、馬鹿馬鹿しい」

「あ、兄ちゃんだ！ 兄ちゃん！」

「……」

言葉を止め、窓の外を覗き見る

するとその先には、駆け寄る季衣のことを笑顔で受け止める一刀の姿があった

「兄ちゃん！」

「おっと、こんにちわ季衣

あれ、その髪どうしたの？」

「うんとね、たまにはおろしてみたら兄ちゃんからの印象が変わるからって流琉が言ってたんだ」

・・・落ち着け、落ち着くのよ私
ほら、深呼吸をしてもう一度冷静になるの
そうよ、素数を数えれば・・・

「そういえば、こうしてじっくり見るのも久し振りだな」

「どっ」

「うん、とっても可愛いよ」

「えへへ、やったあ」

・・・おかしい

私は、冷静になろうと必死だったはず
なのに、なんで・・・絶を構えているのかしら？

「兄ちゃんに可愛いって言ってもらったあ」

胸の中・・・段々と強くなっていくモヤモヤに、頭を悩ませながら

――――

そのさらに、翌日・・・

「・・・はあ」

「か、華琳様？

どうかしたのですか？」

「秋蘭・・・別に何も無いわよ」

「はあ、そうですか」

「はあ・・・」

執務室の中、秋蘭と二人で仕事をしている最中
その間にも、やっぱり考えてしまうのは・・・彼のことがた

三日連続

私らしくない不様な振る舞いに、もう頭が痛くなる

それに、昨日からさらに強くなった・・・この、胸のモヤモヤ
もう、どうしたらいいのかわからない

「はあ」

「あ、あの華琳様？」

「何かしら、秋蘭」

「お言葉ですが、華琳様は大変疲れていらっしやるように見受けられ
れます

ここは、少しの間でもお休みされたほうが宜しいのではと」

そう言って、微笑む秋蘭

知らずのうち、彼女にまで心配をかけたようだ

そうね・・・

「貴女の言うとおりだわ

少しだけ休ませてもらおうかしら・・・」

呟き、私は歩き出す

いつもよりも重い体を、引き摺るように・・・

—————

唄が、聴こえる

優しく、温かな唄が

胸の奥、静かに響いていくその唄・・・私は、その声を聞いたことがあった

この声の主を、知っている

誰よりも愛され、誰よりも私達を愛してくれる彼

胸が・・・また、モヤモヤとする

なんなのよ・・・なんなのよ、いつたい！

《わからない？》

え・・・？

振り向いた先、そこに・・・“私”はいた

私にソックリな、もう一人の私

彼女は一言呟き、そして笑った

《不様だと思う？》

自分のことを・・・情けないと、そう思ってるの？》

頷く・・・それしか、私にはできなかった

《それじゃ駄目ね・・・貴方じゃ、彼のことを愛せない》

なっ・・・!？

何よ・・・ならアンタは、そんな自分を許せるっていうの!？

《許せるわ

許せるし、私はソレを認めましょう》

自分から出た言葉とは思えないその一言に、私はしばし言葉を失ってしまっ

そんな私の様子を見つめ、優しく微笑んだのだ

《どんなに子供じみたことでも、自分らしくない行動をしてしまっ
たとしてもね

私は、それを認めるわ

だって、それは全て・・・》

「……………」

「ん……夢？」

「あ……起こしちゃったかな？」

「なっ……!？」

目が覚めた瞬間、私は目の前の光景に絶句する
私が眠る寝台に座り、私の額に優しく触れるのは……紛れもなく
彼だったからだ

「ん……熱はないみたいだね」

「なんで、一刀が……？」

「秋蘭から、華琳の具合が悪そうだって聞いてさ……心配になっ
て」

「そう……秋蘭が」

呟いて、私は改めて彼を見る
彼はその視線に気づき、フツと微笑んだ

その直後、胸の奥・・・暖かな、優しい感覚が広がっていく
これは・・・

「だけど、安心したよ
華琳にもしものことがあったら、ってすごい心配だったんだ」

“ 本当によかった ”
そう言っつて、再び彼は笑う
するとまた、私の中は温かい “ なにか ” によって満たされていく

ああ、そうか

やっと・・・わかった

あの、モヤモヤの正体が

「ねえ、一刀・・・少しだけ、後ろを向いてもらえるかしら？」

「え、別にいいけど」

そう言つて、後ろを見る一刀

その背中を見つめたまま、私はスツと体を起こした
そして・・・

「一刀・・・もういいわよ」

「ああ、わかつ・・・た」

振り向いた彼が、言葉を失っている

そんな彼の様子に、私は思わず笑みをこぼしていた

「華琳、それ・・・」

「どっ、かしらっ？」

彼の問い

私は自身の髪をいじりながら、彼の言葉を待つ

彼の前で、おろした自身の髪をいじりながら・・・

「綺麗だ・・・すごく、綺麗だよ」

「本当に？」

「ああ、本当だ

そういえば・・・こうやってじっくり見るのは、初めてだよね
いいのかい？」

確か、前に見たときは物凄い勢いで追い返されたのに・・・」

「いいのよ、貴方になら見られても

ううん、違うわ

見てほしいの・・・私のことを、貴方に見てほしいの」

やっと・・・気づいた

あのモヤモヤとした感じの正体
なんてことはない

あれは・・・“嫉妬”

私は・・・見てほしかったのだ

彼に、私のことを・・・ただ、見つめてほしかった

「一刀、お願い

今は・・・今だけは、私だけを見ていてほしいの」

「華琳・・・うん、わかったよ」

お互いに眩き、吸い寄せられるように近づいていく距離
幸せな、この空気

「愛してるわ、一刀」

「愛してるよ、華琳」

この日、私は改めて気づいた

私が・・・どれだけ、嫉妬深いのか

そして・・・どれだけ、彼のことを愛しているのか

「一刀・・・覚悟しなさいよ」

「な、なんだよ急に」

そう考えると、不思議と恥かしくなくなってきた

あんな、子供じみたことも

あんな、私らしくない行動も

全部、仕方のないことなんだって・・・そう思える
だってあれは全部、貴方のせいなのよ？

そう・・・全ては

くただ貴方に、私のことを見てほしくて・・・く

f i n

第8話 私のことを見てほしくて、華琳の、華琳による、華琳の為の、華琳・

さて、いかがだったでしょうか？

最後にホッコリしていただければ嬉しいです

それでは、またお会いしましょう

第9話 続・忠犬でいこうっ く犬猫・天下三分の計！？（前書き）

ども、お久しぶりです

今回のお話は“TINAMI”の恋姫なお祭り参加作品です

それでは、お楽しみください

第9話 続・忠犬でいこうっ く犬犬猫・天下三分の計!??

皆さん、どうもこんにちわ

ご存知顔出しイケメンこと、北郷一刀で御座います

「うん、今日も良い天気だなあ」

体を思い切り伸ばし見上げた空

今日も今日とていい天気だ

天の世界にいるじいちゃん・・・都は、今日も平和です

「ふう~~~~~!!!」

「がるるるるる!!!」

「ふう~~~~~!!!」

・・・うん、平和なんだ
これもきつと、平和な証なんだよ
犬耳と尻尾をつけた“軍神様”と“警邏隊一の忠犬”と猫耳をつけた呉の“御猫様命”な三人が、先ほどから唸り声をあげ睨み合っているのは平和な証拠なんだよ
このゾクゾクとする殺気もきつと・・・

「い、いや・・・もう現実逃避するのは止めよう」

溜め息と共に、ようやく現実と向き合う覚悟を決める俺
そして視線を向けた先、相変わらず一触即発な犬耳三人組みに思わず頬がヒクついてしまう
うん、すんごい怖い
ていうか、ここって街中だよな？
周りの視線が痛いつていうか、こんな街中で武器を出すなつていうか、誰か警邏隊呼んでこい・・・って、あの中の一人警邏隊じゃんか

「いやいやいやいや、一人でノリツッコミしてる場合じゃないだろ俺」

現実と向き合うつて、言ったそばから目を逸らしてるじゃないか
しっかりしろ！
周りからの視線がなんだ！

『うわ、また御遣い様がなんかしてるよ』『お母さん、御遣い様が・
・』『こら、見ちゃいけません!』なんて、もう言われ慣れてる
だろ!?

・・・あれ、なんか涙が出てきそうだ

「そ、そもそも・・・一体何がどうしてこうなったんだっけ?」

滲む涙を拭い、俺は空を見上げ思い出す
こうなってしまった、その経緯を・・・

続・忠犬でいこうっ　く犬犬猫・天下三分の計!??

+-----

「死ね、変態」

「……はい？」

それは、いつも通りの朝……とは、またちょっと違う朝
いつもなら月の“へう、おはようございませ御主人様”から始まる
はずなのに、今日は違った
起きがけから、詠さんのゴミを見るような目での罵倒から始まった
のだ

本当にごちそう様です

「……って、いやちょっと待て詠
朝っぱらから、それは酷くないか？」

「黙れ変態」

息をするな、死んでしまえ」

駄目だ、話を聞いてくれない

こうなったら、月に聞いてみるしかないな

そう思い、詠のすぐ隣に控える月へと視線をうつした……その瞬間

「ご主人様の……ご主人様の、“変態色情種馬汚珍 股野郎”」

「……!!!!!!」

俺はというと痛む頭をおさえながら、未だに出てこない答えに頭を悩ませていた

一体何故、あの二人はあんなに怒っていたのか？
しかし、答えは出てこない

「とりあえず、起きるか」

呟き、俺は寝台から出ようと体を動かす

「ん……」

「え？」

……と、それと同時に聞こえた声
何処かで聞いたことがあるその声に、俺は自分が入っていた寝台を
よく見つめてみる

「す……」

すると、そこには見覚えのある黒髪が
どう見ても愛紗さんです、本当にありがとうございました

「って、そうじゃないだろ」

言って、俺は未だに俺の寝台で眠る愛紗へと目をやる
何で愛紗がここに？

俺、昨日は珍しく一人で寝てたはずだけど

ていうか、アレ？

ちよっと待って、愛紗さんの頭に何かがついていらっしやるような
気が

確かこれって・・・

「犬耳・・・だと？」

GJ軍神

突き上げた親指が、どこか誇らしげに見えた瞬間だった

――――

「ど、どうして……」

「う……う……」

寝台の上

顔を真っ赤にさせ、俯く愛紗に問いかける

だが、彼女は恥ずかしさのあまりうまく言葉を発することができないようだ

けど、このままじゃ話が進まない

そう思い溜め息を一つ、俺は彼女の肩を掴んだのだ

「ハッキリ言ってくれなくちゃ、わからないよ愛紗」

「それは、その……ですね……」

瞳を真っ直ぐと見つめ言うが、未だに口ごもる愛紗

おいおい、いったいどうしたっていうんだよ？

普段の勢いは何処にいったんだ？

「愛紗、教えてくれ」

「う……う……」

もう一度、俺は彼女に言う
だが、その反応は変わらない
このままでは、埒があかない

俺が、そう思った瞬間だった・・・

「一刀様あ~~~~」

天井の上から、聞き覚えのある明るい声が聞こえてきたのは
この声は・・・

「明命？」

「はいっ！」

ハキハキとした返事と同時に、俺の背後に降り立った音がする
俺はその姿を見ようと、ゆっくりと振り返った

瞬間・・・俺は、固まってしまった

何故か？

そんなの簡単だ

「み、明命

そ、それは・・・？」

「はい、“猫耳”です！」

そう・・・猫耳である

しかも、ご丁寧尻尾までついてある

や、やべえ・・・すごい可愛いです

「どうですか？」

似合ってるでしょうか？」

「いや、うん

それはもうバッチリだよ」

けど・・・

「どうして、いきなり猫耳？」

愛紗もなんか変だし・・・」

「それについては、私がご説明いたしますっ！！」

「おっほう!!!??」

“ガッタン!”と音をたて、寝台の下から飛び出したのは・・・
風
だった

彼女はその頭に、以前つけていたあの犬耳を装備したまま俺の前に
立つ

若干・・・その頬を、赤く染めながら

「な、風っ!!!」

寝台の下には絶対に入るなど、前（メンマを求めて何千里!?!、
参照）に言っただろっ!!!?」

「も、申し訳ありません!!」

ですが、今はひとまずこの状況をご説明いたします!!」

まくしたてるよう言って、風はビシッと愛紗と明命を指さした
その直後、二人は“うっ”と表情を歪める

「ソレは、昨日のことでした・・・」

+

く昨日

私が警邏の仕事を終え、部屋に帰ろうとしていた時のことでした

「風、少しいいか？」

廊下を歩いていると、愛紗様が声をかけてきたのです

私は“なんだろう？”と思いつつも、其の場で足を止めました

「どうか、したのですか？」

「う、うむ

まあ・・・少し、聞きたいことがあってな？」

「は、はい・・・」

言って、“モジモジ”とする愛紗様

“何か、様子がおかしい”

そう思い、私が若干の不安を抱いた瞬間でした

「その、聞いたのだが・・・御主人様は、“犬耳萌え”なのか？」

「・・・は？」

愛紗様が、そのようなことを言ったのは
あまりに突然のことに、私は思わず言葉を失ってしまいました

「えっと・・・いきなり、どうしたのですか？」

「べ、別に最近ご主人様に構ってもらえなくて寂しいとかじゃない
んだぞ!!!？」

もし犬耳萌えだったとして、私が犬耳をつけて会いに行ったら・・・
その、愛してもらえないんじゃないかとか

そんなふうに思ってるわけじゃないんだぞ!!!？」

思ってるんだ・・・思いつきり、暴露しちゃってるし

私は頭をおさえ、心の中で溜め息をつきました

そもそも、何故いきなり“犬耳”などが出てきたのか

私にはまったく心当たりはなかったのd・・・

「以前にあの“王様ゲーム”とやらで風が犬耳をつけた時
ご主人様、“鼻の下が十分くらい放っておいたカップラーメンみた
いになっていたし”」

心当たりあったあああああああ!!!!!

そうです

あれは今から数日前

隊長の仰っていた王様ゲームのことだったのです

私は痛む頭をおさえ、ひとまず落ち着こうと深呼吸を繰り返しました

「あ、愛紗様？

そのですね、隊長はその・・・」

「ああ、思い出したらイラついてきた

なんだか、無性に“ご主人様のイライラ棒を切り落とす”となくって
きた”」

あ、ダメだこれ

今下手に刺激したら、隊長の“うまい棒”がとんでもない事になる
こ、ここは上手く私が誤魔化さないと

そ、そうだ・・・

「そ、そういえば

隊長は最近、“愛紗の犬耳見たいよう、愛紗の犬耳ペロペロしたい、
もうクンカクンカしちやいたいようハアハア”と言っていたような・

・・・」

「・・・なに？」

“ピクン”と、愛紗様の耳が動きました

それから大きく咳をすると、生き生きとした笑顔で走っていったの

です

私は“もしや”と思い、すぐさま隊長の部屋に忍び込み寝台の下へと隠れて待機していました

すると案の定、愛紗様は隊長のお部屋へとやって来たのです

ただ、唯一誤算だったのは・・・

「むにゃ・・・璃々ちゃん、愛してるよ」

「このロリコン」

隊長がすでに御就寝していたということでした

そのことに戸惑う愛紗様は、仕方なく隊長のお隣に寝転がり

「おやすみなさい、御主人様・・・」

そのまま、眠ってしまったのです・・・

—————

「そして、現在に至るといっわけです」

「うん、わかった」

とりあえず、風が普段俺のことをどういっ風に思っているのかよくわかった」

ちよつと、泣きそうになつたじゃないかなんだよ、“クンカクンカしたい”ってしかも、2人して人のことを“ロリコン”呼ばわりするなんていや、確かに璃々ちゃんは大好きだけど

「ていっかさ、だつたら明命はどうして・・・？」

「コツソリ天井で話を聞いていたのです！」

うん、コツソリ聞いていたのか

そしてそれを、堂々と暴露しちゃうのね

「それでご主人様・・・その、似合ってますか？」

「ああ、似合ってる

可愛いよ愛紗・・・」

「た、隊長!!」

私は・・・」

「勿論、可愛いよ風」

「一刀様っ!!」

「明命だって、とっても似合ってるさ」

俺の言葉に、三人とも嬉しそうな表情を浮かべていた
そして、抱き着いてくる三人
ハハ、こやつらめww

序盤こそ、月にぶん殴られたりと酷かったが
今日は、なんて幸せな一日なんだろう

「それでは、このまま散歩に行きましょっつ!!」

「・・・え?」

この一言がなければ・・・だ

「……………」

「おいおい、マジかよ」

ガヤガヤと賑わう、街中を歩く俺たち四人
しかし、その恰好は普段とは違う
三人は、本当に犬耳などをつけたまま街に出てきたのだ
そのせいか、人々の視線が集まる集まる

「隊長、どうかしたのですか？」

「いや、どうかしたのって……」

どうかしないほうがおかしいって
というか、凧は恥ずかしくないのか？

普段は、あんなに恥ずかしがり屋なのに……

「凧、そのだな……凧は、恥ずかしくないのか？」

気になり、俺はそう聞いていた
瞬間、凧は溢れんばかりの笑顔を浮かべ言ったのだ

「凄く・・・帰りたいです」

“ヤケクソだった”

なんか変なテンションのまま外に出てきて、そのまま引っ込みつかなくなつた感じだよコレ
ちよつと泣きそうじゃないか

て、ことはまさか・・・

「愛紗と明命も・・・」

「え？」

私は大丈夫ですよ

ホラ見てください・・・いつでも飲み込める様、手のひらに“人”
つて書いておきましたから」

「愛紗・・・」

それ、ダメじゃん

なんかさつきからずっと手のひらでなんか飲む動作してると思ったら・・・人って字、飲んでたのか

俺の記憶が正しければ、“城から出た瞬間がぶ飲みしてたよね”

「お二人とも、まだまだですね

私なんて、目を瞑ったまま歩いてますよ

これなら、人目など気になりませんから」

「明命、だからさつきから俺の服を掴んだままだったのか
ていうか、見えなければ大丈夫なのか？

なんか、色々ひそひそと言われてるけど・・・」

「はうあ！！？

ホントです！！？」

気付いてなかったんか

この子、本当に隠密なのだろうか？

ともあれ、三人とも何だか言って相当恥ずかしいみたいだ

「なあ、あんまり無理はしないほうがいいぞ？

早く城に帰った方がいいんじゃない・・・」

「だ、ダメです！！」

と、力強く叫んだのは愛紗だ
一体、どうしたんだよ？

そう俺が疑問に思った瞬間だった・・・

「このまま散歩を終えたら、以前の凧のように抱いてくださるので
しよう！！！！！？？？」

「ぶはっ！！！！？」

愛紗さんが、とんでもないことを叫んだのは
ちよ、ええ！？

「愛紗さん！？
そんないきなり、なんてことを叫んでいるのでございませうか！！！！？」

「だって凧があのだ耳をつけて過ごした次の日、物凄く嬉しそうな
表情をしていました！！！」

「ち、ちがう！」

俺はあの時、凧とは・・・

「そうです！！！」

凧さんばかりズルいです！！！！！」

「いや、ちよい待って！
俺のお話を聞いて・・・」

「な、なんですかいきなり!!!?
そんな約束があつたなんて知りませんよ!!!?」

「ちょ、凧さん

お願い、いつかい事情を・・・」

俺の言葉は、無情にも掻き消されていく
そもそも、この散歩にそんなルールがあつたなんて初耳だ
あの様子では、勝手に愛紗が考えていただけなんだろうが
そもそも、あの日

凧が犬耳をつけていた日
俺は、凧を抱いていない

その理由はいたって単純
天井に、優秀な見張りがいたからだ
ていうか、明命も一緒に見張ってたんじゃ・・・ああ、そういや猫
に夢中になつてて仕事してなかつたっけ

そんなわけで、愛紗の誤解なのである

しかし、もはや誤解を解こうにも遅すぎた
三人のあまりの迫力に、体が上手く動かなくなっているのだ・・・

――――

「ふう~~~~~!!」

「がるるる……!!」

「ふう~~~~~!!」

そんなわけで、話は冒頭に戻るわけだ
あれから、もう大分時間が経ったのだが……三人は、相変わらず
こんな感じだった

はあ、仕方ないなあ……

「三人とも、聞いてくれ」

覚悟を決め、俺は三人のもとへ歩み寄る
瞬間、三人の視線が俺に集まった
それを確認し、俺はフツと微笑む

「三人とも、すっかり忘れてないか？」

俺の・・・この、北郷一刀の渾名を」

「ご主人様の・・・あだ名？」

「はっ・・・隊長、まさか・・・！」

“その、まさかだ”

俺は三人のことを纏めて抱きしめると、小さな声でこう言ったのだ

「や・ら・な・い・か？」

「・・・はい・・・」

そう・・・俺は天の御遣い
そして、“天の種馬”だ

その俺が、この三人を同時に愛せないはずがない・・・！
そうだろ、俺の“ビッグフランク”！！！！

「それじゃ、帰ろうか？」

“今夜は、寝かせないぞ？”と、小声で付け足しておく
すると三人は素直に、頷き歩き出した

さて、これで万事解決だな・・・

「はたして、それはどうかしらね？」

「なん・・・だと？」

ピタリと、足が止まってしまった
その視線の先
信じられない光景に、戸惑いながら

俺は、震えたまま言葉を紡ぐ

「華琳・・・その、“耳”は？」

「ふふ、貴方の大好きな“犬耳”よ」

若干どころか、火を噴くんじやないかっつてくらいに真っ赤な顔をし

たまま華琳は言う

ああ、華琳さんもヤケクソなんじゃないっすか
滅茶苦茶、涙目じゃないっすか

「わ、私だけじゃないわっ!!」

「っ!!!??」

叫び、彼女が指を差す先

そこには・・・この都にいる皆が、猫耳や犬耳をつけているという
まるで、夢のような光景が広がっていたのだ

「皆・・・貴方に愛してもらおうと、頑張ったのよ」

「皆・・・」

そんなに、俺のことを

恥ずかしさを、堪えて・・・俺の為に
やばい、泣きそうだ

「なら・・・」

なら、俺は・・・みんなの想いに、応えなくちゃいけないんじゃないのか？

「皆……俺、ヤルよ!!」
何処までヤれるのかわからないけど……俺、頑張っ
て皆を愛する
からっ!!」

「っ……一刀!!」

笑顔のまま、胸に飛び込んできた華琳を受け止め
俺は、覚悟を決めた

ヤッテやる!

皆を……俺は、愛してみせる!!

「さあ、俺の胸に飛び込んでくるんだ!!」
この俺が……天の御遣いが、皆を受け止めてみせるっ!!!!!!」

“ワッ”と声をあげ、一斉に飛び込んでくる乙女たち

その数……ざっと五十人

「あ、あれ・・・？」

ふと、あることに気付く

・・・これ俺、死ぬんじゃない？

「皆、ちょいまっ・・・」

時、すでに遅し

俺の意識は、遠い彼方へと追いやられてしまったのでした・・・

続・忠犬でいこうっ　　く犬犬猫・天下三分の計！？
完

第9話 続・忠犬でいこうっ く犬猫・天下三分の計！? (後書き)

いかがだったでしょうか？

そのうち、他の短編の続編とかも書きたいっすねw w

それでは、またお会いしましょう

第10話 子守唄に、想いをのせて（前書き）

どうもみなさん、こちらでは本当にお久しぶりです
月千一夜です

今回は久しぶりの短編

こちらの作品は TINAMI に投稿した作品に加筆・修正を加え、さらにこっただけのオチがありますww

まあ、短編だけど続きものみたいな感じですし

TINAMIのままだと、ちょっと今後が大変そうだからというのがもあるのですが

それでは、お楽しみください

第10話 子守唄に、想いをのせて

「夏だなあ・・・」

「夏だねえ・・・」

“夏”

そう呟き、俺こと“北郷一刀”は中庭の日陰の部分に寝転がっている
そのすぐ隣には、蒲公英も同じようダルそうに寝転がっていた

“本日もまた、晴天なり”

とは、よく言ったものだ

ここ何日かずっと、こんな天気が続いている

おいおい太陽よ

たまには休んだっていいんだぜ？

こんなことを、心の中で何度呟いたことが・・・

「あつちい・・・」

「うん・・・あついな」

俺もだが、蒲公英も相当に参っているようだ
ついさつきまで一緒に“麗羽のクロワッサンを明太フランスにする
遊び”をしていた時はまだ元気だったのだが

麗羽から逃げ回ってるうちに、すっかりこんな調子になってしまった

「ご主人様、天の御遣いの力でなんとか出来ないの？」

「無理

俺に出来ることって、皆を孕ませることぐらいだし・・・」

「・・・蒲公英、まだ孕んでないんだけど？」

「もう一作

せめて萌将伝の続編で“エンパイアーズ艶乳亞厨”とかが出た暁には必ず・・・！」

「わけがわからないよ」

“あはは”と二人で笑い合い、再び我に帰る

駄目だ、あまりの暑さに“メタとかそんななんどつでもいいじゃん”
とか思ってる自分がいる
ていうか、何もする気力が起きない

「なんか、動く気力も起きない」

「蒲公英も・・・」

「このまま、ここで寝ちゃおうかな」

「あゝ、いいねソレ」

うん、そうしよう

こっちには、クーラーとかはないんだ

こんな暑苦しい日、こっやって日陰で寝るに限る

「そんじゃ、おやすみ」

「ふぁ・・・うん〜」

そうと決まれば

俺は重くなつた瞼を閉じ、意識をゆっくりと手離していく

そうだよ

俺が頑張らなくなつたって、“他の人が創つた外史の中の俺が頑張つてくれるはずだ”

だから、問題ないよな

俺一人くらい、寝てたって・・・

「ご主人様あああああ!!!」

今日もまた“政務をサボって性務ですかごるあああああああ
あ”!!!!!!

「あつづ・・・」

暑い

さつきよりも確実に、倍以上に暑い

いや、原因はわかりきったことなんだが

「ご主人様、蒲公英暑すぎて溶けちゃいそうだよ」

「俺もだよ・・・はあ」

参ったなあ

愛紗から逃げてきたはいいものの、走った分かなり暑くなってしま
ったぞ

「あら、一刀じゃない」

そんな俺たちの前に現れたのは、クルクル金髪の女の子

曹孟徳こと華琳だった

彼女は暑がる俺たちとは対照的に、随分と涼やかな表情を浮かべて
いる

流石は曹操だと、俺と蒲公英は唾を呑みこむ

「随分と、この暑さに参っている様ね」

「ああ、そつだよ」

「もう、死にそつだよ……」

「ふふ、確かにここ最近は特に暑いものね」

「とか言うわりには、随分と余裕じゃないか」

「霸王たるもの、この程度の暑さどうということはないわ」

マジか、すごいな霸王

こんな暑くても、問題ないのか

あゝ、俺も霸王になろうかなあ……って、オイ

「いかん……なんか、脳が正常に働かなくなってきたんだが」

「ていうかご主人様、顔色も悪いよ？」

「マジ？」

「まじまじ」

言われ、俺は華琳を見る

華琳はというと、蒲公英と同じ意見だったのかコクンと頷いて見せたのだ

「まさか、熱中症とかか？」

「ねえ、チユウしよう？」

ご主人様つたら、大胆~~~~」

「違う、断じて違う」

熱中症っていうのはさ・・・こう、「熱くなれ、もっと熱くなれよ！」とか“諦めんなよ、応援してる奴の身にもなってみるよ”とか“お米、食べろっ！！”とか、無意味に叫んじゃう病気かな？」

「なにそれ暑苦しい」

蒲公英の言うとおりだ

いくら凄いテニスプレイヤーだからって、目の前でそんなん叫ばれたら暑苦しくて蹴とばしてしまう

いや、うん

実は俺もどんな病気だか正確には覚えてないんだけどね

ただ、酷くなれば中々シャレにならないような病気だったのは覚えてる

「酷くなれば、けっこうマズイことになった気がするし
とにかく、何処か涼める場所を探しに行こうかな」

「蒲公英も一緒に行くよ」

「ああ、ありがとう
それじゃ華琳、おれ達はこれで・・・」

「ええ

愛紗には、“一刀は体調が悪いみたいだから、休むよう言っておいた”と伝えておくわ」

そう言って、ヒラヒラと手を振り歩いていく華琳さん
なんだろ・・・今日の華琳さん、マジ女神なんですけど

「一つ貸しよ・・・馬鹿一刀」

「――――十――――」

「とうわけで、いつか“蒲公英がコツソリ武術の鍛錬をしていた森にある川原に到着～～～”」

「到着～～～」

はい、そんなこんなでいつか行った川へと到着です

因みに俺の台詞の詳細を知りたければ、いますぐ恥ずかしがらずに【萌将伝】を買ってプレイするんだっ！

「あゝ、やっぱり川の近くだと涼しい〜」

言いながら、俺は木陰に寝転がる
うん、風が涼しいです

「蒲公英も〜〜」

そんな俺の隣、蒲公英が同じように寝転がった
彼女もまた、心地よさそうな表情を浮かべている

「ご主人様、気持ちいいね〜？」

「うん、そうだね」

蒲公英の言うとおりだ
そう思い、俺は目を閉じる
瞬間、ゆっくりと俺の意識は浮かんでいく

「ご主人様、眠いの？」

「ん・・・少しだけ」

「そっか、じゃあ寝ちやいなよ
蒲公英が、起こしてあげるから」

「ありがとう・・・蒲公英」

“どういたしまして”と、笑う声
俺はそれに微かに笑みを返し、意識をそっと手放したのだった・・・

—————
—————

何か、聴こえた気がしたんだ

優しく

温かくて

心地よくて

どこか・・・懐かしい

そんな“唄”が、聴こえた気がした

『知ってるよ……』

うん、知ってる

俺は……この“唄”を、知っている

ずっと、今よりもずっと

俺が、小さかった頃

まだ、外の世界を見たことがない頃から

ずっと、聴いていたんだ

『俺は、この唄を知っているんだ』

どんな時も

いつだって

俺のことを、包み込むような愛と一緒に

その唄にのせて、唄ってくれていた人がいたんだ

『これは……“子守唄”だ』

“泣かないで”

そう言ってくれた時もあった

“おやすみなさい”

そう言ってくれた時もあった

“愛している”

そう言ってくれた時もあった

だから俺は、こうして・・・ここまで来れたんだ

『ありがとう・・・母さん』

俺の背中を、押してくれたんだね

段々と、遠のいていく子守唄を背に
俺は歩き出す

見つめる先
溢れ出す光に向け

真っ直ぐと・・・手を伸ばしながら

きつと、もう会うことはできないだろう

俺には、こっちでも守りたい人が出来たんだから

だけど、やっぱり“さよなら”は違う気がした

“ありがとう”って

こっちの方が、やっぱり良い気がしたんだ

だから・・・

「ありがとう、母さん・・・」

さあ、目を覚ませよう

そして・・・“伝えよう”

“彼女”に

この・・・俺の“想い”を

――――
十――――

「あ……起きたんだね」

開いた瞳に映った、美しい少女の姿
いつの間にか俺は、蒲公英の膝を枕にして眠っていたようだ

「うん……ありがとう、蒲公英」

「ううん、気にしないでよ」

ご主人様の寝顔も見れたし、役得って感じだったし」

“なんだよ、ソレ”と、俺は笑う
それにつられ、蒲公英も笑っていた

「あ、それと……唄も、歌ってくれてたんでしょ？」

「つうええ!？」

きききききき聴いてたの!?!?!?」

俺の言葉

蒲公英は、顔を真っ赤にしてしまう

そんな彼女の様子に、俺は声をあげて笑っていた

「恥ずかしがらなくっても、いいのに
凄く、綺麗な唄だった」

「そ、そうかな？」

“そうだよ”

言って、俺は彼女の頬にソツと触れる

「おかげで、俺も“覚悟”が決まったから」

「“覚悟”・・・？」

キョトンとする彼女

そんな彼女もよそに、俺はポケットからあるモノを取り出す
そしてそれを彼女に手渡した

「コレ・・・なに？」

ソレは、“小さな箱”

白く、とても地味な箱

「開けてみて」

彼女はそれを不思議そうに見つめた後、そつと開ける
そして、息をのんだ

「ご、御主人様・・・こ、これって・・・」

震える、蒲公英の声

そんな彼女の言葉に、俺はフツと笑みを浮かべ・・・言ったのだ

「結婚しよう・・・蒲公英」

白い箱

中から見える、美しい“指輪”

その指輪にポタリと何かが落ちるのと同時に・・・彼女は、俺に抱
き着いてきたのだった

「ご主人様・・・いきなり、すぎるよ、こんなの」

「ごめん・・・ビックリさせたくて」

俺の胸の中、大粒の涙を流しながら・・・蒲公英は笑う
その手に、俺が渡した指輪を握り締めながら

「ご主人様、こんなことして・・・私、知らないよ？
後で、皆に凄い怒られちゃうよ？」

「皆が好きだつて言った手前、覚悟はしてるさ」

「私よりも可愛い人、一杯いるよ？」

料理なら流琉ちゃんの方ができるし、お仕事なら朱里ちゃんのほうが凄いのよ？」

「そんなの、関係ないよ」

俺は、そのまんまの蒲公英が好きなんだ」

「・・・私、お漏らし属性なんてないよ？」

「そこは・・・まあ、ノーコメントで」

ポリと、頬を掻き

俺は、クスリと笑いを零す

そんな俺のすぐ目の前・・・ボロボロと涙を流しながら、蒲公英も笑った

「んで、そのさ・・・返事は、どうかな？」

「そんなの、決まってるよ」

「私は、ご主人様・・・ううん、一刀さんの、奥さんになりますっ」

「……………」

「それにしても、まさか蒲公英とはねえ・・・油断していたは、本当に」

「そう言っつて美しい月の下、笑うのは華琳だった
その彼女の隣、苦笑を漏らすのは愛紗」

「私は、何となくそのような気はしていました」

「あら、そうだったの？」

“はい”と、愛紗は酒を飲み干す

そんな彼女の顔を見つめた後、華琳は深くため息を吐き出した

「仕方ない、か

“第一夫人”は、あの子に譲りましょう」

「・・・は？」

華琳の言葉

愛紗は、空になった杯もそのままに声をあげる

そんな彼女の様子に、華琳は笑みを浮かべながら杯を傾けた

「仕方ないから・・・“二番”で我慢してあげるわ
蒲公英に免じてね」

「華琳殿・・・まさか、まだ諦めていないのですか？」

「あら、ならば貴女は諦めきれぬのかしら？」

「うっ・・・それは、その・・・」

“ほら見なさい”と、華琳は再び溜め息を吐き出す
それから見つめた空

美しい月に杯を向け、ニコリと微笑む

「皆が好きだ」といった責任は取ってもらおうわけれど、今だけは祝ってあげましょう」

「そうですね・・・」

見つめた先

胸の奥・・・灯る想い

彼女達は、世界は祝福していた

一人の男と、一人の少女

その、記念すべき刻を・・・

子守唄に、想いをのせて

Fin

「……という夢を見たんですよ、ハイ」

“正座”

古来より日本に伝わっている、伝統的な座り方だ

俺は今まさに、その“正座”の中でも特に美しいとされる“極上正座”をかましている

そんな俺の隣では、慣れない正座に冷や汗をかく蒲公英

そして俺たちの前には、怒れる愛紗さんと華琳さん……さらには蓮華さんに、何故か縄で体を縛られたまま頬を上気させハアハアと息を荒げる思春さん

うん、皆が言いたいことはわかってる

さきほどまでの雰囲気から一転……何故、このような状況になっ

ているのかってことだろ？

まあ、今言ったとおりだ

そんな夢を僕は、昨日の夜に見たわけですよ

そして今、怒れる彼女達にその話をしたところなのだが・・・

「ご主人様・・・その夢の話がまさか、“政務をさぼり蒲公英と乳
繰り合っていたことの言い訳になると思いましたか？”」

「あ、あはは・・・」

で、ですよね〜

内心“なったお、そうなったおww”とか思っちゃいました

テヘペロッ

でも、今はすごく反省してるの
だから、だからね・・・

「愛紗さん、華琳さん・・・いえ、皆さん
その手に持った物騒な物を仕舞ってくれませんか？」

「あら、物騒なんてとんでもない
これはただの躑け用の道具よ」

「何処の世界に、躡けの為に鎌を振る人間が・・・あ、目の前にいましたね」

「いるわねえ」

「「あっはっはっはっは」」

笑い、見あげる空

じいちゃん、母さん

今日も、都是良い天気です

「さて一刀

こういう時は、何て言ったらいいかわかるかしら？」

「当たり前だろ」

ああ、そうさ

そんなの当たり前だ

こういう時は、ひとまず彼女達を落ち着かせるために・・・

「退きません！！媚び諂いません！！！！反省しませんっ！！！！！」

「反省、しろっ！！！！！！！」

景気よく響く音は、今日も都が平和な証
そっ思わなくちゃ、やっていけないよね
・・・クスン

・・・了

第10話 子守唄に、想いをのせて（後書き）

いかがだったでしょうか？

今後の予定ですが、ひとまず連載作品の執筆に力を入れるつもりです

それでは、またお会いしましょう

第11話 本屋さんに行こう！（前書き）

はい、続いてこの作品

見覚えのある方もいるでしょう

そうです・・・“TINAMI”に掲載した連作短編 月の詩の
一作です

その中でも、群を抜いてアホな作品wwww

本作はそこにあつた本作を、加筆・修正しこちら向けに直した作
品です

オチも、多少の変化がありますw

相変わらず、アホですがww

それでは、お楽しみください

第11話 本屋さんに行こう！

「うっ、トイレトイレ 厠トイレ」

今、猛烈に厠を求め走る僕は【北郷一刀】

何処にでもいる、極々普通の“天の御遣い”だ

ただし違つところがあるとすれば・・・男の人に興味があるってことかな

「漏れる漏れる」

僕は今現在、厠を求め街の外れの方を走っていた
そんな時だった

「・・・ん？」

僕が走っているその先の方
備え付けられた椅子に座る、一人の男の人の姿が見えたのだ
その人は眼鏡をかけ、白い道士が着るような服を身に纏っていた

どんな男の人が、一言で言つと・・・

「ウホツ・・・イイ男」

これに尽きる

思わず足を止めてしまう程のイイ男なのだ

僕は男の人を見つめたまま、その場にしばらく立ち尽くしてしまつたやがて・・・

「え・・・？」

その男の人は突然、信じられない行動に出たのだ

彼は自身の纏う衣服を、ゆっくりと脱ぎ始めたのだ

「あ、ああ・・・ああああ・・・」

僕はそのあまりの光景に、その場から身動きがとれなくなってしまった

そんな僕の気持ちもいざ知らず、徐々に徐々に露わになっていくイイガタイ

そして眩いばかりの輝きを放つ、これまたイイ

ゴクリと、唾を呑みこむ僕

そんな僕を見つめ、彼は静かに言葉を紡ぐ

それは、始まりの言葉

「やらないか？」

僕の中で、新しい扉が開く音がした

本屋さんに行こう！

――――

「ふう……」

“パタン”と、音をたて閉じられる一冊の本
それを丁寧に棚に仕舞いこみ、“北郷一刀”は柔らかな笑みを浮か
べる

そして、隣にいた少女……華琳を抱き寄せた

「蜀を滅ぼそう」

「落ち着きなさい、馬鹿」

この一言に、流石に華琳の頬も引き曇っていた

抱き着いてくる一刀の体を引きはがし、彼がさっきまで読んでいた本をとりパラパラとめくる

「たかが本の中の物語でしょ？
冷静になりなさいな」

「華琳、俺は至って冷静だよ
今だってこんな本を書いた蜀の“はわわ幼女とあわわ幼女”をどう懲らしめてやるうか考えてるのさ
なるべく、非人道的な方法でね」

「全然冷静じゃないわね
人の趣味でしょ？

それを私たちがあんまりとやかく言うのは良くないわ」

「趣味だからって、勝手にこんなん書くのは許されないうって!!
ていうかこのままだと俺（本の中の）は公衆厠（発展場）に連れてかれて、イイ男フホッにいいように弄ばれる（アツーーーーー）んだぞ!？」

いくら本の中だったって、限度があるわ!!」

まあ、彼の気持ちはわからないでもない
そもそも、何故このような状況になっているのかを話さなければならぬだろう

まずは、今二人がいる場所

ここは城下に新しく出来た本屋だ

それを知った華琳が、一刀を誘ってここにやって来たのだ
そして、彼は見つけてしまったのだ

“御遣い、ミツカイテクニツク手苦二苦”と書かれた書物を

まるで誘われるかのようにホイホイと手に取ったその本

著者の名は“齒和和・亞和和”

どう見ても蜀のロリ軍師二人です、本当にありがとうございます
などと内心で考えながら、開いた書物

その後のことは、冒頭にあつたとおりである……

「ああ、初っ端から嫌なもん見た……」

「災難だつたわね」

「災難っていうか、もう“災害”だつたよ」

言いながら、彼は周りをキョロキョロと見回した
そして、感心したように息を吐きだした

「しっかし、広いなあ……なんか“ブックオフ”を思い出すよ」

「ブックオフ？」

「俺の世界にあつた古本屋さんだよ」

何か、雰囲気似てるなって」

“読めない本ばっかだけど”と、彼は苦笑する
そんな彼に対し、彼女は呆れたようなため息を吐きだす

「もう少し勉強なさいな
これくらい読めないと、後から苦労するわよ」

「これでも、前よりは読めるし書けるようにもなったんだけどな
まだまだ勉強不足か
“人生、是勉強なり”とはよく言ったもんだよ」

「ふふ、頑張りなさい」

“了解”と、笑う一刀
その笑みにつられ、彼女もまた微笑んだ
その直後のことだった・・・

「ぶはっ・・・!?!?」

「」
「」
「」

悲鳴とも、何ともとれない……しかし、聞いたことがある声が辺りに響き渡ったのは

「なあ、華琳……今のつてさ」

「ええ、そうね……私もそう思うわ」

言うがいなや、二人は同時に駆け出した
向かうのは、声がした方向

微かに匂いたつ“鉄のような臭い”が、2人に自分たちの予想が正しいことを教えていた

――――

「うわぁ……」

辿り着き、思わずこぼれ出した声
それに同意するかのように、隣に立つ華琳は頭をおさえたまま溜め

息を吐きだしていた

「稟……貴女、何をしてるのよ？」

そして、小さくこぼれ出た言葉

その視線の先には、辺りを真っ赤に染め上げた張本人……稟が、安らかな表情で倒れていた

「お、華琳様にお兄さんじゃないですか」

「風……二人も、本を買いに来てたのか？」

「はい、その途中見つけた本を読んでいたらいきなり稟ちゃんの持病が出ちゃいまして」

「どんな危ない本だよ……」

「それは……」

「ああ、ダメです一刀殿

その人はノンケだって平気で喰っちゃまうような男なんですよ……

!？」

「よりもよって、あの本かよ!!!!!!」

頭を抱え、彼はその場に膝をついた

先ほどのダメージが再び襲いかかってきたのだろう

そんな彼の姿に、風は“どんまいですよ”と肩を叩いていた

「とにかく、稟が汚してしまった本は責任をとって買い取りましよう」

「そうですね」

では風は、お城に連絡してくるのですよ

言いながら、その場から歩き出す風

彼女は稟の手から一冊の本を取り上げ、店を後にしようとした
だが、そんな彼女の肩に手を置き一刀は足を止めさせた
それから、物凄く良い笑顔で口を開く

「それは、置いていこうな」

「え〜・・・」

「“え〜”じゃない!

そんな危ないもん出回ってみる!?

“全国のイイ男”に狙われるかもしれないんだぞ!?”

「いえ、でも終盤の展開は胸熱でしたよ?」

特に、最後のお兄さんの台詞なんて鳥肌ものでした」

「え?」

そうなの?

何これ、案外普通の本なのか?」

「“イイ男なら、ノンケだって喰ってみせる!!”という台詞なんですが……」

「やっぱり、そういう本じゃないか!

いや、確かに鳥肌ものだけど!

寒気とか吐き気とかで、鳥肌がやばいけどもさ!」

「いやあ、驚きました

まさか最後の最後で、攻守が逆転するとは……」

「何それ、恐いんだけど!?

最初は“殆ど壁状態のアーマーナイト”なのに、最後の最後で“攻撃も出来る万能なジエネラル”にクラスチェンジしちゃったの!?”
「イイ男を逆に攻めちゃうの!?”」

せる

「新しい本屋さんが出来たって聞いて、ちょっと様子を見に来たの百聞は一見にしかずって、言うでしょ？」

「あら、桃香にしては良い心がけね」

「えへへ」

華琳の言葉に、テレながら笑う桃香

しかし、華琳は見てしまった

彼女が、何かを後ろ手に持ち隠していることに・・・

「とか言いつつ、貴女・・・自分が買いたいものがあっただけじゃない」

「あつ、ちよつ、華琳さんっ！！！！??」

スツと彼女の手から、本を取り上げる華琳

彼女は焦る桃香もよそに、偶然開かれた一ページを見つめ口をひらいた

「よかったのかい、ホイホイついてきちまって俺は・・・御遣いだって構わないで食っちまうような人間なんだぜ？”って、貴女これ・・・」

「ひゃわうっ！！」

華琳さん、返してくださいっ！！」

ピクピクと、コメカミが震える華琳

彼女が手にした本は、まさにあの本だったのだ

それにいち早く反応したのは他でもない・・・一刀だ

「桃香・・・ちよつと、いいかな？」

「かえ、し・・・ご、御主人様？」

ブワツと、一気に流れる冷や汗

普段は見ることもない迫力をもった彼がそこにはいたのだ

脇に抱えられた風の姿が、さらにその恐ろしさに拍車をかけている

「どうして君まで、その本を持っているのかな？」

「あ、あはは・・・それは、その」

笑っている

彼は、笑っている

だがその笑みに桃香は、言い知れぬ恐怖を感じていた

「さて、と

悪い華琳

ちよつと風と桃香に、用事が出来ちゃったから」

「わかつたわ」

ガシつと、桃香の手を掴み歩き出す一刀

有無を言わさぬその迫力に、桃香はガクガクと震えながら連れてかれていく

「さて二人とも・・・今日は、太陽が昇っても眠れないからな？」

「ご、御主人様？」

ま、まだお昼になる前なんだけど・・・太陽さん、まだ落ちてないんだけど」

つまりは、“まる一日、24時間、寝かせないぞ”と言っているのだ
理解したところで、もう遅い

風と桃香はそのことを想像し若干モゾモゾと下半身をうごかし、ゴク
クリと唾を呑み込んだのだった・・・

――十――

それから数日後・・・

「やらないか？」

「なん・・・だと？」

理解できなかった

いきなりのこの状況を・・・彼は、理解することができなかった

普通に散歩に来たはずだった

なのになぜ・・・自分の前には、（ウホッ）イイ男がこれ見よがしに座っているのだろうか？

冷や汗が、一気に流れ出る

終わる・・・！！

第11話 本屋さんに行こう！（後書き）

いかがだったでしょうか？

この作品の続きも、いずれこちら用に直して掲載する予定ですw

それでは、またお会いしましょう

第12話 乙女がしまし!? ぶっちゃけガールズトーク (魏国の場合)

はい、こんばんわ

日付が変わる直前に投稿いたします本作

月の詩 の一作で、本当に酷かった作品です

掲載当初『他の国のもみてみたい』って言われたんで、現在執筆中
ひとまずは、こちらを投稿

カオス注意です

第12話 乙女がしまし!? ぶっちゃけガールズトーク 魏国の場合

「一刀・・・消えてちょうだい」

「はい？」

朝一番

此処は・・・魏の将兵たちが集まる屋敷の中

そんな中、魏王である華琳の一言に北郷一刀は目を丸くしていた

「あ、あれ？」

「やばい、なんか泣きそうだ・・・」

「あら、ごめんなさい

少し言い方が悪かったわね」

そんな彼の様子に、華琳は申し訳なさそうに言った

それから、十人が十人見惚れるほどに美しい笑顔を浮かべこう言ったのだ

「凄く邪魔だから、今すぐ此処から消えてちょうだい」

「あれ？」

これ、俺泣いてもいいところだよな？」

そのような言葉を、あんな良い笑顔で言われたら泣くしかない
そもそも、さつきよりも酷くなっている
この言葉に、華琳は悪戯に成功した時の子供のような無邪気な笑み
を浮かべていた

「冗談よ

実は一刀以外の皆に、少し話があったの
だから、一刀は先に仕事に取り掛かっていてちょうだい」

「そうなら、そう言ってくれよ・・・心臓に悪い」

「ふふ、今の貴方の顔・・・面白かったわ」

「うっ・・・ていうかさ、俺以外の皆に話っていったい何の話なん
だ？」

しかも、俺が今日ここに来たのって華琳に呼ばれたからなんだけど
？」

「ごめんなさいね、すっかり忘れていたの
これから、魏国の皆で恒例の・・・女の子だけの秘密の会話、を始
めるの」

「あゝ、だから男の俺は帰れと

はいはい、りよーかい
それじゃ、俺は先に仕事はじめてるよ」

そう言つて、彼は玉座を後にする

その姿を見送つた後、華琳は玉座に残つた者達の顔を見回すと深く息を吐きだした

「さて、皆に残つてもらつたのは“あること”を聞きかつたよ」

「あること”ですか？」

華琳の言葉に、春蘭は首を傾げ呟く
これに、華琳は静かに頷いた

「その前にまずは桂花
そこに立てかけてある紙があるでしょ？
あれを皆に見えるように広げてちょうだい」

「あのこれ見よがしに“広げてくださいという風に置かれている紙”
ですね」

“わかりました”と、その紙を手にとる桂花
彼女はそれから、その紙を持ち皆の中心に立つ
それから、勢いよく紙を広げた

瞬間、その紙に書かれている文字に……皆が驚愕した

“乙女かまし！？ ぶっちゃけガールズトーク”

「そういつわけで、はい皆拍手拍手~~~~~!!」

ただ一人……普段とは全く変わったテンションな霸王様の声だけが玉座の間に響いていた

乙女かしまし!?!? ぶっちゃけガールズトーク 〔魏国の場合〕

—————

「ごめんなさいね

ちよつと、“中の人のテンション”が出てきちゃったみたい」

「は、はぁ・・・」

“ふう”と息を吐き、謝る華琳

そんな彼女の様子に、若干引きつった笑みで秋蘭は頷いていた

「あの、華琳様

この“ガールズトーク”というのは、一体何なんですか?」

「これは、“女の子同士で行われる会話”のことよ」

「そうなんですか・・・でも、いったい何を話すのですか?」

流琉の質問

それに対し、彼女はフツと表情を緩ませる

「折角よんだ一刀に、わざわざ消えてもらったのよ？」

一刀について、に決まってるじゃない

でも、まだ朝も早いし・・・なるべく、健全な話から始めましょう」

この言葉に、皆の反応は様々だ

頬を微かに赤く染める者から、面白そうだと笑みを浮かべる者

しかし皆が一樣に、この話題に興味を示していることは確かだった

「それじゃ、まずは私から話すわね」

そんな中、満足げに頷きながら華琳が話始める

皆はその言葉に、耳を一斉に傾けていた

「実は私、最近まったく一刀と閨を共にしていないのだけれど・・・
皆はどうかしら？」

私たち魏の者に飽きて、蜀や呉にばかり行ってるのあのバカは！！
？」

「あの、もしかして華琳様？

実は、それが聞きたかったk・・・」

「春蘭・・・その続きを言ったらこれから毎日、貴女のご飯は全て
“ 矢の刺さったゆで卵 ” にするわよ？」

「も、申し訳ありませんでした・・・」

“ うぶっ ” と、口元をおさえながら言う春蘭

彼女のトラウマを上手いことついた、絶妙な策だった

それはさておき、皆には華琳が普段よりも冷静さを欠いているように
に見えた

まあ・・・それと同時に、その原因もうつすらとわかってきていた
のだが

「さて、誰でもいいわ

早く、私の質問に答えてちょうだい」

その言葉に、一同は一斉に困ったように苦笑する

内容が内容だけに、流石に躊躇っているのだ

そんな中、恐る恐る手を上げた人物がいた

「あの・・・私も、最近は隊長と閨を共にしていません」

北郷隊一番の忠犬こと、凧だった
彼女のその一言に、両隣にいた真桜と沙和も困ったような表情のま
ま頷く

「沙和も、最近は無沙汰なの」

「うちも、記憶にないなあ・・・」

「あれ？」

「沙和さんたちもなんですか？」

これに反応したのは流琉だった

彼女は三人の言葉に驚き、少し恥ずかしそうに手をあげた

「実は・・・その、私も最近兄様と閨を共にしていません」

「そういえば、ボクもだよ」

流琉に続き、季衣も手をあげる

そんな中、首を傾げるのは風だった

「おや？」

最近風もご無沙汰でしたので、他の人のところかと思っていたので

すが・・・」

「風もですか？」

私も、共に閨には・・・」

「嘘やる？」

ウチも最近、一緒やなかったで？」

「私もないが・・・姉者はどうだ？」

「ない・・・少なくとも、ここ最近はな」

玉座に、重苦しい沈黙が流れる

“ありえない”と、心の中皆が思っているのだろう
そんな中、この沈黙を破ったのは華琳だった

「おかしい、わね

あの“自立型移動式閨”とも呼ばれる一刀が誰とも閨を共にしていないなんて」

「そうですね

あの“恥部の帯剣”とまで恐れられる一刀殿が、誰とも夜を過ごしていない・・・ぶはっ！」

「自分で言っただけで自滅してる……」

彼女が想像した“恥部の帯剣”というものが何なのかは謎のままだが、皆の考えは一つだった
もしま、彼の身に何かあったのでは……？
そのような心配をする者もいるのだ

「とにかく、調べてみる必要があるそうね
もしかしたらやっぱり、他の国の者達のもとへ通っているのかも
れないし

桂花は、どう思うかしら？」

「そうですね

念の為、一刀の周りを探らせてみましょう」

「そう、ね……」

そこで、ピタリと華琳の言葉が止まる
華琳だけではない

“一人を除いて全員”が、言葉を失っていた
その様子に気づき、そのただ一人である少女……桂花は、声をあげる

「華琳様？」

「どうかしたのですか？」

「あ、貴女・・・今、なんて言ったのかしら？」

「え？」

「ですから、念の為一刀の周りを探らせ・・・」

「そこで、彼女はハツとなる

慌てて自身の口をおさえるがもう遅い

皆の視線は、一気に厳しいものとなり彼女に注がれているのだから

「貴女今、一刀の名前を呼んでいたわよね？」

普段は“全身精液男”とか“孕ませ男”とか“チ　コの御遣い”とか呼ぶのに「

「そ、そうでしたか？」

「というか、一つ私のじゃない台詞が混ざっているような・・・」

「いいえ、そうよ

皆はどうかしら？」

「桂花が一刀の名を呼ぶところを聞いたことがあるかしら？」

「この言葉に、皆は一斉に首を横にふる

その光景に、桂花はというと一人顔を真っ赤にしたまま俯いていた

「まさかとは思うけど・・・ねえ？
ここ何日かずっと一刀を独占していたのは・・・」

「え！？

そ、そんなわけないじゃないですか！！

誰があんな男と・・・」

言いながら、首をブンブンとふる桂花

その拍子にふと、彼女の上着から何かが滑り落ちた
それに気づき、拾ったのは春蘭だ

「桂花、何か落としたぞ

ていうかコレ、何処かで見たことが・・・」

拾い上げたソレを見つめ、彼女は固まってしまった

何事かと、皆がそれを見つめ・・・同じように固まっていた

皆がそれに、見覚えがあったのだ

それは・・・常日頃から御遣いの“宝刀”を守る最後の砦にして“
鞘”

まあ、要するに・・・

「おまつ……これ、北郷の下着じゃないか！！！！？」

「キヤアアアアアアアアア！！！！？」

「ちょっと、返しなさいよおおおおお！！！！！」

「いや、返すってコレ北郷のだろ！！！！？」

「いいから返しなさいよ！！！！！」

顔を真っ赤にし、涙目のまま春蘭からそれを奪い取る桂花

彼女はそれを、ギュッと大事そうに抱き締めていた

この様子に、華琳は頬をヒクヒクとさせながらもあくまで冷静に対応しようとしている

「ねえ桂花、怒らないから教えてちょうだい

どうして貴方が、そんな素晴らし……一刀の下着を大事そうに持っているのかしら？」

「華琳様、絶を振り上げながら言っても説得力がないですよ」

訂正……まったく冷静ではなかった

「か、華琳様、落ち着いてください

その、これにはわけがあつてですね・・・ヒィッ!？」

「そのワケを教えてって言ってるのよ
ドゥーユーアンドンダスタン？」

「お、オーケー・・・」

“サクン”と小気味よい音をたて、桂花のすぐ真横に突き刺さる絶
の刃

さらに霸王様オーラを出されては、もう頷くことしかできないだろう

――――

「これは、その・・・昨日の闘の後に、こっそり持ってきたもので
す」

「へえ・・・昨日の闘の時に、ねえ

因みに、ここ最近一刀と闘を過ごしていたのは？」

「わ、私です・・・」

玉座の間

現在桂花を中心に座らせ、その周りを皆が囲んでいるという状況だ
因みに、一刀の下着は未だに桂花が持っている

「驚いたわ・・・まさか、貴女が一刀を独り占めしていたなんてね
しかも、彼の下着を盗ってしまう程に彼のことに夢中だったのね」

言いながら、華琳は桂花が抱きしめる下着を羨ましそうに見つめて
いた

その視線に気付くことなく、皆はそれぞれ桂花の行動に驚いていた

「まさか桂花様が、その下着を持っていたなんて・・・驚きました」

「凧・・・？」

そんな中、一人歩み出たのは凧だった

彼女は桂花のもとに歩み寄ると、彼女の抱きしめる下着を見つめ息
を吐きだす

「それは、隊長が最も多く穿くという・・・隊長の一番のお気に入り
の下着なのです」

「え？」

「そ、そうなの？」

この言葉に、桂花はパアツと表情を明るくさせる
だがその後すぐに、眉を顰め凧を見つめた

「ていうか、なんで貴女がそのことを知っているの？」

「そんなの、決まってるじゃないですか・・・」

桂花の言葉、凧はフツと笑みを浮かべ自身の懐に手を入れる
そして取り出したものに、再び皆が言葉を失った

「私が、“隊長の下着コレクター”だからです！！！！」

彼女が“清々しい程のドヤ顔”と共に取り出したのは下着だった
勿論、一刀のものである

“とつとこ八 太郎”というロゴの入ったソレを、凧は愛しげに抱
きしめる

「因みに、隊長の部屋から持ってきた下着の中で一番のお気に入り
がコレです

普段はカッコいい隊長が、こんな可愛い下着を穿いているなんて
ああ、想像するだけで“滾ります”」

「ちょっと、誰か警邏隊呼んできなさい」

「華琳様、そこで人の下着に頼ずりをしてるのがそうです」

“そうだった”と、華琳は頭を抱える

まさかここにきて、このような事実が明かされようとは・・・誰が想像できただろうか？

「まさか、あの凧が・・・ねえ」

「凧・・・愚か者め」

ふいに、華琳の隣に立っていた春蘭が歩き出す

その歩みの先、凧は未だ幸せそうに下着に頼ずりをしていた

「凧!!」

貴様、それでも魏国の兵士か!!」

「しゅ、春蘭様!？」

この言葉に、凧はハッと我に返る

そのまま、慌てて下着を懐へと隠す凧

そんな彼女の姿に、春蘭はその歩みを早めた

「そのようなモノを持ち、満足するなど言語道断！！
これを見よ！！！！！！」

「なっ！？

そ、それは・・・！！！？」

春蘭が、勢いよく取り出したソレ

風をはじめ、多くの者が驚愕に表情を歪めた

「隊長の寝巻・・・だと？」

そう、風の言うとおり

それはまさに、一刀愛用の寝巻だった

黄色を基調とした、“とある電気を発するネズミ”をモチーフとしたフード付の寝巻である

それを、これまた“素晴らしいほどのドヤ顔”で春蘭は掲げてみせたのだ

「はっはっは！」

わざわざ自分で似せて作ったものと、すり替えておいたのだ!!
あの北郷がこのような可愛らしい寝巻で眠っていようとは、想像するだけで“滾る”!!」

「誰か・・・お願いだから、今すぐ警邏隊を呼んできてちょうだい」

「華琳様、あそこで人の寝巻を物欲しげに見つめているのがそうです」

“そうだった”と、華琳は大きく頭を抱える

まさかここにきて、さらなる事実が明かされようとは誰が想像できただろうか

春蘭までもが、このような秘密を持っていたとは・・・

「春蘭まで・・・ああ、頭が痛くなってきたわ」

「大丈夫ですか、華琳様？」

「流琉・・・ええ、何とかね

それよりも、あの“変態共”を止めないと」

「それなら、私に任せてください」

言って、自身の胸を叩く流琉

彼女はそれから、懐から何かを取り出しニツと不敵な笑みを浮かべる

「この“兄様の使ったお箸”さえあれば、私は無敵ですから！」

“輝かしいほどのドヤ顔”で、箸を構える流琉
そんな彼女を見て、華琳は“あ、ダメだこれ”と乾いた笑みを浮かべていた

「な・・・隊長の使用済みのお箸だと！！!?」

「なんとというモノを・・・」

「この“プ キュア”の可愛いお箸を、カッコいい兄様が使っているなんて

想像するだけで、“滾ってきます”」

「誰か、警邏隊を・・・」

「華琳様、あそこで人の箸を無理やり舐めようとしてるのがそうです」

“そうだった”と、華琳はその場に膝をついた
それから、何かを思い出したようにハツと顔をあげる

「そうよ・・・真桜と沙和がいたじゃない」

「真桜は先ほど、“これは夢や”と言って気絶してしまいました
沙和は顔を真っ青にしながらも、そのまま真桜のことを背負い玉座
を出て行ってしまいなしたが・・・」

「シット・・・」

“どうすればいいのか？”

痛む頭を抱え、小さく考え込む華琳

それからすぐに、諦めたかのように微笑み立ち上がった

「時間が解決してくれるわね」

「放っておくんですか・・・」

「なら、秋蘭」

「アレを止められそう？」

「さて、仕事を始めましょうか」

“無理”と、顔が言っている

そんな彼女の言葉に、華琳は静かに頷いた

「でも……」

ふと、華琳は足を止める

それから見つめたのは、未だに騒ぎ続ける少女達
彼女達の持つ“宝具”だった

「いつか、私も手に入れてみせるわ……」

決意を胸に、歩き出す華琳

その決意が後に“ある悲劇”を巻き起こすことになったのだが
またそれは、別のお話……

因みに、この時の彼女はまだ知らない

桂花だけではない

一刀を独占していた人物は、まだほかにもいたのだということに

まだ……気付けていないのだった

・
・
呉・蜀
に続く!!

第12話 乙女かまし！? ぶっちやけガールズトーク 魏国の場合(後

さて、まずは一言

すみませんっしたああああああああ

近いうち、呉と蜀の場合を投稿します

それでは、またお会いしましょうw

第13話 ウチの周りが、変態だらけになっとなるんやけど・・・魏国の場合、

さて、今回は“魏国の場合”の続編です

ある一人の少女の、苦悩の物語

それでは、どうぞw

第13話 ウチの周りが、変態だらけになつとるんやけど・・・魏国の場合、

「おゝい、真桜」

「ん？」

それは、ある晴れた昼下がりのこと

魏国が誇る絡繰り技師でもある真桜が、自身の工房でいつものように絡繰りをいじっていた時のことだった

聞き覚えのある声と同時に、工房の扉が慌ただしく開かれたのだ
彼女はその声に一度絡繰りから手を離し、開かれた扉へと視線をうつす

「なんや、凧かいな

いったい何の用なん？」

そこにいたのは、警邏隊の同僚でもある楽進こと凧だった

彼女はここまで走ってきたのか、少し乱れた息を整えながら真桜の傍まで歩み寄る

「実は、少し聞きたいことがあって・・・」

「なんや？」

「実は先日拝借してきた“隊長の脱ぎたてホカホカな下着”が部屋から無くなっていたんだが・・・何か知らないか？」

「知らんなあ・・・つーか何してんねん！！！！？？」

ウチの周りが、変態だらけになっとなるんやけど・・・
合、その後のお話し　　魏国の場

――十――

「折角隊長が部屋にいない間にコッソリ盗ってきたのに！
このまま見つからなかったら、また盗り直しじゃないか！」

「知らんがな！」

「つか、ウチら警邏隊やる!?」

「このままやとウチ、凧を捕まえなあかんようになんで!?」

“ダンツ！”と机を叩き、とんでもない発言をする凧

そんな彼女の言葉に、真桜はドン引きしていた
普通に犯罪である

「真桜と私は親友だろ!?」

手伝ってくれてもいいじゃないか!!--」

「共犯者になれってかい!？」

嫌や、絶対嫌や!!--」

そもそも、警邏隊の副隊長らが揃って犯罪を犯したらアカンやる!?
いや、一人でもアカンけど!!--」

「安心しろ、これが初めてじゃない」

「常習犯かい!？」

「ますます、見逃せへんやん!？」

「いや、プライベートだから
プライベートだから、な？」

「いや、関係あらへんし!?
プライベート有り無しに関係なく、普通に犯罪やからな!?
ていうか凧、お前それ覚えてたての天界語使いたいだけやる!?」

「えへへ」

“アカン、ツッコミきれへん”

彼女は内心で呆れながら、深い溜息を吐きだした

目の前には、頼んでもないのに自身の犯した犯罪について熱弁する凧
因みに、本人には“犯罪を犯している”という自覚はない

そんな親友の変わり果てた姿に、真桜は思わず涙が零れそうになった

(あ、アカン・・・泣いたらアカンで

ここでウチが何とかせな、いつか近いうちに凧を捕まえないけんくなる)

それだけは、何とかして回避しなくてはならない

その為にはまず、目の前で間違った道を爆走しまくってる親友を止めなくては・・・!

「あんなあ、凧・・・って、おらんし!!!!!!」

“ガタン”と大きく音をたて、立ち上がった彼女の視線の先
そこには既に、凧の姿はなかった

代わりに、机の上に一枚の紙が置かれていた
彼女はその紙を手に取り、無言で目を通していく

ちよつと、隊長の部屋で新しい下着探してくる

今度こそ、彼女は静かに泣いた・・・

――――
――――

「疲れた・・・」

“げっそり”という擬音が聞こえてきそうなほどに、真桜は疲れ切っていた

原因は、言わずもがな先ほどの出来事である

思い出すのは、幼いころから一緒にいたはずの親友の変わり果てた姿
“恋をすれば、人が変わる”とはよく言うし、自分でもそれはよく
わかっている

しかし、いくらなんでも“アレ”はない

「あれじゃ、ただの変態やんか・・・はあ」

“どうしたものか”と、彼女は頭を悩ませていた

「真桜さー！ーん！」

「んお？」

そんな時、ふと彼女の名を呼ぶ声が聞こえてきたのだ
彼女は考えるのを一度止め、声がした方へと視線をうつす

「なんや、流琉やんか・・・どないしたん？」

「あの、実は少し聞きたいことがあって・・・」

そう言って、乱れた息を整えるのは典章こと流琉だった

「大丈夫です

季衣と二人で、ちゃんと仲良く分けてますから」

「いや、そういう問題ちゃうやろ!？」

「って、さり気なく共犯者の名前出とる!?!？」

「アカンって、普通に犯罪やん!」

「でも、プライベートですし・・・ね?」

「関係あらへん!！」

「プライベートかどうかは一切関係あらへん!！」

「っていうか、それ覚えたての天界語使いたいだけやろ!？」

「えへへ」

ツッコミきれない

「そう思い、彼女は本日何度目になるかわからない溜め息をつく

「それと同時に思い浮かべるのは、先ほどの親友のこと

「似ている・・・いや、同じだ

「要するに彼女もまた、親友と負けず劣らずの“強者(変態)”だと

(アカン・・・このままやと、本当にマズイで)

「彼女もまた、ほっておけば自身の手で捕まえなくてはいけなくなる

「このまま、間違った道を歩ませるわけにはいかない

「ここで、何とかしなければ・・・」

(ウチが、しっかりせな・・・!)

「あんなあ、流琉・・・」

そう覚悟を決め、キツと見つめた先・・・

「ちょっと、真剣に聞いてほしいんやけd・・・って、おらんしっ
!?!?」

少女・・・流琉の姿はない

彼女は出かかった言葉もそこに、その場に膝をつき頭を抱え込むことしかできなかった

—————

「疲れた・・・」

ヨロヨロと、城内の廊下を歩く真桜

彼女は、自身でも驚くほどに疲れ果てていた

原因は言わずもがな

「ああ、なんや・・・ここまでくると、ウチの方がおかしいんぢやうかと思つてまう」

勿論、そんなハズはないのだが

しかし、現在出くわした二人の姿が頭から離れない
いつそ清々しいほどの笑顔で、己の犯罪を暴露した二人の姿が

「いや、おかしいんは向こうや！

しつかりせな・・・ウチがしつかりせな、どうするんや！」

“パン”と自身の頬を叩き、彼女は何とか気分を変える
そして考える

“何か良い方法はないものか？”と・・・

「お、真桜じゃないか！

お~~~~~い!~!~!」

「ん?」

そんな彼女に向い、かけられる声

その聞き覚えのある声に、彼女は一度考えるのを止め視線をつつした

「春蘭様？」

「いやあ、ちょうどいいところで会ったな」

そこにいたのは、ご存じ“魏武の大剣”こと春蘭だった
彼女は挨拶もそこそこに、真桜の傍まで駆け寄ってくる

「実は、少々尋ねたいことがあるのだが・・・」

「尋ねたいこと、ですか？」

「いったい何を・・・」

言って、彼女はハツとなる

感じたからだ・・・その言葉から、猛烈な違和感を
まるでついさっき同じ言葉を聞いたかのような・・・そんな錯覚を

（いやいやいや、大丈夫やって

あの春蘭様やで？

春蘭様に限ってそんなこと・・・）

「私の一刀君人形種馬Verが部屋から無くなっていったのだが、何か知らないか!？」

「まあ、そんな気はしとつたけどなー！ー！！（ヤケクソ）」

頭を抱え、彼女は叫んだ

それはもう盛大に

そんな彼女の姿を見て春蘭は若干引いていたが、残念ながら春蘭にそんな資格はないと思う

ともあれ、このままでは話が進まないと思ったのだろう

春蘭は腕を組み、話を続けた

「私が長い期間をかけた作った最高傑作だったのだが、今朝起きていつものように愛でようとしたら無くなっていったのだ

昨日までは確かに、あったのだぞ？

ていうか、一緒に寝ていたはずだしな

わざわざ“アイツの部屋から盗ってきた寝巻”も着せて」

「どっからツッコんだらええんかわからへんけど・・・犯人に心当たりとかはないんですか？」

「ううむ・・・それがわからないから、こうして城内を探し回っているのだ

ついでに、北郷の部屋から“新しい寝巻”を盗ってきてな」

「ああ、今着てるのってどっかで見たことある思ったら隊長のですか・・・って、ちょい待って!!!？」

何、さり気なくまた盗ってるんですか!？」

そして、なんで着て歩いちゃっとなるんですか!!?」

「何を驚く

いつものことだろう?」

「そんな、“ドヤ顔”しながら言うことちやいますよ!!? 要するに、“常習犯”やん!!?」

「仕方ないだろ・・・ホラ、アレだ
そう、プライベートだしな」

「せやから、プライベート云々の話ちやいますから!!
なんで皆して“プライベートなら大丈夫”みたいに思うとなるん!!
?」

彼女の言うとおりである

まあ、春蘭はというと“違うのか?”と驚いているようだったが
そんな彼女の様子に、真桜はまた頭を抱えるのだ

このままでは、本当にマズイ・・・と

(アカン・・・アカンでこれは

何でこんなことになっとなるんか理解できへんけど、このままやとマ
ズイことは確かや

っていうか、なんで隊長気づかへんの?

盗られまくっとなるやん

下着から寝巻まで盗られまくっとなるやん)

どうする・・・？

そう真桜が悩むこと数分間

とにかく、まずは“目の前の変態を止めなければ”という結論に至った

だがしかし・・・

「あのですね、春蘭様・・・って、おらんよなやっぱり！……！！」

今回もまた、空振りに終わるのだが

ドンマイ、真桜・・・

—————
+—————

「もうアカン・・・もう、ウチには解決できへん！」

そう思い、彼女が向かった場所
そこは、彼女達の主
霸王、曹孟徳の部屋の前

「大将なら、きっと何とかしてくれるやろ」

そう呟き、彼女は眼前の扉を軽く叩く
所謂ノックというやつだ

「誰かしら？」

「真桜です

ちよい、お話があつてですね・・・」

「いいわ、入りなさい」

その言葉に、彼女は安堵の溜め息と共に扉を開く
“これで、大丈夫”
そう思いながら、開いた扉
瞬間、彼女は言葉を失ってしまった

「あら？」

どうかしたの？」

その視線の先……彼女の主である、華琳が椅子に座り仕事をして
いる

それだけなら、まだいい

「あの、それは……？」

震える声で、真桜は尋ねた

その言葉に、華琳は満足げに頷く

「これ？」

ふふふ、“拾ったのよ”

そう言っつて、彼女が手に取ったものに彼女は見覚えがあった

「それ、もしかして隊長の下着じゃ……？」

「正解よ」

言っつて、彼女はそれを懐にしまう

だが、それだけじゃない
よく見れば部屋の中に、一刀とソックリな人形が立っているのだ
そしてその首の周りには、これまた見覚えのある“箆”がかけられている

（あ、あれ？

もしかして、皆のモノを盗った犯人って・・・）

「あ、あの大將？

もしかして・・・」

「チツ、バレたみたいね

ごめんなさいね、真桜・・・眠って頂戴」

「っいや、ちよい待って!？」

そんなもん突っ込まれたら、眠るどころじゃ・・・」

「大丈夫よ

すぐに、良くなるわ・・・フフフ」

アッ――――

そこから先の記憶は、彼女にはなかった
気付いたら、隣には裸の一刀が眠っていたのだ
自身も裸だったことから、昨夜は恐らく・・・などと、頬を赤く染
めたくらいだ

だから、彼女は“何も思い出せない”
だが、それが幸せなのかもしれない

世の中には、知らない方がいいことだってあるのだから・・・

「ところで真桜

最近俺の下着とかが異常に減ってる気がするんだけどさ

何か知らないか？」

「知らんなあ・・・」

・・・終われ

第13話 ウチの周りが、変態だらけになっとなるんやけど・・・魏国の場合、

いかがだったでしょうか？

はい、とても酷い作品でしたねW W

それでは、またお会いしましょう

第14話 乙女かまし！? ぶっちゃけガールズトーク 〱 呉国の場合〱 (前)

さて、お久しぶりな本作

閲覧注意なくらい、ぶっ壊れてますww

それでは、お楽しみください

第14話 乙女かしまし!? ぶっちゃけガールズトーク 〱 呉国の場合〱

「北郷・・・消えてくれないか？」

「はい？」

朝一番

此処は・・・呉の将兵たちが集まる屋敷の中

そんな中、この場を仕切る一人の女性

冥琳の放った一言に、北郷一刀は目を丸くしていた

「あ、あれ？」

「やばい、なんか泣きそうだ・・・」

「ああ、すまない

少々、言い方が悪かったようだな」

そんな彼の様子に、冥琳は申し訳なさそうに言った

それから、十人が十人見惚れるほどに美しい笑顔を浮かべこう言ったのだ

「邪魔だから、消えろ」

「あれ？」

これ、俺泣いてもいいところだよな？

ていうか、なんかデジャブ……」

そのような言葉を、あんな良い笑顔で言われたら泣くしかない
そもそも、さつきよりも酷くなっている
この言葉に、冥琳は悪戯に成功した時の子供のような無邪気な笑み
を浮かべていた

「冗談だ

実は北郷以外の皆に、大事な話があったのだ
だから、北郷は先に仕事に取り掛かっている」

「それなら、そう言ってくれよ……心臓に悪い」

「ふふ、今の北郷の顔……可愛かったぞ？」

「うっ……ていうかさ、俺以外の皆と大事な話っていったい何の
話なんだ？」

ていうか、俺が今日ここに来たのって冥琳に呼ばれたからなんだけ
ど……」

「すまないな、すっかり忘れていたのだ

これから、呉国の皆で恒例の“女だけの秘密の会話”と洒落込もう
というわけだ」

「あゝ、だから男の俺は帰れと

はいはい、りょーかい
それじゃ、俺は先に仕事はじめてるよ」

そう言つて、彼は玉座を後にする

小さく、“前にもこんなことなかったっけ？”と呟きながら
その姿を見送つた後、冥琳は玉座に残つた者達の顔を見回すと深く
息を吐きだした

「さて、皆に残つてもらつたのには理由がある」

「理由？」

何か今一刀に向かつて言つてた“女だけの秘密の会話”ってやつ？」

371

冥琳の言葉に、雪蓮は首を傾げ呟く
これに、冥琳は静かに頷いた

「その前にまずは穩

そこに立てかけてある紙があるだろう？」

あれを皆に見えるように広げてくれないか」

「あゝ、あのこれ見よがしに“広げてくださいという風に置かれて
いる紙”ですね〜〜〜」

“わかりましたあ”と、その紙を手にとる穩

彼女はそれから、その紙を持ち皆の中心に立つ
それから、勢いよく紙を広げた

瞬間、その紙に書かれている文字に・・・皆が驚愕したのだ

“乙女かまし！？ ぶっちゃけガールズトーク”

「はい、そんなわけで！！

ハイ皆、拍手して拍手~~~~~！！」

ただ一人・・・普段とは全く変わったテンションな冥琳の声だけが
玉座の間に響いていた

乙女かしまし!?! ぶっちやけガールズトーク 〱 異国の場合

—————

「申し訳ありません

少々、” 中の人テンションが出てきてしまったようです”」

「え、ええ・・・別に、気にしてないわ」

“嘘だ!!!!”と内心で、自身にツツコミながら

蓮華は玉座に座りながら、苦笑いを浮かべ呟いた

そんな彼女の傍で、雪蓮が引きつった笑みを浮かべたまま口をひらく

「あの、冥琳

この“ガールズトーク”っていうの、いったい何なの?”」

「ああ・・・これは、“女の子同士で行われる会話”のことだ」

「へえ、そうなんですかあ

けど、いったい何を話すんですかあ？」

穩の質問

それに対し、冥琳はフツと表情を緩ませる

「無論、北郷のことについてだ

あ奴のことならば、会話も弾むだろう？」

しかしまだ朝も早いしな・・・なるべく、健全な話題から始めよう」

この言葉に、皆の反応は様々だった

頬を微かに赤く染める者から、面白そうだと笑みを浮かべる者

しかし皆が一樣に、この話題に興味を示していることは確かだった

「それでは、まずは私から話そう」

そんな中、満足げに頷きながら冥琳が話始める

皆はその言葉に、耳を一齐に傾けていた

そんな彼女のことなど、知ってか知らずか
冥琳のテンションは、さらに上がっていく

「まあ、こつちから聞いておいてアレだが・・・もう皆の答えは知
っている

明命っ！」

「はい！」

と、そんな彼女の声と呼ばれ、前に出たのは明命だった

彼女はその手に持った竹簡を広げると、何だか気まずそうな表情を
浮かべながら声をあげる

「まず・・・蓮華様

蓮華様はここ一か月間、まったく一刀様と閨を共にしていません」

「ぶっ!？」

吹いた

あの蓮華が、それはもう、盛大に吹いた
皆が皆、その様子に驚くが、それでも尚・・・明命は気まずそうな
表情を浮かべながら、話を続けていく

「最近ではよほど寂しいのか、夜な夜な真桜さんに作ってもらった
“絡繰り一刀君”を抱き締め眠っているようです」

「明命iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?!」

そして、叫ぶ蓮華

その手は、しっかりと南海霸王を握り締めていた
叩き斬る気、満々である

というか、本人しか知らないはずのこんなプライベートな話を、こ
のような公の場でカミングアウトされたのだ
怒るな、という方が無理な話である

「明命、そこに直りなさいっ!?!」

「ひiiiiiiiiii!?!」

「ごめんなさいごめんなさいっ!?!?!」

「蓮華様、落ち着いてください!!」

大丈夫です、私なんて“絡繰り一刀君”を縛ったりして遊んでます
からっ!?!?!

いえ、個人的には縛られる方が好きなのですが!?!?!」

「思春、どいてっ!

ソイツ、殺せないっ!?!?!」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?!」

蓮華様、ご乱心

そんな彼女を、がっしりとホールドするのは思春である
さり気なく、とんでもないことを口走っていた気がするが・・・

「落ち着いてください、蓮華様

このようなこと、まだまだ序の口ですよ？」

「これで、序の口・・・だと？」

啞然、愕然

よもやこれが序の口だとは、思いもしなかったのだろう

蓮華は、言葉を失ってしまう

それを“好機”とも思ったのか、冥琳は明命へと目で合図を送った

「つ・・・次に、祭様っ！！」

「なんじゃとっ！！？」

と、ここで次のターゲットである祭は、声をあげる

それから素早く弓を構え・・・それを、雪蓮が全力で叩き落とした

「さ、策どのっ！？」

驚く祭もよそに、雪蓮は全力で目を逸らした
その視線の先・・・冥琳が、不敵な笑みを浮かべている

「続ける、明命」

「は、はいっ!!」

祭様も同じく、ここ一月はお一人の寂しい夜を過ごしているようにですっ!!」

「おい、コラっ!!」

“寂しい”とか言っなっ!!」

「さらに、“絡繰り一刀君”に向って裸エプロンの格好で、“どうじゃ？そそるじゃろう？”などと、閨に呼ばれた時の為のシュミレーションも・・・」

「明命ii!!」

「~~~~~ごめんなさああああiiiiiiii!!??」

「おちおち落ち着いてください、祭様っ!!」

わ、私もよくやりますからっ!!」

“絡繰り一刀君”に向って、よく胡麻団子を食べさせてもらう振りをしたり、膝枕してもらったりしてますから!!」

祭さん、爆発

そんな祭を、必死に押さえるのは亞莎である

彼女は泣きそうになりながら、必死に祭を押さえ込んでいたのだ
なにやら、妙なことを口走ってはいたが・・・

「ええい、H A N A S E E! !」

「祭様つ、本当に落ち着いてくださいいいいい! ! ! ! !」

さて、そんな苦労も空しく、彼女の怒りは収まることを知らない
しかし、そこは彼女との付き合いの長い冥琳である

一瞬“フツ”と笑みを浮かべたかと思うと、懐から何やら取り出すと
祭の前に近づけ・・・啜う

「黙らないと、“禁酒令”を発しますよ?」

「黙ります」

――黙った

祭は、一瞬で黙った

それはもう、周りが引くくらい・・・一瞬で

「黙ります」

ついでに、雪蓮も黙っていた

「す、すごいです！
流石は冥琳様っ！」

「私たちでは出来ないことを、平然とやっつてのける！
そこに痺れる、憧れる~~~~~！！！」

その光景を見て、明命と亞莎のテンションが、何故か滅茶苦茶上が
っていた

そんな彼女たちの言葉に、冥琳は満足そうに微笑む

「さて・・・明命、続きをつっ！！！」

「はい！！！」

次は・・・穏様っ！！！」

「私ですか~~~~~！！？」

“そんなぁ”と、声をあげるのは陸遜こと穩である

その反面、陰で選ばれなかった何人かが、安堵の息を漏らしていた

「私、“あの人達”みたいな変なことなんてしてませんよ」

「「おいコラ、てめえ」「」

蓮華と祭の、鬼のような視線もよそに、穩は“自分は何もしていません”と首をブンブンと横に振る

が、そんな彼女に対し

明命は、申し訳なさそうな、そんな表情を浮かべたまま言葉を紡いでいく

「一刀様の部屋で本を片手に逆立ちしながら・・・」

「ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その、刹那

明命の口をおさえながら、穩はマジ泣きしながら全力で謝ったのだ
彼女の様子を見る限り、きっと何かやらかしてしまったのだろう
しかし、気になる所で止められた為、皆はその眉を顰め唸っていた

「なんでもしまず、なんでもしまずがらあ・・・どうか、そのことだけはあ」

「め、冥琳様あ」

「ふむ・・・」

困った明命が見つめた先

冥琳は顎に手をあて、しばし考えた後、何かを思いついたのかニヤリと、不敵な笑みを浮かべ言った

「一月の間、本を読むことを禁ずるか・・・それとも、今の話をばらしてしまうか
どちらがいい？」

「本を我慢しますう〜〜！！」

穩が、迷わず言った

これに、周りはますます戸惑ってしまふ

あの穩が、本を我慢する方をとったのだから

まあ、当然と言えば当然のリアクションであろう

「穩・・・アンタいったい、何をやらかしたのよ？」

「勘弁してください〜〜！！」

雪蓮の言葉に、穩は泣きながら声をあげていた

ますます気になってしまったのだが、そのもはや“殺気レベル”の視線におされ、雪蓮は出かかった言葉をグツと呑み込んだ

「と、とにかく・・・皆一刀との閨がしばらくないからって、それ
その方法で自分を慰めてたってわけね」

「そうだね、シャオも大体そんな感じかな」

「「あはは」」

と、そう言つて二人・・・雪蓮と小蓮は笑つた
あわよくば、このまま終わつてほしいと
そんなことを、考えながら

だがしかし、“やはり”というか・・・

「さて・・・次は、小蓮様ですね」

「うっ！？」

そうは、問屋が下ろしてはくれなかつた
憐れ、小蓮

「ね、ねえ冥琳

シャオさ、もうこれ以上はいいんじゃないかな？って、思うんだけど
もう十分、色々話したじゃない？」

「いえいえ、まだまだですよ
まだ時間的に早いですから、なるべく健全な話題からにしようとなり

ならばますは、“北郷に閨で呼ばれなかつた者は、いったいどのよ

うなぶうに自分を慰めているのか”というテーマでいこうと言った
じゃないですか」

「何ソレ、言っていないよ!？」

思いつきり、テーマ変わってるよソレ!?!?
ていうか、どっちにする健全な話題じゃないし!?!!

「北郷から下半身をとったら、何が残るといいますか?!?!?!
!?!?!?!」

「1」、ごめんなさいっ!?!?!?」

“あれ?なんで私、謝ってるの?”と、シャオは泣きそうになりな
がら思う

果てしなく理不尽だ

それからすぐ、“ていうかシャオ、そこまで言っていないし”と言
たいのをグツと堪えながら・・・彼女は、ひとまず深呼吸
そして痛む頭をおさえながら、冥琳を見つめ口を開いた

「け、けどシャオ・・・そんな、変なこととかしてなかったよね?」

「どうなのだ、明命」

「あれが普通だというのなら・・・小蓮様は、もう孫呉のお姫様と
か辞めた方がいいと思います」

「シャオ、そんなに酷かった!?!?!?」

「はい、ドン引きです」

「ドンびっ……!?!?」

驚く小蓮もよそに、爽やかな笑顔のまま頷く明命
容赦がない

対して、冥琳はというと……

「ぶっ……」

吹き出していた

小蓮の顔を見ない様、視線を逸らしながら

「だいじょう、びぶほっ……ゴホゴホ！
大丈夫です、小蓮様
皆、そのようなこと気にしませんよ」

「説得力ないんだけど
吹いてたじゃん、めっちゃ吹いてたじゃん
ていうか今、咽てたよね冥琳」

「……さて、明命

小蓮様の“痴態”を曝してしまえっ!!」

「おい、ちょっと待てコラァ!!」

“痴態”って言ったな!!!?

「それで・・・それを、どうするのですか？」

「どじするって・・・」

手に持った竹簡を見つめ、彼女は表情を歪める

この竹簡には、この場に集まった者達の“秘密”が記されている
そのような危険なもの・・・放っておくわけにはいかない

「燃やすわよ」

「ほう・・・それさえあれば、雪蓮に一矢報いることができるとい
うのに」

「っ、なんですって!？」

「ちよ、冥琳っ!？」

“ナニ言っちゃってんの!？”と見つめる先

冥琳は、雪蓮を一瞬見つめ、鼻で笑う

「その中には、勿論雪蓮の“痴態”についても書かれています」

「痴態って言うなっ!

せめて、秘密っていえ!!」

「なるほど・・・この中には、それほどの“痴態”が・・・」

「コラ、シヤオー!!」

だから痴態って・・・」

「あらあら・・・そんな口のきき方をしてもいいのかしら？
お・ね・え・さ・ま？」

「なっ・・・!?!」

――まさかの“裏切り”だった

竹簡を片手に、小蓮は楽しげな笑みを浮かべているのだ

「しゃ、シヤオ・・・？」

いったい、どういつつもりなのかしら？」

「どういつつもり、ねえ」

ニヤニヤと嗤う小蓮に対し、雪蓮は冷や汗をダラダラと流していた
これが意味することは、つまり・・・

「姉さま・・・ナニを、やらかしたのですか？」

「べ、別に大したことじゃないわよっ！！？」

「へえ、これが“大したことじゃない”ねえ？」

「くっ・・・シャオオオオオオオオ！！！！！」

“やらかした”ようである

彼から閨へと呼ばれない間、彼女は何か人に聞かれたら恥ずかしいことをやらかしたようだ
その目から、血の涙を流す幻が見える勢いだ

「く・ふ・ふ

いい気分だわ~~~~」

「ぐぬぬ・・・ぬう」

そんな姉の姿を、小蓮は愉快そうな笑みを浮かべ見つめていた
もはや、当初の“ガールズトーク”が迷子である

無論、そのようなことを気にする人物もいないのだが

さておき、状況は最悪である

“悪魔の書”を持った小蓮と冥琳 VS 秘密“痴態”を握られた者達

譲れない戦いが、始まったのだ・・・

「――“爆発”した

風よりも早く、小蓮に飛び掛かり

一瞬で、彼女のボディに膝を叩き込んだのだ

「ぐふう……」

と、そんな声をあげ倒れ込む小蓮

その様子を見つめ、雪蓮はニヤリと笑みを浮かべた

「あ、あはは……私に逆らおうなんて、百年は早いだよ」

大声で嗤い、彼女は小蓮の頭を足でツンツンと小突く
雪蓮さん、絶好調である

しかし……

「さつてと、あの竹簡は……」

「これのことか？」

「そうそう、それ……の……」

状況は、好転しなかった
いや、むしろ・・・“最悪”といってもいい

「冥・・・り、ん？」

「どうした雪蓮？」

そんな、“おいおい、マジでやべーよコレ。なんでよりによって、コイツが持ってるの？”みたいな顔は？」

「だ、大体合ってるかな・・・」

そこまで、具体的ではないが
皆が皆、そう思っていたに違いない

そんな、何とも言えない空気の中
最初に口を開いたのは・・・もちろん、冥琳である

「それでは、“ガールズトーク”の続きといこうか？」

「ひっ・・・!？」

彼女達の“ガールズトーク”は

――まだまだ、
始まったばかりだ

く終われく

第14話 乙女かしまし!? ぶっちやけガールズトーク 〱 呉国の場合〱 (後

どうも、お久しぶりです

月千一夜でありんす

いや、うん・・・もうね

久しぶりの、純度100%のカオスな本作

いかがだったでしょうか?

いつか投稿した、ガールズトークの呉編ですww

それでは、またお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031v/>

真・恋姫†無双-萌えなる乙女と、賑やかなる日々を-

2011年11月30日23時56分発行